

小丸山(中山中)遺跡発掘調査報告

1993年3月

岡山市教育委員会

『小丸山（中山中）遺跡発掘調査報告』正誤表

頁	行	誤	正
例言 小丸山遺跡位置図差し替え			
5	1 5	関わり	関り
9	2 4	基	下
3 8	1 8	瓦頭	瓦当
3 8	2 0	瓦頭	瓦当
3 8	2 4	瓦頭	瓦当
4 5	遺物 1 5 0 観察表下段	タイの目	胎土目
4 5	遺物 1 6 3 観察表上段	瓦頭	瓦当
4 5	遺物 1 6 4 観察表上段	瓦頭	瓦当
4 5	遺物 1 6 9 観察表上段	瓦頭	瓦当
4 5	遺物 1 7 0 観察表上段	瓦頭	瓦当
5 0	第 4 9 図	西辛川城	西辛川城
5 1	2 9	振り切り	堀切
5 3	表 1 の 7 行目	ウシグサ	ウシクサ
5 6	2 7	共業	協業
6 0	第 5 4 図後 8 期	極元遺跡	極本遺跡
6 4	2	「一遍上人聖絵」	『一遍聖絵』
6 5	1 4	搬入されてもの	搬入されたもの
6 5	1 6	瓦頭	瓦当
6 5	1 9	瓦頭	瓦当
6 7	4	瓦頭	瓦当
6 7	5	瓦頭	瓦当
6 7	1 5	瓦頭	瓦当
6 8	3 2	見出だせない	見出せない
7 2	5	斜め	斜

7 3	1 6	意識している	意識している
7 3	2 4	植木遺跡	植木遺跡
7 4	2 5	序々に始まり。	徐々に始まり、
7 7	5	歎進職	勧進職
7 7	1 3	津高駅屋	津高駅家
7 7	2 3	対称的	対照的
あとがき	1 0	掛け替え	掛け替
あとがき	2 0	取り組	取り組み



序

岡山市は近年の広域合併の結果、わが国の古代社会において中核地域の一つでありました吉備国の中核を占めるようになり、古墳を始めとしました多種多様な遺跡が多数所在しており、その密度は全国的にも有数地の一つと思われます。これら埋蔵文化財の保護保存は現代社会の経済成長に伴う宿命的な社会問題となっており、行政課題として文化財保護行政の中心的な施策であります。

岡山市教育委員会は、都市開発や地域開発が増加の一途を辿る今日的状況の内で、埋蔵文化財の保護保存と諸々の開発との調和を図るために、この数年来各種の遺跡の発掘調査を実施しておりますが、その社会的要求の増大の一途に対して有効な行政的保存施策を苦慮しながらも、その重要性を痛感して銳意取り組んでいます。

此度報告致します小丸山（中山中）遺跡は、市立中山中学校のプール及び柔道場新築工事に伴って記録保存の発掘調査を実施致したものであります。

発掘調査につきましては、発掘調査対策委員会の諸先生方のご指導と関係者各位や発掘参加者のご支援を受けて実施され、中世を中心とする遺構と遺物を検出致しまして、小丸山遺跡の一隅の実態を明らかに致しております。発掘調査の成果は発掘に際しての関係者皆様方のご指導とご支援の賜物であり、皆様方を始め調査担当者各位に対しまして、心から謝意を表する次第であります。

この報告書にまとめました調査成果につきましては、ご検討、ご批判を頂き、少しでも岡山地方の中世史の研究に寄与できるならば幸に存じます。

平成5年3月31日

岡山市教育委員会

教育長 奥山 桂

例　　言

1. この報告書は、岡山市教育委員会文化課が平成3年4月から同年7月にかけて実施した岡山市中山中学校のプール及び柔剣道場新築事業に伴う岡山市辛川市場地内の発掘調査に関するものである。
2. この報告書の作成は岡山市教育委員会文化課が実施し、出土物の整理と報告書の執筆、編集及び出土物写真撮影は草原が行った。
3. 報告書の作成にあたって、11、12層採集土壌のプラントオバール分析を古環境研究所に依頼した。
4. この報告書に用いている高度値は標準海抜高度である。
5. この報告書に用いている方位は磁北である。



目 次

第一章 位置と環境.....	1
第二章 調査の経過.....	9
第三章 遺構と遺物.....	16
I 近世.....	16
II 中世.....	17
III 古墳時代.....	31
IV 包含層.....	32
V 出土土器観察表.....	40
第四章 小丸山の測量調査.....	47
第五章 採集土壤の植物珪酸体分析.....	52
第六章 結語.....	55
1 中世以前.....	55
2 中世.....	58
図版.....	第1～第16

挿 図 目 次

第1図 辛川大池(仮称)遺跡探集遺物	2
第2図 辛川大池(仮称)遺跡探集遺物	3
第3図 飯盛山古墳測量図	3
第4図 今岡遺跡探集遺物	5
第5図 周辺遺跡分布図	6
第6図 発掘位置図	13
第7図 発掘区域図	13
第8図 西壁土層図	14
第9図 近世遺構平面図	15
第10図 池状遺構実測図	16
第11図 池状遺構出土物	16
第12図 中世遺構平面図	18
第13図 井戸状遺構実測図	19
第14図 井戸状遺構出土遺物実測図	19
第15図 土壌1実測図	20
第16図 土壌1出土遺物実測図	20
第17図 土壌2実測図	20
第18図 土壌2出土物	20
第19図 土壌3実測図	21
第20図 土壌3出土物	21
第21図 溝1実測図	22
第22図 溝1出土物	22
第23図 建物1実測図	23
第24図 建物1出土物	23
第25図 建物2実測図	24
第26図 建物2出土物	24
第27図 建物2出土物	24
第29図 建物3実測図	25
第30図 建物3出土物	25
第31図 建物4実測図	25
第32図 建物4出土物	25
第33図 柱穴列1実測図	26
第34図 柱穴列1出土物	26
第35図 柱穴列2実測図	26
第36図 古墳時代遺構平面図	27
第37図 土器溜まり実測図	28
第38図 土器溜まり出土物(1)	28
第39図 土器溜まり出土物(2)	29
第40図 土器溜まり出土物(3)	30
第41図 包含層出土遺物(1)	33
第42図 包含層出土遺物(2)	34
第43図 包含層出土遺物(3)	35

第44図	包含層出土遺物(4).....	36
第45図	硬160拓本部分.....	37
第46図	包含層出土遺物(5).....	37
第47図	小丸山測量図.....	48
第48図	小丸山段実測図.....	49
第49図	西辛川城柵張図及び周辺小字分布図.....	50
第50図	植物珪酸体（プラント・オバール）の顕微鏡写真.....	54
第51図	足守川以西地域法量分布図.....	59
第52図	吉備中山周辺地域法量分布図.....	59
第53図	旭川下流地域法量分布図.....	60
第54図	土師質土器法量別分類図.....	60
第55図	天神澗遺跡土器溜まり出土遺物.....	62
第56図	土師質土器地域別分布図.....	64
第57図	木蔵タイプ軒平瓦分布図.....	65
第58図	吉備考古館収蔵軒平瓦実測図.....	66
第59図	的場勇氏網浜庵寺採集軒平瓦実測図.....	67
第60図	成形技法別軒平瓦分布図.....	69
第61図	軒平瓦実測図（報告書原図に接合部を加筆）.....	69
第62図	県下出土方形陶硯分類図.....	72
第63図	小丸山遺跡周辺小字分布図.....	75

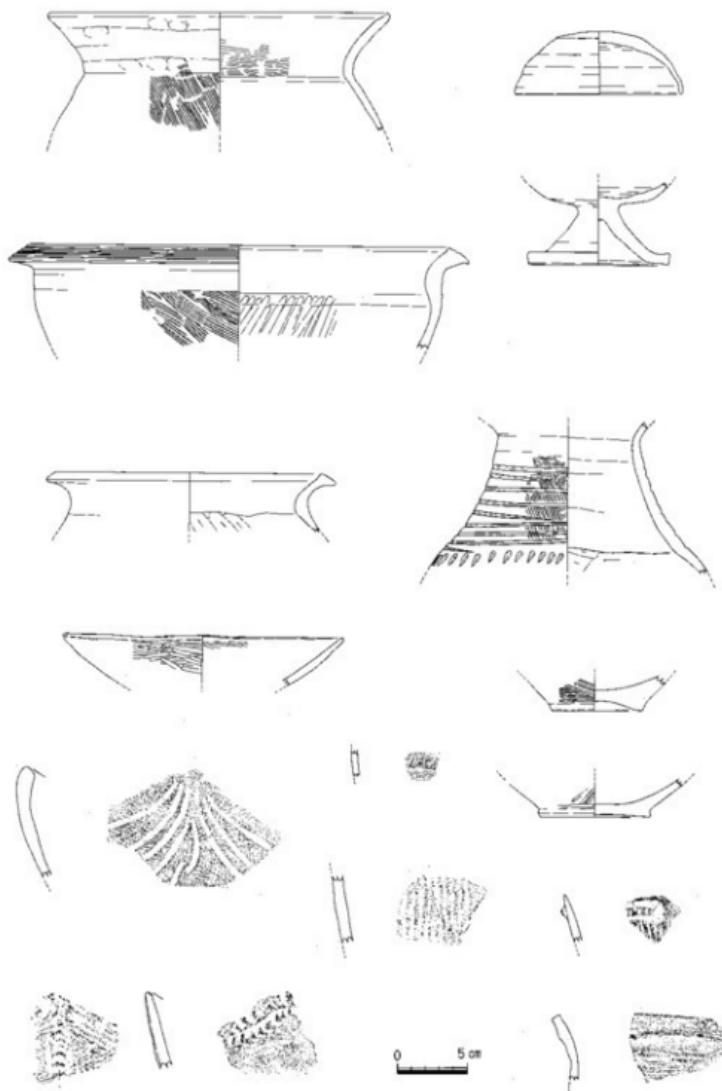
第一章 位置と環境

小丸山（中山中）遺跡は瀬戸内海に面した備前国南部西側の沖積平野（以下一宮平野と仮称）に位置する。この辺りは岡山市域に含まれているが、元は昭和30年に一宮村、馬屋下村、平津村の三村が合併して一宮町となり、さらに当時の施策として昭和46年に岡山市と合併したものである。そして現在、岡山市街地のベッドタウンとして宅地化がなされ、また条里地割りのよく残っている北側水田部には山陽自動車道の建設がすすめられており、周囲の景観は急激に変貌しつつある。

当遺跡背後の丘陵地帯は、北から南にかけて階段状に低くなってしまっており、西側の山地部を構成する古生層の走向が西南西—東北東方向で、県北一帯に広がる吉備高原の南縁地域にみられる主要な方向と一致していることから、地形的には当地域が吉備高原と岡山平野の境に位置していると言える。沖積面には、東から中川、砂川という2本の河川が南流しており、下流で津高から流れてきた笠ヶ瀬川に合流して児島湖へと注いでいる。中川は岡山市津高の宮古に、砂川は岡山市津高日応寺に源を発する中小河川で、前者は9km^①、後者は15km^②の流路延長をもち、上流部では急峻な地形を流れている。砂川は下流部の辛川市場辺りからは天井川となり川水は少なく伏流しており、洪水の被害を受けやすい地帯を形成しており、付近には洪水時の避難地を意味する「スイヤ」の小字名が残っている。現在平野部は水田地帯として利用されているが、隣接する旭川下流域の平野や足守川流域の平野と比べて海拔高度が低く、2.5mのレベルが東から山崎—辛川市場—吉備津彦神社を結ぶラインにきており、かなり遙くまでこの位置付近、即ち一宮平野半ばまで海が入り込んでいたことを推定させられ、南部一帯が水田として耕作可能な沖積平野として安定するのは古代以降のことと思われる。

一宮平野での縄文時代の遺跡は殆ど確認されておらず、西辛川の天神山で晩期の土器が採集されていただけであったが、最近辛川大池の西の山裾部で、中期から晩期にかけての土器とそれらに伴うと思われる石鎚、石鋤（図1、2）が採集^③されていることや、最近の沖積地面上に立地する縄文期の遺跡の調査成果や、山の神西遺跡^④や余町遺跡^⑤など県南部の扇状地頂部付近の河岸段丘上に縄文時代後期の遺跡が形成されていることが確認されていること等から、一宮平野北半の大窟付近や、西辛川周辺の山裾部に縄文期の集落遺跡が存在することは十分に想定できる。弥生時代前期も含めて一宮平野での沖積面の開発時期は総社平野や、岡山平野（旭川下流域の平野）とそれ程隔りがない時期に行われていた可能性が指摘できる。

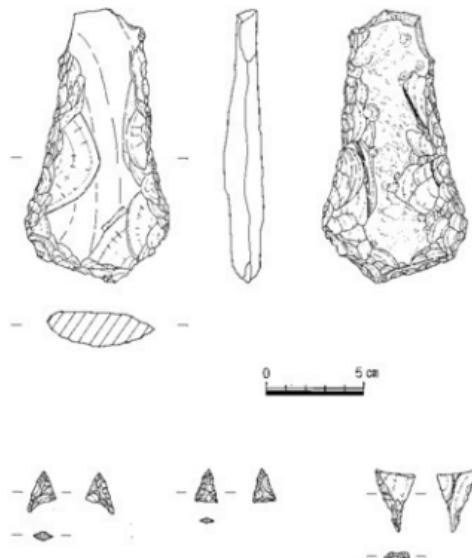
弥生時代の遺跡は一宮平野北西部の磯ヶ部^⑥から後期前半の土器が出土しており、辛川大池でも後期中頃の土器片が採集されている。これら以外に芳賀、大窟周辺の丘陵部や山裾部や辛



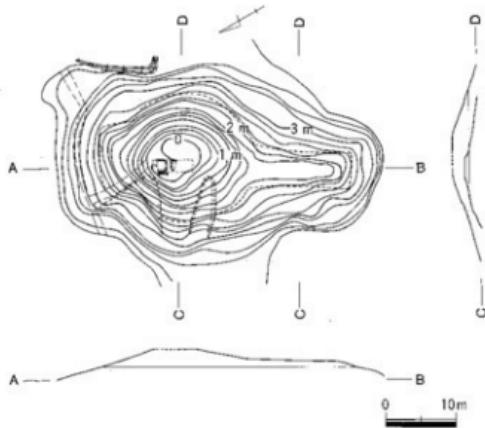
第1図 辛川大池（仮称）遺跡探集遺物

川市場、西辛川等でも土器片や石器の散布が確認でき、具体的な遺跡の調査例がないため明確でないが、特に辛川市場や大庭周辺には土器の散布が多く、かなりの規模の集落遺跡が想定でき、一宮天神山古墳群を生み出す母体となつた集落であった可能性は十分推定される。弥生時代後期後半と推定される墳丘墓が平野北西部の大庭観音堂^⑨と平野南東部の西脇津^⑩で調査されており、どちらも竪穴式石室を内部主体としていることが判明している。これらの他に一宮平野での墳丘墓の実態はわからないが、その候補となるものが幾つかあり、一宮平野を基盤とする複数の共同体首長層の顕在化が予想できる。このことは、一宮平野も確實に古墳時代への指向が始まっていたものと理解される。

古墳時代になると平野中央部の西側山塊に前方後円墳一基と円墳三基からなる一宮天神山古墳群^⑪が築かれる。1号墳の円墳の粗雑な削石で構成された竪穴式石室からは三角縁三神三獸鏡が一面出土しており、一宮平野で現在確認



第2図 辛川大池（仮称）遺跡採取遺物



第3図 飯盛山古墳測量図

されている最古の古墳である。しかし石室が板石積みでなく埴形も円墳であるという点に、古墳時代初頭に於ける一宮地域の首長の政治的位置を示しているといえる。2号墳は前方後円墳で全長約60m、T字型に配置した2基の竪穴式石室が検出されており、1号墳に統いて築造されたと考えられている³⁰。平野北東部の山塊にも前期の範疇に入ると思われる前方後円墳が築かれている。飯盛山古墳で、測量調査の結果全長35.5m、前方部が細長く柄鏡状になることが確認された³¹（図3）。後円部西側がかなり抉られていてはっきりしないが、後円部は正円ではなく、長楕円形か、もしくは背後に造出しが突出部が付属するような墳形になると推定される。墳頂部には花崗岩の割石を整然と積んだ竪穴式石室があり、長さ約5.5m、幅約1.5mで、石室内部には赤色顔料の塗布が認められる。当古墳は前方部の形状が最古式のバチ形でなく柄鏡状であるということから、一宮天神山1号墳に後出し、一宮2号墳に平行するか、やや古い時期に築造されたと考えられる。

一宮平野では前方後円墳の築造は前期以降行われなくなる。同じように備中地域全体をみても100mを越える規模の前期古墳である桜井茶臼山古墳と埴形の似ている車山古墳、行燈山古墳（崇神陵古墳）を1／2縮小した相似形をしている中山茶臼山古墳³²が吉備中山山塊に相次いで築造された後、中期古墳の築造は足守川中流域へと移動する。備前地域でも100mを越える規模の前期古墳は金蔵山古墳を最後に途絶え、中期後半と推定されている山陽町の両宮山古墳まで築かれない。逆に牛窓湾沿岸や玉島地域や小田川流域等のように中期になると前方後円墳を築造し始める地域があり、大体前期と中期の間に前方後円墳の築成の変化が小地域を越えて共通するよう起こっている可能性も考えられる。またこの築成の変化は畿内の巨大前方後円墳を築造している古墳群が前期から中期に於いて、大和南部から北部へさらに河内へと移動する動き³³とも連動しているとも考えられ、これらのことと古墳時代に於ける政治的な再編の結果と評価しうるかどうかは、さらに個々の古墳を年代的に詳細に検討していかなければならないが、ただ一宮平野での前方後円墳の築造が見られなくなることは、吉備地域全体はもとより汎日本的な中で理解しなければならない現象として位置付けていかなければならないと思われる。また、前方後円墳の築造の停止がその地域の首長権の政治的な没落を示すだけではなく、首長が畿内へ移動し中央豪族化するといった背景も想定できると思われ、一宮平野中央部では天神山2号墳以降この地を掌握したことを示すような顯著な首長墓というものが築造されず、後の奈良期にこの辺りが律令国家の集権政治を貫徹する骨格として制度化された駅家の資養郷である馬屋郷になることなどは示唆的である。

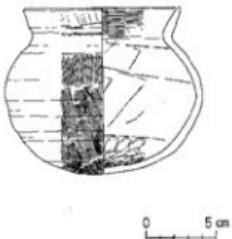
古墳時代後期の古墳は平野北側の丘陵部に多数築かれている。これらのうち補付きの古墳は全長9.0m、玄室長6.7m規模のものが最大で、宗形池古墳（全長7.0m、玄室長5.4m）、万成塚古墳（全長9.0m、玄室長6.7m）、東庄塚古墳（全長6.5m、玄室長4.0m）、松尾大池北西古

墳（全長6.5m、玄室長4.5m）が大きい部類に入る。無袖の古墳は袖付きの古墳とオーバーラップして多数築かれている場合と、そうでなくて単発或いは2基程度の少数築かれている場合があり、前者は平野北東部の芳賀周辺で見られ、そのうち全長7m規模が最大で、全長3m規模のものまで分布する。後者は平野北西から西部に分布し、特異な例として奥壁に接して石棚が構築されている磯ヶ部古墳（仮称）がある。磯ヶ部古墳は全長5.3m、切石を整然と積んでおり、一宮平野内の横穴式石室のうち最も新しい時期の部類に入ると思われる。また磯ヶ部古墳の西にある三光山から須恵器の家形切妻式陶棺が出土¹⁰しており、明確な出土地点は詳らかでないが、陶棺は小丸山に現存している。後期古墳の多くが集造された丘陵部には多数の鉄滓が分布しており、砂鉄か鉄鉱石かのいずれを原料としていたかは別として、製鉄が盛んに行われていたことが予想される。この製鉄と後期古墳との時間的な平行関係は明確でないが、同じ津高郡内にある津高団地造成地内遺跡¹¹での調査成果から、丘陵部の後期古墳の展開は多分に周辺で行われていた製鉄と関わりがあったものと考えられる。

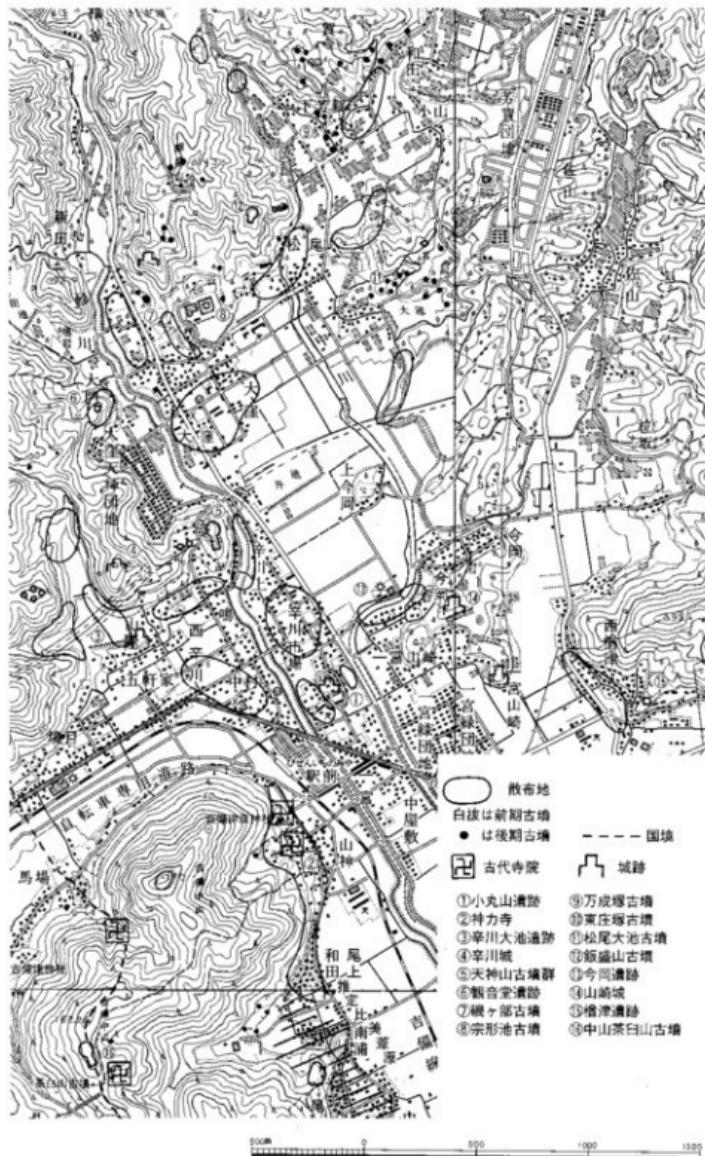
古墳時代の集落は、辛川大池（図1）等のように弥生時代の集落と同じ位置に形成されるものの他に、今岡遺跡（図4）等の様に新たに形成されるものが多くあるようであるが、具体的な調査が行われていないため明確ではない。

奈良、白鳳期の一宮平野は津高郡馬屋郷に属し、平野北半には古代寺院は存在しないが、条里を示す地割りと字名が現在まで残っている。条里地割りの方向は隣接する三野郷や、新しい時期に干拓されていったと思われる南部平野まで続いているが、養老令の注釈書「令義解」の田長条に書かれている一筆耕地の形状である半折型は、辛川市場南付近以北に分布し、以南には長地型が分布するという特徴がある。このことはそれぞれの水田の立地する環境の違いという以外に開発時期の差を反映している可能性も考えられる。一宮平野南半に於ける二彩の小塔片や瓦塔片、平城宮式瓦等を出土した神力寺¹²や、その背後にある竜山石製の家形石棺を有する石舟古墳は三野臣に所属するものとも理解され、それは「津高」を氏名とする氏族が見られず、「津高郷充券」で津高郡の少領に三野臣が任じられていることから、津高郡域は元来旭川下流域を基盤とする三野臣の支配した地域とする考え方¹³である。しかし一方で正倉院文書の「備中國大税負死亡人帳」に旭東部を基盤としていた上道臣の名が備中國都宇郡にみられるということもあり、奈良期の在り様がそのまま時代を遡るとはいえないようにも思える。

神力寺北側には『延喜式』記載の式内社ではないが、少なくとも平安時代後半には備前國の一宮となっている吉備津彦神社が存在しており、境内には神仏習合思想の展開による神宮寺の



第4図 今岡遺跡探集遺物



第5図 周辺遺跡分布図

建立も行われている。また建久四年（1193年）に治承の兵火で焼失した東大寺再興のため備前国が東大寺勧進職重源の管掌となり、その重源の活動拠点としての「常行堂」が建てられていたことが『南無阿弥陀仏作善集』にされている。実際、境内南の神宮守跡付近から「吉備津宮常行堂」銘や梵字を陽刻した瓦が出土しており、これらは万富で焼かれた東大寺所用瓦と非常に似ている。

「常行堂」が建立されたこと、吉備津彦神社東隣に「市場」の地名が存在すること、吉備津彦神社南山裾部に古代～中世の土器片が多数散布すること等は、当地が古代から中世にかけての経済的な求心地を形成していたことに起因すると思われる。一方小丸山北部の旧山陽道沿いにも「市場」、「元妙寺」、「妙法寺」という地名がかたまって存在しており、ここには吉備津彦神社の門前町的な市場ではなく、山陽道という陸路と、中川、砂川の水路との結節点である交通の要所に形成された市場が想定される。そして時期が下がるが文保年中（1317～1318年）為遠という長船系の刀匠が「唐河」で作刀¹⁰しており、辛川市場（市庭）は周囲に多くの刀鍛冶を擁した備前の福岡市と同じ様相を呈していたと考えられる。ただ辛川市場（市庭）の前身については古代駅家制の津高駅家に比定する考えがあったが、山陽道は大路で外国使節が通行するため駅家には瓦葺建物があったとされ、実際、播磨の駅家に瓦が伴うことが最近の調査から確認されており、津高駅家は平城宮式瓦の出土している東の散泊岬を越えた位置にある富原遺跡¹¹を比定する考えが最近は有力である。

莊園については、奈良時代の「大安寺縁起并流記資財帳」に「備前国毫百五十町、開廿三町、未開毫百廿七町…津高郡五十町、比美葦原、東堺江、西備中堺、南海、北山并百姓墾田堤之限」とあり、一宮南半の一部が大安寺領となっていたことが分かるのと同時に、奈良時代になっても周囲にはかなりの未開地の葦原が存在していたことが予想される。なお比美葦原の範囲については、尾上周辺に想定され、北浦に「大土手」という小字名が一町分みられることから、これを直ちに「百姓墾田堤」に比定するのは短絡的であるが、この字名以南の山裾部がやや広くなだらかな傾斜地となっていることから、一応この辺りを北限に想定しておきたい。

一宮平野北半の莊園については文献等が残っておらず明確でないが、吉備津彦神社との奉納関係¹²から恐らく吉備津彦神社の莊園となっていたものと思われ、「成兼」、「徳光」、小丸山遺跡の「長善名」等の莊園の徵稅単位である「名」を示していると思われる地名が各所に残っている。

辛川市場から西辛川にかけて分布調査した結果、五ヶ所の遺物散布地が確認できた。それらの散布地には中世の土器片が主に見られ、中世を主体とした集落遺跡の存在が予想される。その他に砂川や天神山周囲でも中世の土器が若干散布しており、範囲は確認できないものの辛川市場周辺には中世の遺跡は相当数あるものと思われる。

第一章 位置と概要

(1) 岡山大学教育学部社会科教
室内地域研究会『一宮町の歴
史と現代地域史研究第14集』
1970年

金光堅志『一宮町の歴史』
一宮町教育委員会 1970年

一宮町教育委員会『郷土誌
本いのちみや稿本』 1969年

(2) 橋本賢司氏採業、資料の提
供を受けた。

(3) 藤田憲司・中山頼夫『倉敷
市玉島地区とその周辺の新發
見縄文時代資料』『倉敷考古館
研究集報18』 1984年

(4) 小郷利幸他『岡山市足守地
域の地域史研究（1）』『古代
吉備第12集』 1990年

(5) 岸正一『馬屋下村史』馬屋下村 1971年

(6) 近藤義郎『第四章弥生墳丘墓の成立と展開』『岡山県史原始・古代Ⅰ』岡山県史編纂委員会 1991年

(7) 檜津古墳発掘調査団『檜津古墳発掘調査報告』 1978年

(8) 鎌木義昌『一宮天神山古墳群』『岡山県史考古資料』岡山県史編纂委員会 1986年

(9) 萩原克人『第五章古墳時代前期』『岡山県の考古学』吉川弘文館 1987年

(10) 岡崎隆司・河田健司・近藤正之・高橋伸二氏らの助力を得て測量調査を行った。

(11) 中山茶臼山古墳の実測図を裏トレイスして比較した。

(12) 都出比呂志『古墳時代首長系譜の継続と断絶』『待兼山論叢史学篇22号』大阪大学文学部 1988年

(13) 岡山市教育委員会が発掘調査を実施

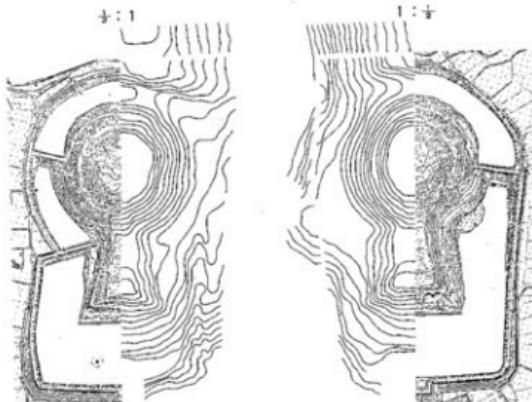
(14) 間壁彦子『官寺と私寺』『古代の日本』4中国・四国 角川書店 1970年

(15) 吉田晶『岡山県史古代Ⅱ』岡山県史編纂委員会 1990年

(16) 今田和津衛門常政『日本刀匠大鑑』 1975年

(17) 伊藤晃『富原北堀寺・富原遺跡』『岡山県史考古資料』岡山県史編纂委員会 1986年

(18) 矢吹寿年他『吉備津彦神社御田植祭』吉備津彦神社御田植祭記録保存委員会 1979年



第二章 調査の経過

小丸山遺跡は小丸山の西裾部を中心南北約400m、東西約250mで、東西は中山中学校の敷地から砂川までの範囲で、南北は小丸山の北端に平行する範囲に土器の散布が確認できる。しかし遺跡地一帯は付近を流れる中川、砂川の両河川からの浸蝕による影響を受けていたと予想され、実際の遺跡の範囲は現状での遺物散布状況から推測するのは困難と考えられていた。

小丸山遺跡の南端付近にあたる岡山市中山中学校敷地内の既存プール跡地に同中学校のプール及び柔剣道場新築事業が岡山市教育委員会当局によって設定された。用地が小丸山遺跡の付近であることから、この決定に伴って岡山市教育委員会施設課長から同文化課長宛に平成元年8月3日付けで、当用地の埋蔵文化財等の存在状況確認調査依頼がなされた。この依頼を受けた文化課は当該地が小丸山遺跡内に含まれるかどうか微妙な位置であることから重機による試掘の必要性を指示し、文化課職員の立会に基づいて建設予定地南端と北端の二ヶ所で試掘を行い、僅かな間層を挟んで中世前期の土器包含層が存在することを確認した。その結果から、設計変更等により遺跡の保存を図るのは不可能であることが判明した。このため文化課は同年9月21日付けで、当該地が埋蔵文化財保蔵地にあり、文化財保護法の適用を受け、プール及び柔剣道場用地の記録保存による事前の行政的措置の必要な旨の試掘調査に関する回答を施設課に通知し、その実施に対する両者の連絡、協議を要請した。同時に当該地が小丸山遺跡に含まれることが明確になったため岡山市教育委員会教育長から文化庁長官宛に同年9月7日付けで文化財保護法第57条の5第1項に基づく「遺跡発見の通知」が出された。文化課と施設課で協議を重ねた結果、記録保存を平成3年度中に実施することで合意に達した。発掘調査の着手に先立ち、平成3年3月1日付けで岡山市長から文化庁長官宛に文化財保護法第57条の2第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」が提出され、続いて同年3月8日付けで岡山市教育委員会教育長から文化庁長官宛に文化財保護法第98条の2第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘通知」が提出された。

以上の経緯の基に岡山市立中山中学校プール及び柔剣道場新築予定地の発掘調査は平成3年4月10日から同年7月30日にかけて実施された。

発掘調査組織

発掘調査主体者 岡山市教育委員会教育長 奥山 桂

発掘調査対策委員 稲田孝司（岡山大学教授）
鎌木義昌（岡山理科大学教授）
西川 宏（山陽学園教諭）
西原礼之助（岡山市文化財保護審議会会長）
間壁忠彦（倉敷考古館館長）
水内昌康（岡山市文化財保護審議会副会長）

発掘調査担当者 青山 淳（岡山市教育委員会文化課長）
出宮徳尚（岡山市教育委員会文化課長補佐）
根木 修（岡山市教育委員会文化課文化財係長）
神谷正義（岡山市教育委員会文化課文化財係主任）
(調査員) 草原孝典（岡山市教育委員会文化課文化財保護主事）
(経理) 沼 智恵（岡山市教育委員会文化課主事）

発掘調査現場作業員 青木敏夫
板野輝夫
榎 顯司
大溝 神
高坂義視
小西 愿
佐々木龍彦
長門卓正
難波俊一
則武福市
峰谷由太郎
横田順一
大森ヨシ子

発掘調査現場事務員 森脇光世

調査にあたり、対策委員の先生方や地元考古学研究者のご教示・ご助言を頂いた。

発掘の実施に際しては、岡山市立中山中学校から諸般の便宜に預かった。また造成土の削除、

搬出等の土木作業に関しては株式会社吉原工務店の多大な助力を得た。

諸々にご助勢下さった方々に深謝する次第である。

経過と概要

調査地は小丸山南西裾部に接する位置で、南北の長さ40m、東西の長さ22.75mで、調査面積は910m²である。調査区内の土壤が崩落しやすい砂質であることから周囲には鉄鋼板を打ち込んで補強し、学校建設時の造成土が0.6m程あつたため重機によって除去した。発掘区の層序は調査区西側の南北方向の断面観察から得た。(図8)

2層は旧水田耕土で、以下5層まで畦畔は検出できなかったがほぼ水平に堆積していること等から同じく水田層と考えられ、2層直下で18世紀頃の磁器片を含む池状遺構が3~5層をきっており、なおかつ13世紀の集落遺構の上面に形成されていることから、13世紀以降現代まで続く水田層と考えられる。個々の土層の時期については遺物が中世の土器以外殆ど含まれないため明確には出来なかったが、少なくとも3、4、5層には近世の磁器は含まれない。

13世紀頃の掘立柱建物や井戸状遺構や溝等が6層の上面北側に形成されている。遺構の密度は北側にいくにつれ濃くなっている。またそれと共に6層上面のレベルも高くなっている。6層上面北側には中世土器を多量に含む包含層の35層、36層、37層、38層があり、それらは調査区北側に展開すると予想される中世集落からの斜面堆積と考えられる。中世集落の基盤となる6層は粗砂で北西から南東方向にレベルが低くなっている。この方向は調査区西を南北に流れている砂川の浸蝕によった小丸山南端部の方向と同じで、小丸山遺跡の中世集落は砂川が形成した河川敷上に位置していたと考えられる。

6層以下11層まではほぼ水平に堆積した粘質土層で、11層からはプラントオバール分析の結果水田層であることが予想されており夫々も水田層と思われる。12層以下は湿地状堆積で12層上面には5世紀末から6世紀初頭の土器溜まりが調査区南端で検出されている。また平安時代初頭の須恵器の坏が8層から出土しており、一応6~8層が平安時代初頭から13世紀までに形成された水田で、9~11層が6世紀から平安時代までに形成された水田と推定している。

12層上面の土器溜まりは特別な掘り込み等ではなく若干の窪地に集中して土器だけを投棄している。土器は殆どが土師器の高坏で僅かに土師器の壺、須恵器が伴う。調査区内では他に同時期の遺構は検出されなかったが、土器溜まり周辺の調査区南端西側で同時期の高坏片が出土しており、同様の土器溜まりが周囲に存在する可能性はある。ただ調査区北側には土器等の遺物は全く見られず、また調査区北側に鉄鋼板を打ち込んだ際、現地表面下5mの地点に達しても隣接する小丸山からの基盤層といえるものは確認されておらず、調査区北側の小丸山周囲には裾部まで湿地状態であったと考えられ、集落が形成されるような地形は予想できない。また調

査区南側でも湿地状態が続いているようであり、近辺に土器溜まりをつくった集落の存在は想定できそうにはない。

小丸山が全長150mにも及ぶ前方後円墳で、周囲に盾形の周濠を巡ぐらしているとする考えもあったが、今回、前方部に想定される部分に調査区が位置しているにもかかわらず、その痕跡等は確認されなかったことや、発掘調査と並行した小丸山の測量調査の結果からそのことは否定された。

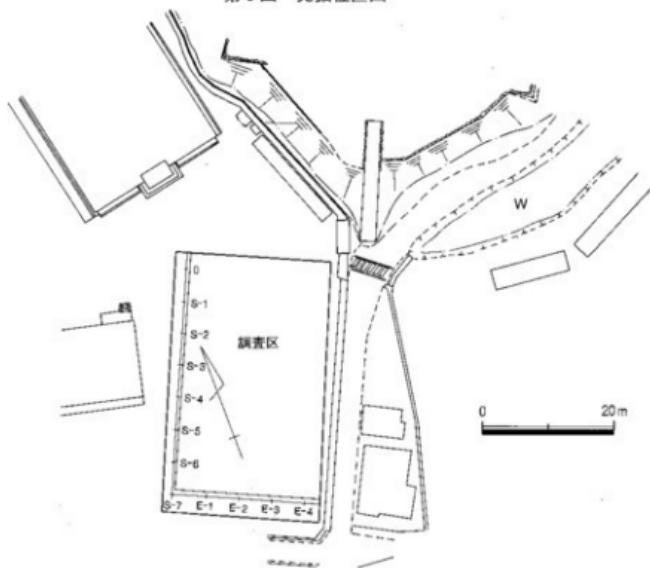
発掘日誌（抄）

- 平成3年4月10日 発掘器材の搬入と造成土除去の立会
- 15日 発掘開始、調査区北側旧水田耕土掘り下げ
- 16日 基準クイ設定
- 22日 池状遺構検出、握り下げる
- 5月2日 調査区南側旧水田耕土掘り下げ
- 18日 中山中学校郷土史クラブ所属の生徒に体験発掘を実施
- 27日 近世面写真撮影・実測
- 28日 近世以前の水田層掘り下げ
- 6月5日 中世包含層上面精査
- 6日 調査区北側で中世の遺構を検出
- 18日 中世面掘り上がる
- 19日 中世遺構面の写真撮影・実測
- 21日 6層以下の水田層を握り下げる
- 24日 6層以下水田層を精査
- 7月8日 調査区南端で土器溜まり検出
- 18日 発掘調査対策委員会開催
- 25日 土器溜まり写真撮影・実測
- 26日 調査区西壁断面の写真撮影・実測
- 27日 調査区周囲の掘り下げ
- 29日 調査区西壁でプラントオバール分析のための土壤を採集
- 30日 調査終了、発掘器材撤去

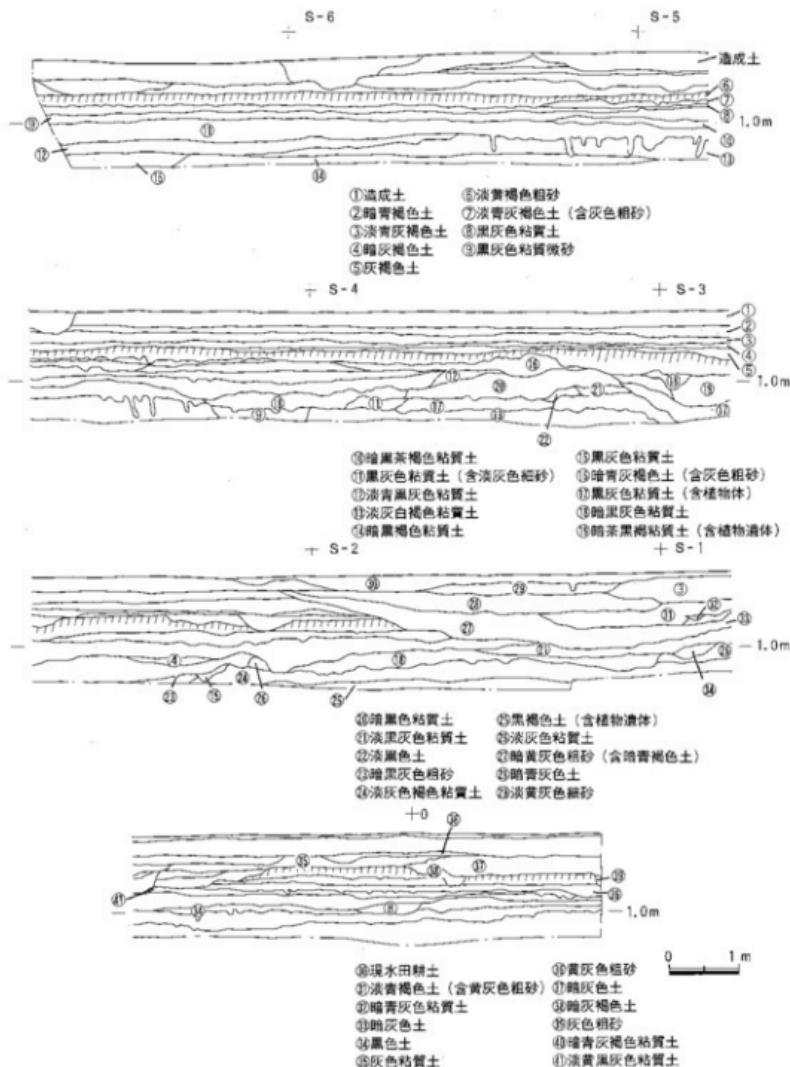


0 100m

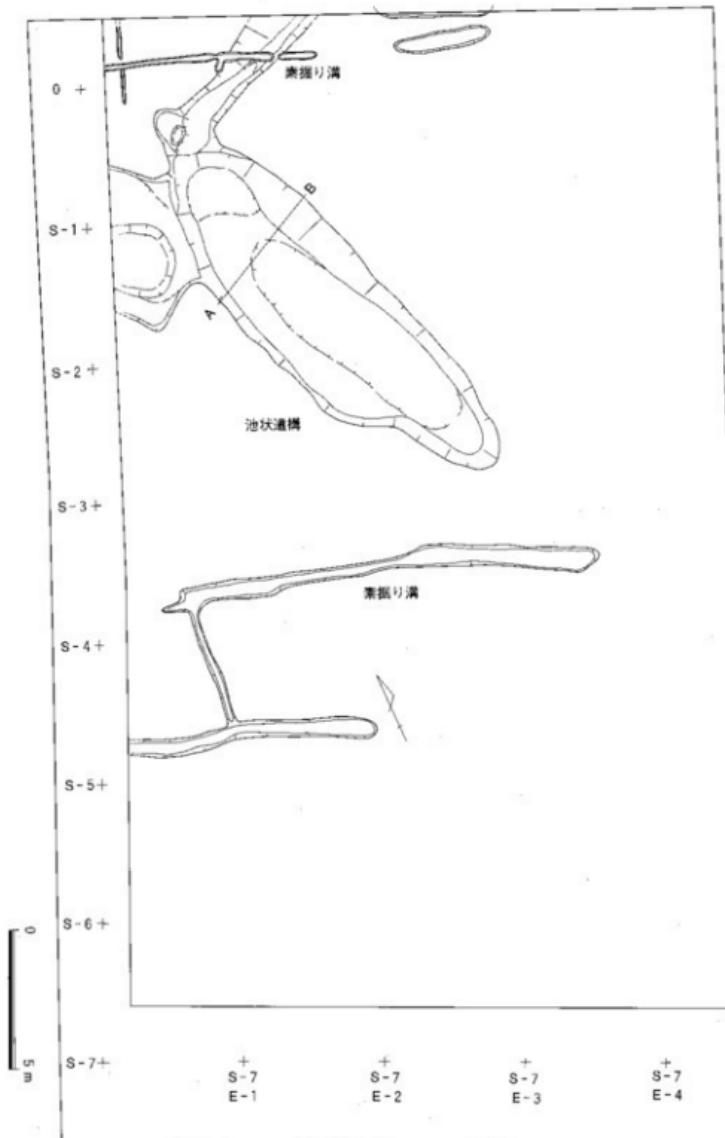
第6図 発掘位置図



第7図 発掘区域図



第8図 西壁土層図



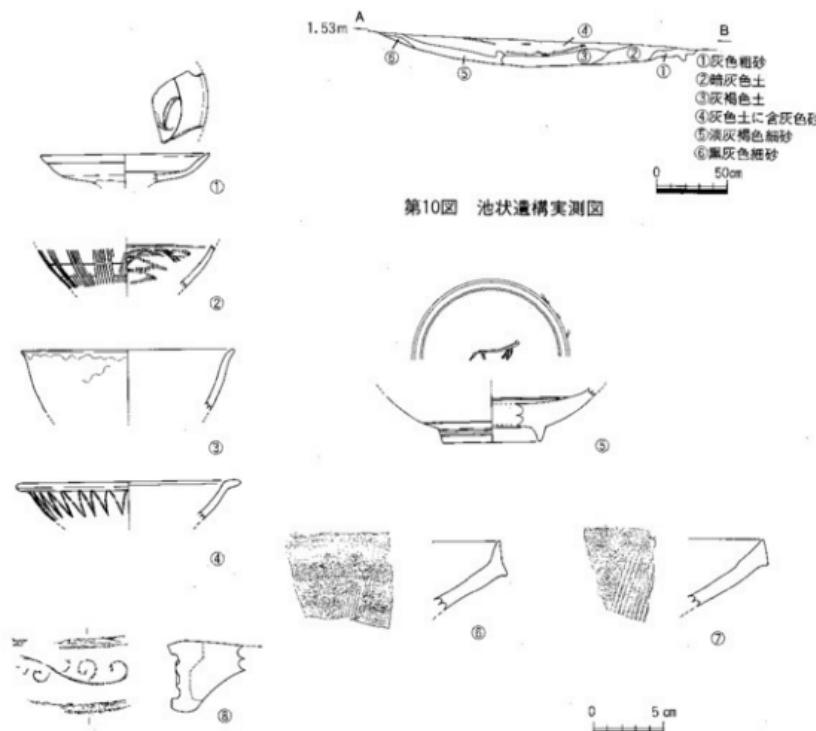
第9図 近世造構平面図

第三章 遺構と遺物

近世から古墳時代にかけての遺構が検出され、それぞれの層序関係は前節を参照されたいが、ここでは各遺構とそこから出土した遺物の概要を説明する。

I 近世（図9）

池状遺構（図10、11）



調査区北西コーナー付近から南東方向へ長楕円形に広がるプランである。長径約13.8m、短径約5.2mの規模で、検出面のレベル高は1.5m付近である。最深部は検出面から約20cmで、底部には比較的凹凸が観察される。北側と北西側に検出面から5~10cm程の深さの溝が延びており、それぞれの溝の底レベルが池状遺構に向けて低くなっていることから、これらの溝は池状遺構への導水路であることが推定できる。埋土は5層が確認され、最終埋土の様子から湿地状になって序々に埋没している過程が推定できる。

遺物は池状遺構の底付近から若干検出された。18世紀頃の伊万里系磁器の皿が最も新しい遺物で、当遺構の時期を示すものと考えている。その他に、15世紀頃の備前焼の摺鉢や、白磁の碗や、龍泉窯系青磁皿、壺や、同安窯系青磁碗なども出土している。平瓦などは伴っていないが、軒平瓦が一点ある。胎土は緻密で、砂粒は殆ど含んでおらず、瓦当部と平瓦部との接合が瓦頭部裏面中央に平瓦を当て、凹凸側面に補足粘土を付ける「包み込み技法」^⑩であるという特徴から「播磨系」の瓦であることが推定される。また同系の尊勝寺出土^⑪の176B型式の唐草文と比べ、團線や珠文を省略しているものの、唐草は殆ど簡略化されていないことから、176B型式よりやや後出する時期といえそうである。176B型式が11世紀から12世紀初頭^⑫であることから、当瓦は12世紀中頃から後半の年代が考えられる。

素掘り溝（図9）

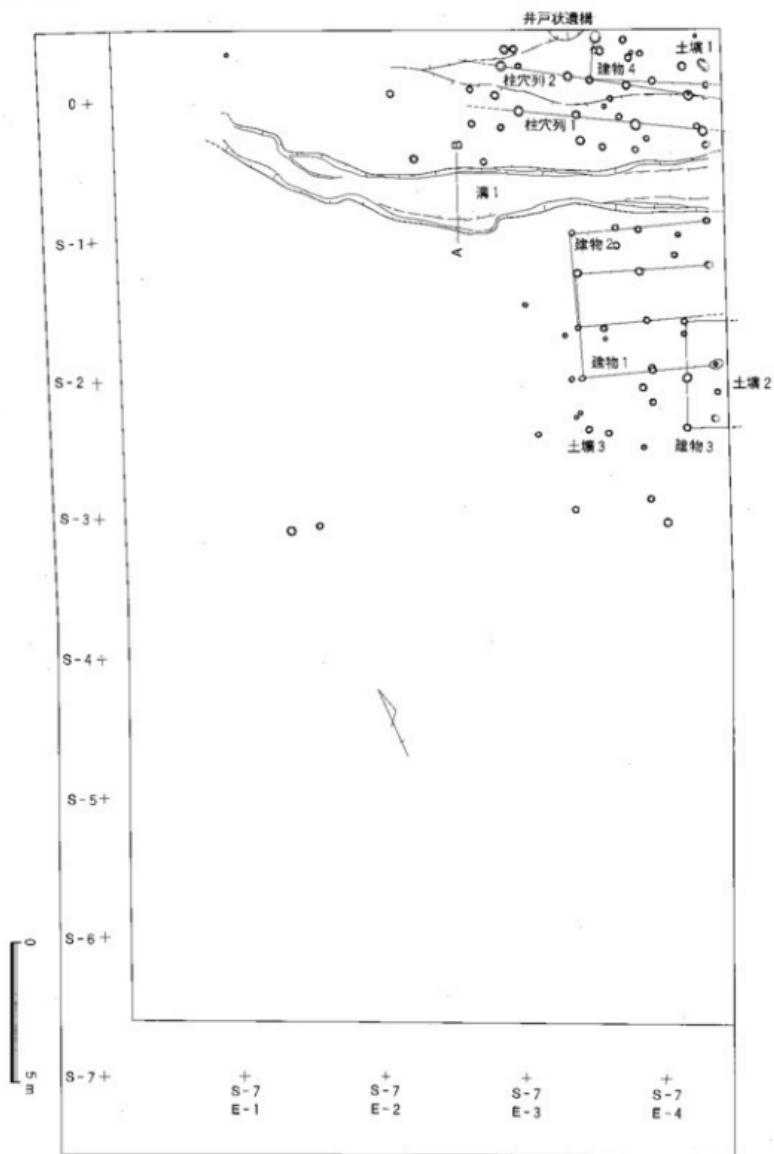
調査区に、ほぼ平行した方向性を持つ溝が4本検出された。それぞれ検出面から5~10cmの深さで、遺物は全く検出されなかった。一部が池状遺構を切って掘られていることや、調査区周囲の水田畦畔方向と一致することから、近世~現代の水田に関わるものであることが推定できる。

II 中世

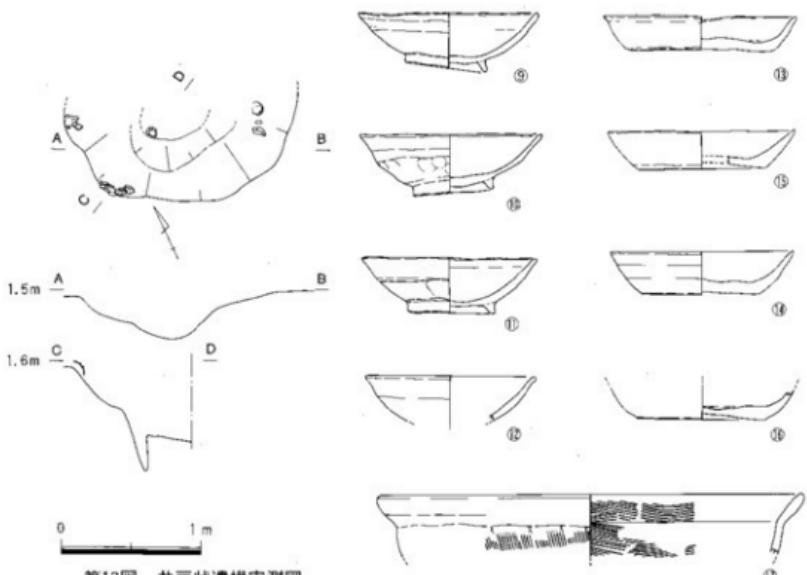
井戸状遺構（図13、14）

調査区北東付近で検出され、北半は調査区外であるため完掘はできなかった。また現状では素掘りであるが、遺構本来の底まで掘り上がっているかどうか確認できず、曲物や木組みの有無等については明確ではない。遺構検出面のレベル高は1.5m付近で、断面形は逆円錐形となる。底付近の傾斜変換点にやや斜め方向へ、径15cm程のケイ状のビットが1個検出された。

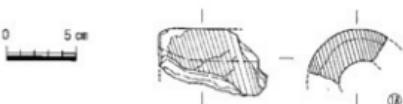
遺物は土師質の碗が4個体と、土師質の皿が4個体、土師質の鏡片、フイゴの羽口片が当遺構の肩口付近から底へ落ち込む様な状態で出土した。碗と皿は、前者が白色系で、後者は橙色系で発色は異なるが、胎土は似ており、またそれぞれの口縁部径も、碗は12.4~13.0cmで、皿



第12図 中世遺構平面図



第13図 井戸状遺構実測図



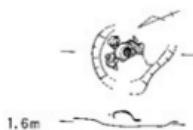
第14図 井戸状遺構出土遺物実測図

は12.9~13.4cmで、平均値は、楕が12.7cm、皿が13.1cmとなり、近似値を示す。また、楕は口縁部外面付近を二度ヨコナデするものと、一度だけのものの二者があり、皿にしても、口縁端部をヨコナデして外傾させるものと、直線的に聞くものなどがあり、それぞれ細部の調整、成形の違いによる分類の可能性を指摘できる。

土壤1 (図15、16)

調査区北東コーナー付近で検出され、東側は側溝によって切られているが、ほぼ全形を推定できる。長径60cm、短径50cmの長楕円形で、遺構の検出面は1.6m付近である。断面形は浅い皿状を呈し、遺物は遺構中央部のやや底より浮いた位置でまとまって出土した。ただ須恵質の楕19は上から逆さにして伏せた状態であり、意識的に置かれたことも考えられる。

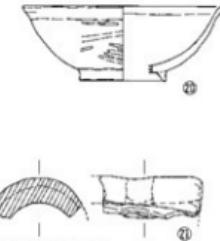
出土した遺物は須恵質の楕と土師質の楕が一個体と、フイゴの羽口片である。土師質の楕は口縁端部が外傾して玉縁状になっており、体部外面には比較的粗雑にはなっているものの、ヘ



第15図 土壌1実測図



第16図 土壌1出土遺物実測図

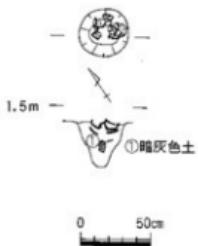


ラミガキが施されている。須恵質の椀は、見込み部に若干段があり、底部もやや突出気味であるという特徴をもち、東播の神出窯産のもので、12世紀後半の年代が与えられる¹⁴⁾。神出窯産のものは魚住窯産のものとは異なり、広域には流通されていないとされており、珍しい例であるといえる。フイゴの羽口の胎土中には多量の糠殻が含まれており、これは、この時期の鍛冶炉の胎土と似ている。

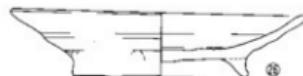
土壤2 (図17、18)

調査区東端部付近で検出され、建物1の南東面或いは、建物3の内部に位置する。平面形は、径約38cmの円形で、断面形は中央付近が突出する逆円錐形をしており、柱穴の掘方と似ている。遺構の検出面は1.4m付近である。遺物は遺構の中央に纏まって出土した。まず拳大的角櫛を入れ、その上に小皿を4枚置き、さらに椀と皿を重ねて脇に高台付大皿を立ててあった。

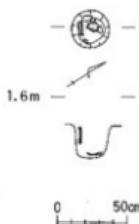
出土した遺物は、土師質の椀2個体、土師質の皿2個体、土師質の小皿4個体、土師質の高



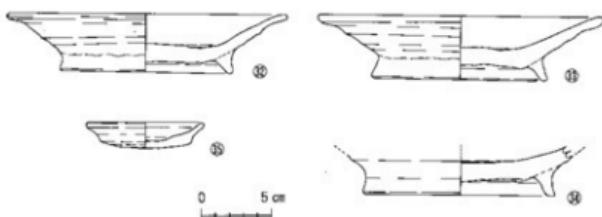
第17図 土壌2実測図



第18図 土壌2出土物



第19図 土壌3実測図



第20図 土壌3出土物

台付大皿2個体である。椀以外には、底部に明瞭な回転ヘラ切り痕が見られる。椀は口縁端部が若干肥厚して玉縁状になるものの、ミガキ調整はみられない。なお、口縁部径は皿の方が若干大きいが、その差は4mm程で、ほぼ等しいといえる。

土壌3(図19、20)

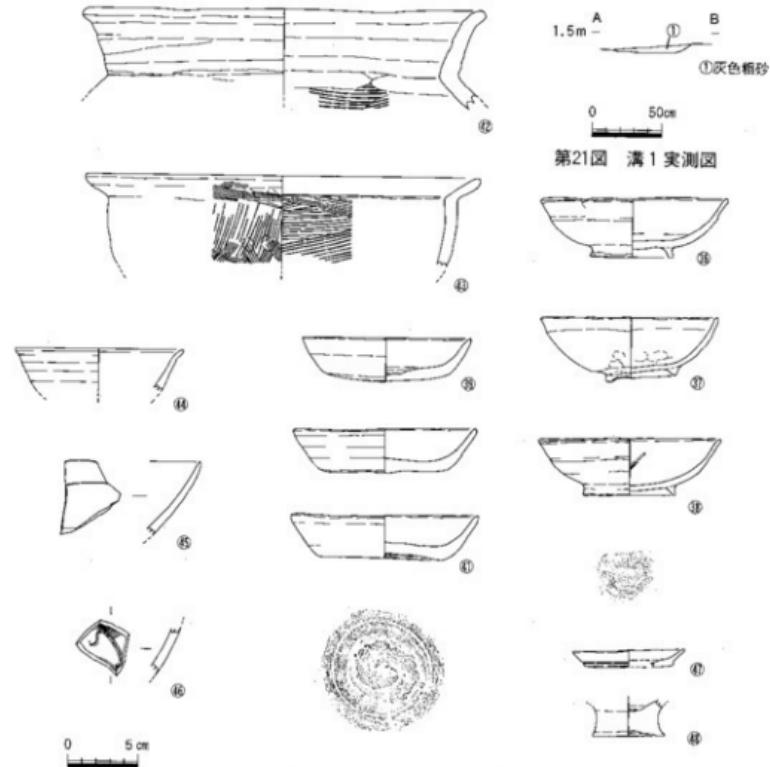
調査区東側付近で検出され、建物1の南西コーナーに位置する。土壌2と同様に建物3或いは、建物1に付随するような関係か、もしくは、土壌2、土壌3以降に柱穴などが殆ど存在しないことから、調査区以北に展開すると予想される建物群の南の境を画するような性格が推定できる。平面形は径約24cmの円形で、柱穴の掘方と似ている。遺構の検出面は1.38m付近である。遺物は39の底部片が南側に立てられていた他は、遺構中央付近の底に纏まって出土した。

出土した遺物は、土師質の小皿1個体、土師質の高台付大皿3個体である。全ての底部外面に、回転ヘラ切り痕が見られる。高台付大皿は、口径、調整、色調ともにほぼ同じだが、口縁端部を外傾させるものと、土壌2出土の26のように内弯して端部を彷彿形に肥厚させるものがある。この器形の土師質土器は、天神瀬遺跡¹⁰、吉野口(鯉山小)遺跡¹¹で主に出土しており、分布の偏りから、中世に於ける吉備中山周囲の地域色を示唆している。

溝2(図21、22)

調査区北側で検出された比較的深さの浅い溝で、南側は上面をかなり削平されている。検出面は1.35~1.4m付近で、断面形は緩やかな傾斜の台形である。幅約55cm、深さ約10cm、全長17.5mである。遺構西側は上面の池状遺構によって切られており、西へこのまま延びていくのかどうかは確認できなかった。遺物は全て埋土中から出土しており、北側から落ち込んでいるようであることから、北側からの斜面堆積的な埋没過程が予想できる。

出土した遺物は、土師質の椀、皿、小皿や、備前焼の壺、椀や、土師質の鍋や、白磁、青磁の椀片である。土師質の椀38の底部外面に板圧痕が見られ、椀部の整形と高台貼付の作業の間



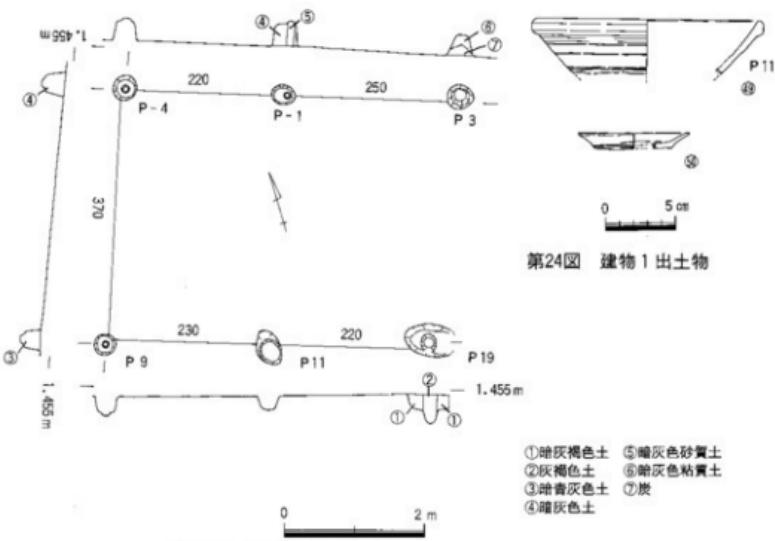
第21図 溝1実測図

第22図 溝1出土物

に乾燥期間等の中斷があることが推定できる。なお土質質の皿の底部外面にも、回転ヘラ切り痕跡の上に板压痕が見られる例もある。

建物1 (図23, 24)

調査区北東部で検出された掘立柱建物で、東側は調査区端部になるため、従来の規模は確認できなかった。現状で、桁行2間、梁行1間の柱構成で、棟方向はN-75°-Wを示す。平面形はほぼ整った長方形を呈している。遺構の検出面は1.45m付近で、その底レベルは1.15m前後である。柱穴掘り方は径約30cmの円形のものが殆どで、P19だけが約60cmの径をもち、梢円系を呈する。柱痕跡はP1とP19で確認され、その径は12cmと20cmを測る。その他P4とP9の底部が径約15cm程んでおり、柱痕跡の可能性が考えられる。



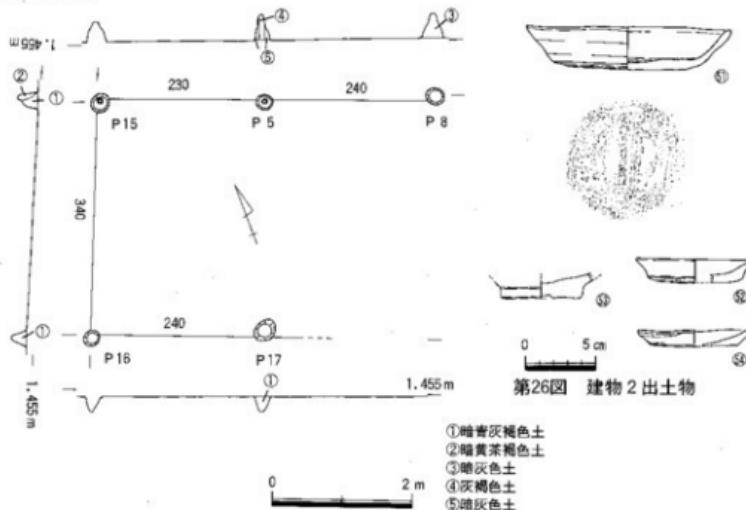
遺物はP 1から小皿50、P 11から白磁碗49が出土した。いずれも小片であり、柱の掘り方の埋土中に混入したようである。

建物2(図25、26、27)

調査区北東部で検出された掘立柱建物で、東側は調査区端部になるため、従来の規模は確認できなかった。方向、規模、位置が建物1と似ており、同一建物の建て替えの関係が建物1と建物2の間に成り立つのかも知れない。桁行2間、梁行1間の柱構成が現状で確認され、棟方向はN-70°-Wを示す。遺構の検出面は1.40m付近で、その底レベルは1.18m前後である。柱穴掘り方は径約25cmの円形を呈する。柱痕跡はP 5、P 15で確認され、その径は12cmを測る。その他P 8の底部が径約14cm窪んでおり、柱痕跡の可能性が考えられる。

遺物はP 17から皿51、小皿52、54が、P 8から碗55、小皿56、57が出土した。P 5出土の土器は柱痕跡の脇に比較的離れた位置で検出されたことから、柱を埋設した時に意識的に入れられた可能性が考えられる。P 17については柱痕跡などが検出できなかったため明確ではないが、土器は離まって出土しており、P 5と同様の可能性を考えられる。皿51の底部には板压痕が見られ、回転ヘラ切りの後すぐに底部を下にして板の上に置かれたことが推定できる。

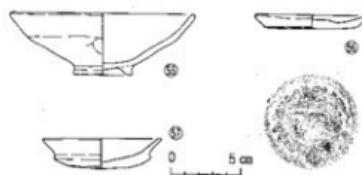
第三章 遺構と遺物



第25図 建物2実測図

第26図 建物2出土物

- ①暗青灰褐色土
- ②暗黄茶褐色土
- ③暗灰色土
- ④灰褐色土
- ⑤暗灰色土

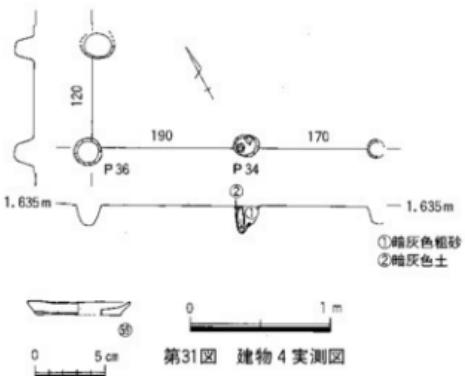
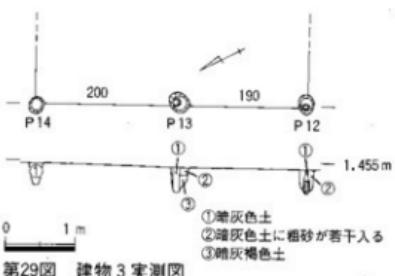


第27図 建物2出土物

建物3 (図29, 30)

調査区北東部付近で検出された掘立柱建物で、東側の大部分は調査区外へ出るため、従来の規模等は不明である。建物1や建物2と方向が似ているが、建物3は梁行が2間の柱構成である。棟方向はN-60°-Wが推定される。遺構の検出面は1.45m付近で、その底レベルは1.05m～1.15mである。柱穴掘り方は径約20cmの円形を呈する。P12には底付近に柱が残存しており、柱下半を削って尖らしていることが観察される。径8cmのやや楕円気味の形状である。P13には柱痕跡が確認され、径10cm程である。

遺物はP12の柱掘り方埋土中から小皿58の小片が出土した。柱埋置の際に混入したものと考えられる。



第32図 建物4 出土物

柱埋置の際に混入したものと考えられる。またP34の柱穴掘り方から拳大の角礫が一個出土しており、位置的に柱根の添石の可能性が考えられる。

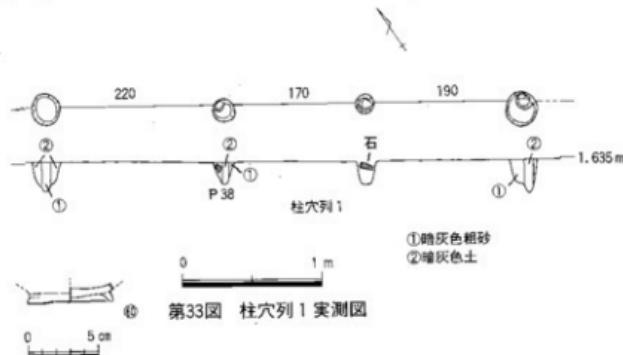
柱穴列1 (図33, 34)

調査区北東部付近、建物4と建物2の間で検出された柱穴列で、3箇所が確認されている。西側へはこれ以上延びず、東側に延びていく可能性が考えられる。方向はN-50°-Wで、付近で検出された建物とは方向が一致しない。遺構の検出面は1.63m付近で、その底レベルは1.15m

建物4 (図31, 32)

調査区北東コーナー付近で検出された掘立柱建物で、北東部分は調査区外へ出るため、全体の規模等は不明である。桁行2間以上、梁行1間以上の柱構成で、棟方向はN-62°-Wが推定され、建物3とほぼ同一方向である。遺構の検出面は1.63m付近で、その底レベルは1.3m～1.25mである。柱穴掘り方は径約40cmの円形を呈する。P34には柱根が残存しており、建物3のP12と同様に柱下半先端部を削って尖らしている。ただ柱根の径は15cm程度で、建物3のものと比べるとやや太くてしっかりしている。また建物4の柱穴掘り方が全般に建物3の柱穴掘り方より径が大きいということなどから、建物4の方が建物3より大きい規模の建物であったことが推定できる。

遺物はP36の理土中から土師質の小皿59の縁片が出土した。



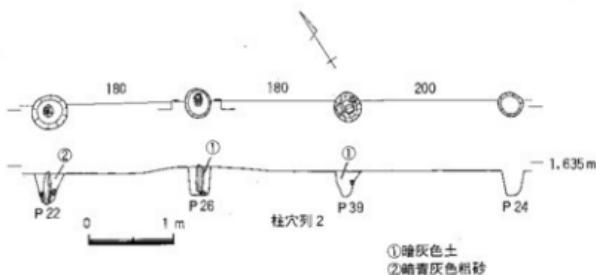
第34図 柱穴列1 出土物

~1.23mである。柱穴掘り方は径約30~40cmの円形を呈する。柱痕跡が確認できるものもあり、径は10~12cmである。P 38の柱痕跡の横に拳大的な角礫があり、柱根の添石と考えられる。

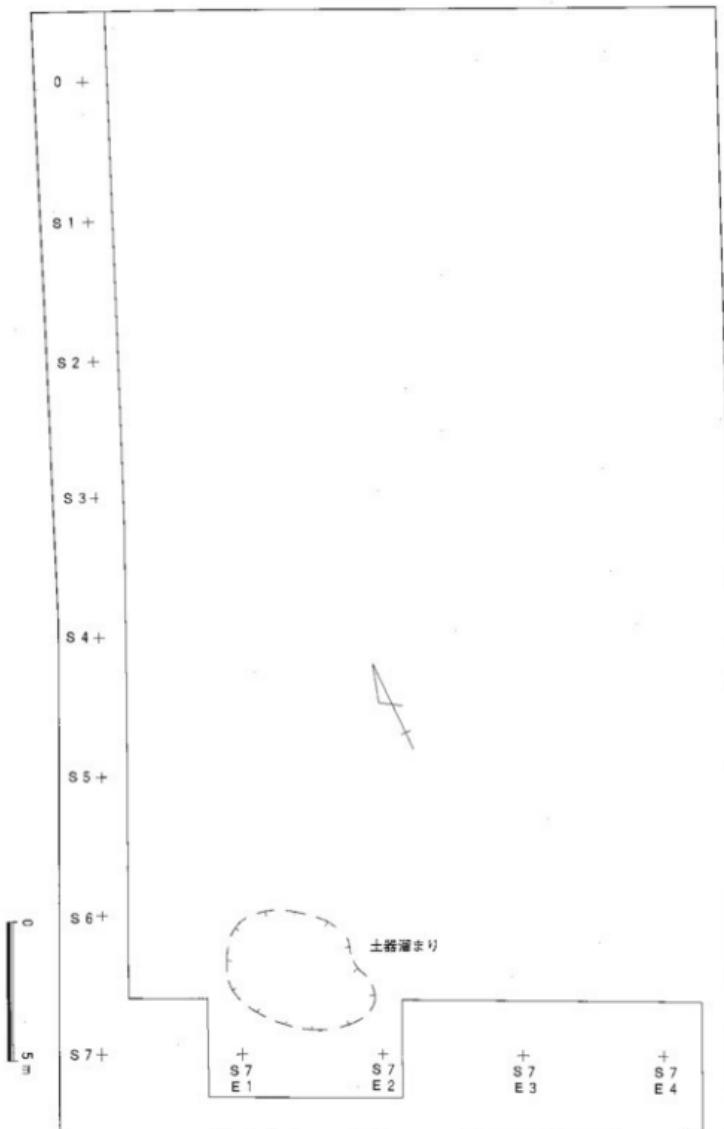
遺物はP 38の掘り方埋土中から土師質椀の底部片が出土した。柱埋置の際に混入したものと考えられる。

柱穴列2 (図35)

調査区北東部付近、柱穴列1の北ではほぼ平行する位置で検出された柱穴列で、3間が確認されている。ただ調査区の隅部であることから、さらに北へ延びて建物を構成する柱穴になる可能性もある。遺構の検出面は1.63m付近で、その底レベルは1.23m付近である。柱穴掘り方は径約40cmの円形を呈する。P 22とP 26には柱根が残存しており、P 22は下部先端を削って尖らしており、P 26は下部を平坦に加工している。またP 22には添石を、P 26には柱根と若干ずれる位置ではあるが、径8cm程の根石を置いている。P 22の柱根は径10cmの丸太材を半截してお



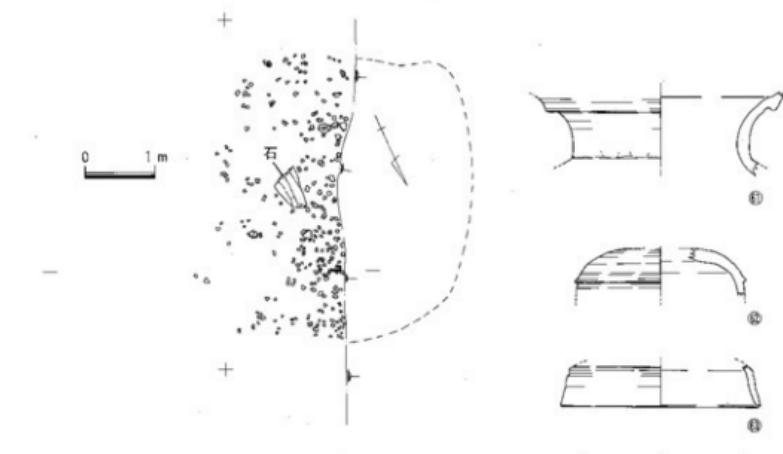
第35図 柱穴列2 実測図



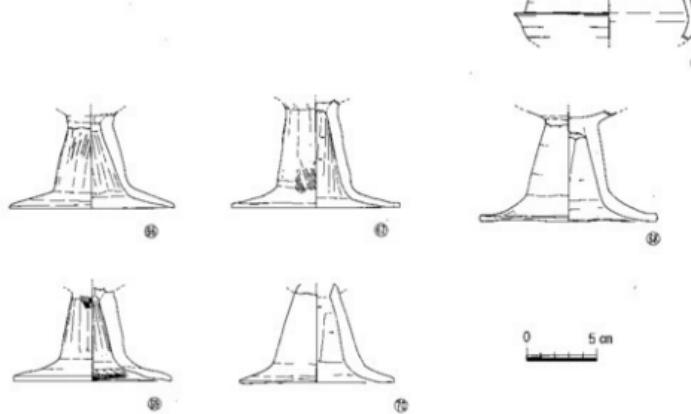
第36図 古墳時代遺構平面図

り、P 26の柱根は一辺 9 cm のやや不整形の角材である。

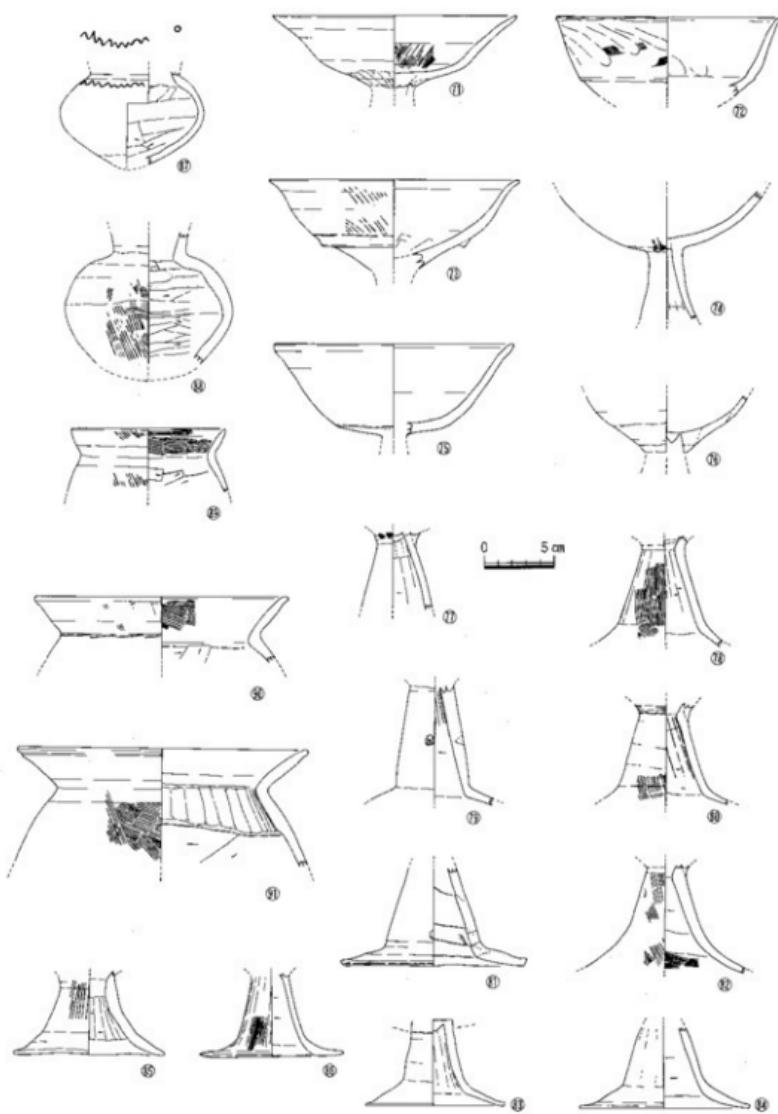
遺物は全く検出されなかったが、検出面や埋土から他の建物、柱穴列と近い時期であると考えられる。



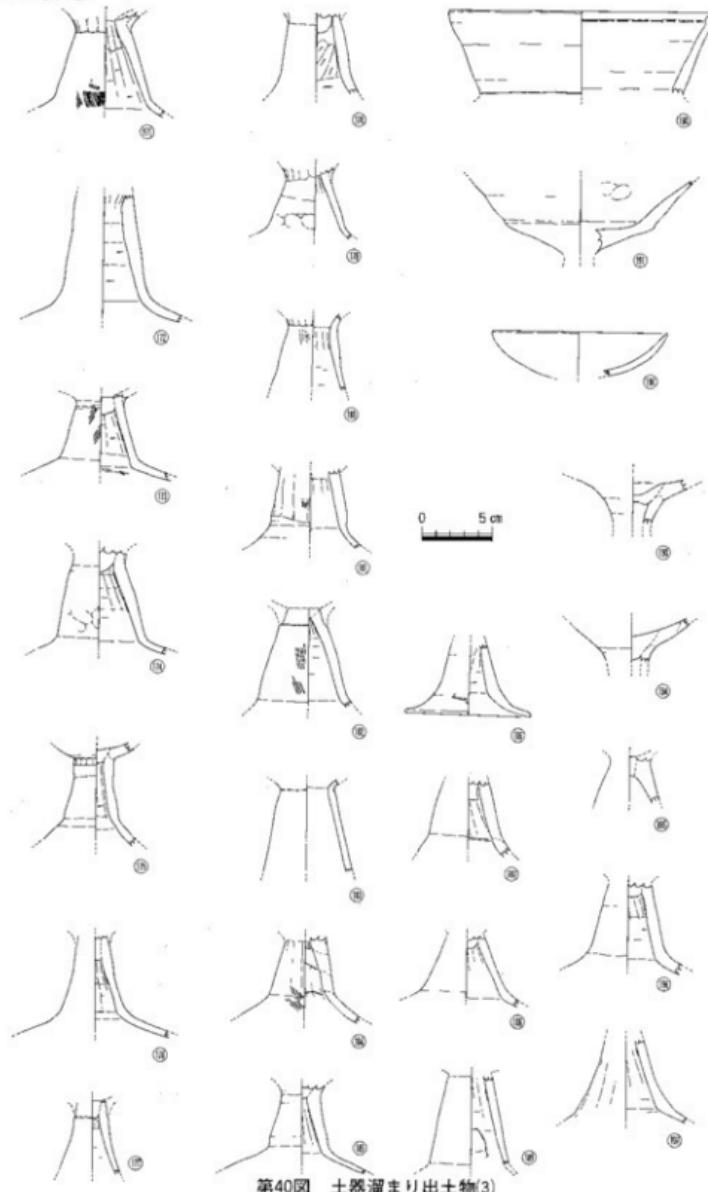
第37図 土器溜まり実測図



第38図 土器溜まり出土物(1)



第39図 土器漏まり出土物(2)



第40図 土器漏まり出土物(3)

III 古墳時代

土器溜まり（図36、37、38、39、40）

調査区南西部付近の位置で検出された土器溜まりである。遺構の北半は側溝で切られているが、本来は南北と同じで、全体に円形或いは、隅丸方形に土器が分布していた。遺構の検出面は0.9m付近で、15層の上面のやや窪んだたわみ状部分に、長さ約50cmの三角柱状の形態をした自然石を中心に土器が分布している。また土器は層的に分離できない状態で出土しており、この土器溜まりは短期間の間で形成されたものと推定できる。土器をとり上げた後に精査したが、遺構らしきものは確認できず、土器を廃棄するに当たって特別な振り込みなどは行っていなかった。調査区内に関するかぎり、全面湿地状堆積で生活面の形成できそうな部分は確認できなかった。また調査区北の小丸山裾部付近の調査区外部に当該時期の集落を想定したいが、調査区北部からは全く遺物が検出されておらず、土層的に見ても小丸山裾部ぎりぎりまで湿地状態が続いているものと推定され、当地点に土器を廃棄した主体者、或いは当該時期の集落は付近に想定しがたい。そうすると、これは集落外で行う祭祀の一つであるということが言える。そして本来中川と砂川が小丸山の南端、即ち当調査区南側付近で合流していたことが現地形から予想でき、その立地的な条件から見て水辺に関する祭祀と考えられ、付近に集落が存在しそうになく、主体を占める高坏に幾つかのバリエーションが認められることから、複数の集落の共同經營によって行われた祭祀であることも予想される。

遺物は多量の土器類と少量の須恵器が出土した。須恵器はある部分に偏るような出かたはせず、全体に散らばっていた。土器類はその殆どが高坏で、圓化できたもの以外に接合関係のない小片を含めると52個体が確認でき、壺2個体、甕3個体を遥かに凌駕する。

出土した高坏は全て破片で、坏部の方が脚部より少ないが、人為的な行為の結果と考えるより埋没過程での被損の結果と考える方が妥当のようである。まず坏部は楕状のものと屈曲して聞くいわゆる布留系のものとに分けられ、さらに後者は屈曲部に明確な稜があって口縁端部を外折するものと、屈曲部がやや不明瞭となり口縁端部も緩やかに外反するものがある。脚部は屈曲して聞くものと、緩やかに聞くものがある。内面調整は絞り痕の上からヨコヘラケズリを行うものが殆どで、据部にハケメ、ヨコナデを施す。81は内面調整が殆どされておらず粘土紐巻き上げ痕が観察できる。外面調整はタテハケの上から面取り気味のタテナデを施すものと、ヨコナデのものが見られる。81のように屈曲部付近に四方向から円孔を穿ったものも極若干ある。坏部と脚部とは分割して整形し接合するが、その方法は2種類ある。まずドーナツ状の粘土輪からそれぞれ粘土紐の巻き上げで坏部と脚部を作り、坏部中央に粘土の円盤で充填した後、脚部を接合して接合部分に粘土紐で補強するもの、或いは補強しないものがある。もう一方は、

壺部と脚部を粘土紐巻き上げにより成形の後、壺部に脚部を差し込んでから底部中央の円孔を粘土の円盤で充填して接合部分に粘土紐で補強するもの、或いは補強しないものである。胎土や色調にはかなりバラエティーがあり、かなり砂粒が入るものから若干入るものと、橙色系や灰白色系や茶褐色系などに分けられる。

壺は小型丸底壺が2点出土した。2点とも内面のヘラケズリは体部中位やや上まで及んでいる。87には竹管文1個と波状の線刻が体部上面にある。

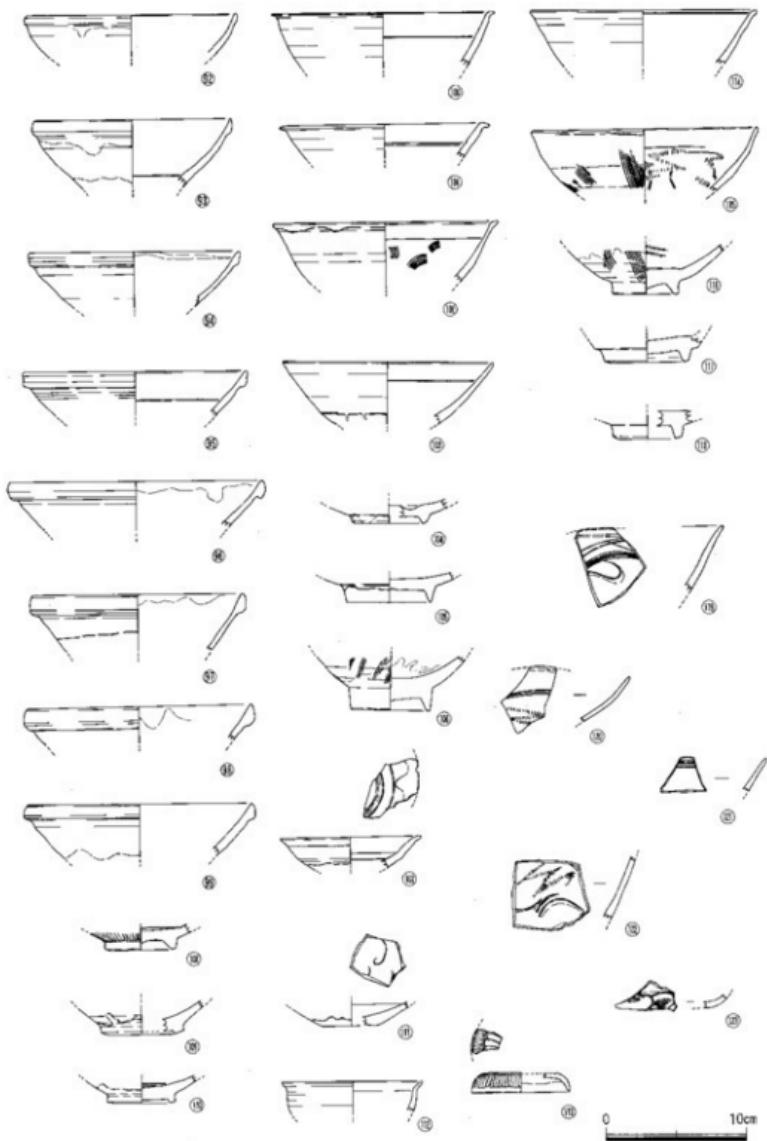
壺は「くの字」状の口縁部で、端部を肥厚させる布留系のものが1点と、端部を肥厚させないものが3～5点ある。後者は内外面の調整は殆ど同じであるが、内面のヘラケズリの位置が頸部までのものと、頸部よりやや下がった位置までのものとがある。前者については小片であり明確ではないが、従来のものより口縁部が長くやや異質な感じを受ける。胎土は高壺と同じで、90と189は茶褐色系で似ており、91が灰白色系、89が橙色系である。

須恵器は全て破片で、62と65が比較的残存している部分が多い。65の壺身の口径が11cm、62の壺蓋の口径が12cmぐらいに復元できそうなことや、出土した壺の特徴から、陶邑古窯址群における田辺昭三氏の編年^⑦のTK23型式かTK47型式に含まれるものと考えられ、実年代は5世紀末から6世紀初頭と推定できる。ただ61は胎土に若干砂粒を含み、やや古相の部類に入るのかもしれない。

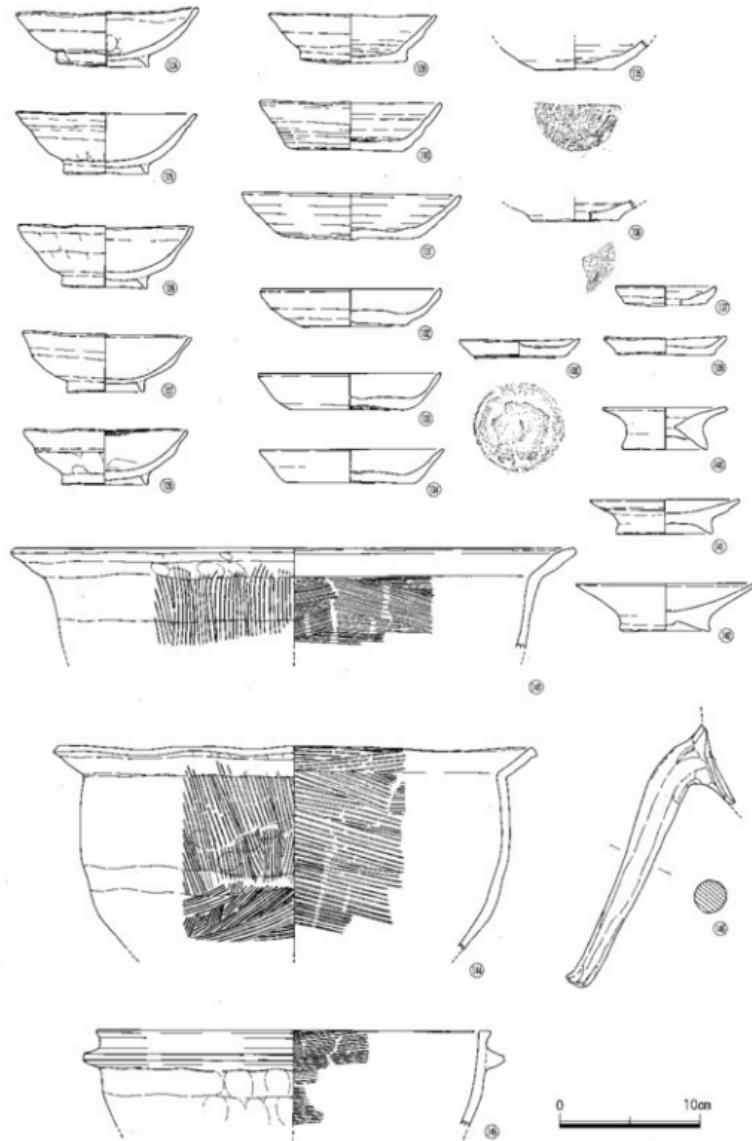
IV 包含層（図41、42、43、44、45、46）

中世の遺構の形成される淡黄褐色粗砂（6層）は、調査区全面に広がっており、南から北にかけて緩やかに傾斜している。恐らく中川と砂川による河川敷的な地形であると考えられ、そこに形成された中世集落の南端を今回調査したものと言える。遺物の大半は6層より上で検出された。

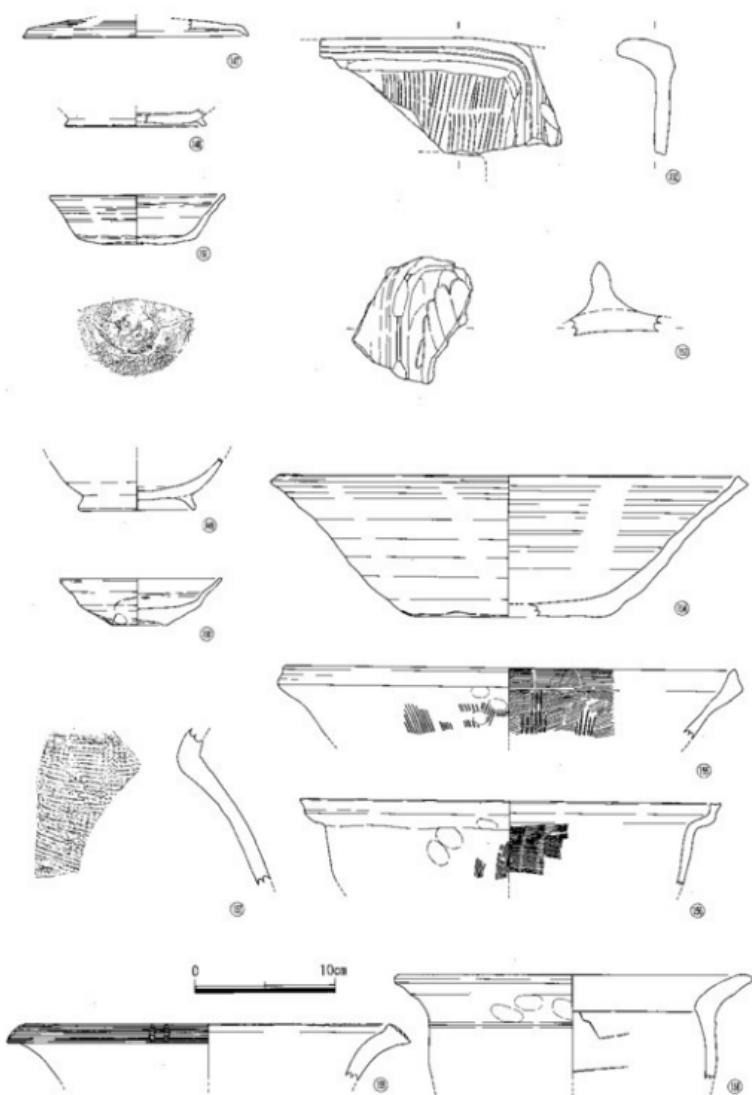
近世から弥生時代にかけての土器が調査区全体でコンテナ22箱分出土した。殆どが中世の時期の土師質土器類で、その他は僅かである。弥生土器は3片で、調査区南側で出土しており、かなりローリングを受けていることから、他の地点からの流入と考えられる。6層より下層からは平安期の須恵器壺蓋147と身148、151と内面黒色土器149が出土した。151は半分以上残存しており、底部にヘラ切り後の指頭圧痕が顕著に残ることから9世紀初頭の時期が推定できる。その他現水田直下にあたる3層から、16世紀末から17世紀初頭の唐津系の陶磁器150が出土した。



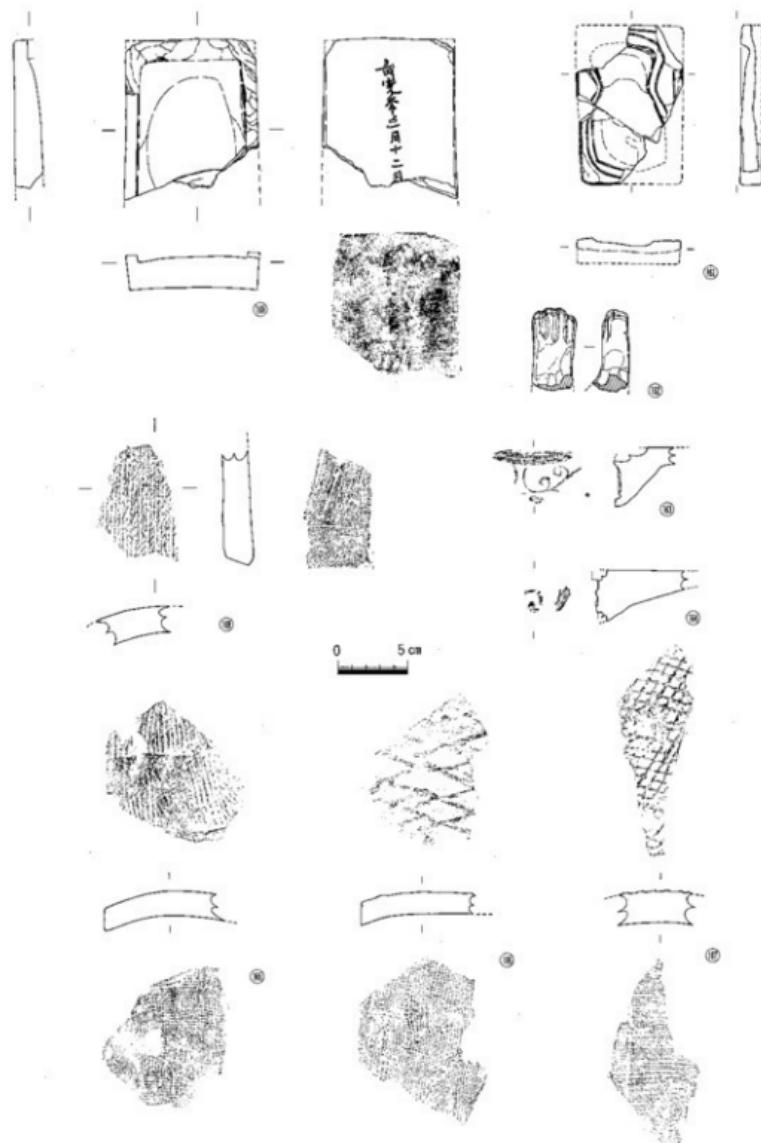
第41図 包含層出土遺物(1)



第42図 包含層出土遺物(2)



第43図 包含層出土遺物(3)



第44図 包含層出土遺物(4)

中世土器

中国製陶磁器

ナイロン袋2袋分程出土した。いずれも破片である。白磁は椀が殆どで、あと皿と小壺と合子の蓋が若干である。椀は森田、横田編年¹⁰のIV類が多く、次にV類が多い。青磁は椀と皿があり、同安窯系が大半で、数点龍泉窯系がある。当調査区出土の中国製陶磁器は、森田、横田編年¹⁰の12世紀中頃から13世紀初頭の傾向と似ており、出土している他の土器との年代観とそれほど齟齬はないものと考えられる。



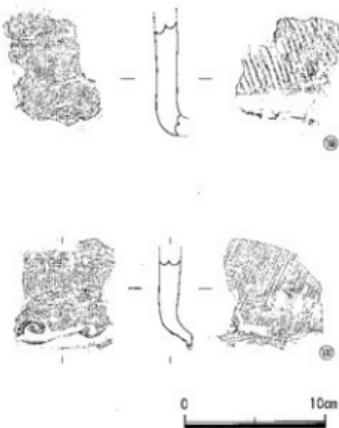
第45図 砥160拓本部分
(S = 1 / 2)

土師質土器

当調査区内で最も多く出土したもので、器形には椀、皿、小皿、台付小皿、鍋、摺鉢がある。このうち最も多いものは小皿で、次に皿で、あと椀、台付小皿である。その他は同じくくらいで量的に少ない。椀と皿の量的な比率は1:4ぐらいで、当地域以外の中世遺跡の様相とは異なって、椀の割合が少ない。当調査区出土の椀と皿は口径と器高の比率から二群に分類できる。即ち、椀の口径が13.5~14cm、器高が4.8~4.4cmのものがI類、口径が12~13.4cm、器高が3.8~4.8cmのがII類、皿の口径が13.8~14.4cm、器高が2.5~3.9cmのがI類、口径が12~13.6cm、器高が2.5~3.5cmのがII類である。鍋は口縁部がくの字状に外反するものと、口縁部やや下の位置に粘土紐を貼付するものがあり、後者は鹿田遺跡井戸32出土のものなど県下での出土例は少ない。

土製品

移動式の竈片が2点と硯が2点と獸足1点が出土した。硯160は下半が若干欠損しているが、平面形は台形に推定でき、断面形は裏面に向かってやや窄まる逆台形をしている。一般的に見られる方形の陶硯がやや稚拙な作りであるのに比べ、当硯はかなり方形の石硯の形態と似ている。焼成は瓦質で、やや軟質である。使用痕は顕著に認められ、特に左側の



第46図 包含層出土遺物(5)

磨滅が著しい。裏面中央に『長寛二月十二日』と読める陰刻が焼成前に施されている。長寛年間は1163年3月から1165年6月までの間であることから、この陰刻は1164年或いは、1165年を示していると言える。硯161は長方形の形態で、瓢箪形の海部を持ち、周囲に2~3条の沈線をめぐらす。硯尻の縁帯は抉っておらず沈線で画している。表面が磨滅しているため明瞭でないが、右側がやや窪んでおり、使用痕と考えられる。陶硯に沈線を施す例は、亀山遺跡包含層出土のものなどがあるが、県内ではなく、東海地域のものと比べると稚拙である。161は兵庫県神戸市繁田古窯址出土^⑨の陶硯と比較的文様構成は似ている。焼成は軟質である。

瓦

殆どが平瓦で、軒平瓦片が4点出土した。163は均整唐草文を配し、かなり退化しているものの周線が認められる。成形は平瓦端部に粘土を貼り付けて鈍角をなす頭部をつくる。凹部に布目痕がある。唐草文のモチーフは木蔵神社¹⁰、浅原寺跡¹¹、亀山遺跡¹²出土品とよく似ている。しかし木蔵神社出土品に比べ、上方に反転する麻手がある等やや163の唐草文が複雑であり、浅原寺跡、亀山遺跡と似ている。ただ亀山遺跡のものは2対の珠文があるが浅原寺跡のものではなく、同一モチーフでも細かい点で異なる部分が認められる。また同様なモチーフの軒平瓦が平安宮民部省跡¹³や農楽院¹⁴から出土しており、それが11世紀末から12世紀前半の年代観が与えられている。

164は唐草文で、平瓦端部を肥厚させて瓦頭面を成形している。文様と瓦頭の成形が東大寺の永承~康平年間再建時の瓦¹⁵と似ており、12世紀末の年代が与えられるが、何分小片であるので可能性として考えておきたい。167、168は平瓦の端部を凸面に折り曲げて瓦頭面をつくりだす「折り曲げ技法」¹⁶である。文様は非常に退化した唐草文を配しているが、上帯の周線はなく、下帯の周線も若干認められる程度に省略されている。瓦当文様面には范傷と思われるものがあり、壊れた范型を補修して使用した結果と考えられる。凸面には、やや間隔の広い単位の平行タタキが施されている。小形なつくりであることや、完成した「折曲技法」で瓦頭部を成形していることから、いわゆる中央官衙系の瓦との類似が指摘でき、その年代観から12世紀後半から13世紀初頭の年代が考えられる。

平瓦はすべて凹面に布目痕が残っており、凸面には繩目タタキ、平行タタキ、格子目タタキが見られる。繩目タタキを施したもの(168)は2片が出土した。やや厚手で、布目が他のものと比べて細かい目をしている。焼成は比較的堅緻である。平行タタキを施したもの(165)は4片出土しており、タタキの単位がはっきりわかるようなものが多い。薄手で軟質の焼成である。格子目タタキを施したものは24片出土した。それらには小型の斜格子目文をもつもの(167)と、大型の斜格子目文をもつもの(166)がある。大型の斜格子目文をもつものの方が薄手で、

軟質な焼成である。なお小型の斜格子目文は亀山遺跡¹⁰出土の平瓦に類例があり、当調査区からも亀山焼の壺片（157）が数点出土している。

東播系土器

鉢が3片出土しており、そのうち2片は小片であるが魚住焼と推定されるものである。154は口縁部が上方に拡張され、口縁部付近が外反し、底部には糸切り痕がみられる。土壙1出土の碗と同じく神出窯産の可能性が強い¹¹と思われるが、当該時期の魚住窯産の鉢が神出窯産のものと大差のない特徴を有していることから断定はできない。時期は森田氏編年¹²の第9期第1段階、山仲氏編年¹³のB2類の範疇に入り、実年代では12世紀の第3四半期と推定される。

- (1) 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』十三・十四合併号 1978年
- 丹治康明「東播磨における瓦生産」「中世土器の基礎研究」Ⅲ 1987年
- (2) 杉山信三他「尊勝寺跡発掘調査報告」「平城宮発掘調査報告」Ⅰ 1961年
- (3) 鈴木久男「鳥羽鎌宮の瓦」「古瓦図考」ミネルヴァ書房
- (4) 谷正俊氏より御教示を得た。
- (5) 出宮德尚他「天神瀬遺跡発掘調査概要」「文化財保護概要」岡山市教育委員会 1978年
- (6) 岡山市教育委員会が発掘調査を実施
- (7) 田辺昭三「陶邑古窯址群」 1966年
- (8) 森田勉・横田賢次郎「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」「九州歴史資料館研究論集」4 1978年
- (9) 丸山潔他「繁田古窯址発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1988年
- (10) 玉井伊三郎・藤沢一夫「吉備古瓦図譜」第2編 1941年
- (11) 福本明治「浅原寺跡」「倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第1集」 1984年
- (12) 岡田博他「亀山遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」69 1988年
- (13) 平安博物館編「平安京古瓦図録」 1977年
- (14) 佐藤虎雄「平安宮豊寧院の遺物」「古代学」第6巻第4号 1958年
- (15) 高橋美久二「東福寺の創建と大仏様建築」「古瓦図考」ミネルヴァ書房
- (16) 森田稔「東播系中世須恵器の生産と流通」「中世土器の基礎研究」Ⅲ 1987年
- (17) 山仲進「神出1986」妙見山麓遺跡調査会 1989年

V. 出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)			特徴	遺構
		口径	器高	底径		
1	皿	12.0	—	—	素面で、体部中位で屈曲し、体部と見込みの塊に僅かな段差なし。内面はヘラによる片彫りがあり、外面下半は施墨されない。	池状遺構
2	椀	—	—	—	青磁で、内面気味に外上方に立ち上がる脚部片で、蓝色ガラス質の釉である。内面はヘラと彫による施文、外面彫目を施す。	池状遺構
3	椀	15.0	—	—	白磁で、口縁部を外反させ、体部は丸味を持つ。胎土は灰白色である。	池状遺構
4	坏	16.0	—	—	青磁で、体部が内寄気味に立ち上がり、口縁部は外反している。外面に速弁の削り出し文様がある。	池状遺構
5	皿	—	—	7.0	伊万里系で、白色釉の地に淡青色の釉で文様を施す。	池状遺構
6	搗鉢	—	—	—	端部を上方により拡張し、全面はヨコナデを施す。	池状遺構
7	摺鉢	—	—	—	端部は若干延張し、全面はヨコナデを施す。	池状遺構
8	軒平瓦	—	—	—	胎土は灰色で比較的緻密である。瓦当面には偏行唐草文を施し瓦当部の接合方法は「仮込式」で曲線型になっている。	池状遺構
9	碗	12.8	3.9	5.7	土師質で、口縁部外面にヨコナデを行い、端部内面に面取りを行う。底部に指彫痕が観察され、胎土は淡灰白色でやや粗。	井戸状遺構
10	碗	13.0	4.2	5.8	土師質で、口縁部外面にヨコナデを行い、端部内面に面取りを行う。内面は平滑にナメる。胎土は淡灰白色でやや砂粒が入る。	井戸状遺構
11	碗	12.5	3.9	6.2	土師質で、口縁部外面にヨコナデを行い、端部内面に面取りを行う。外面に横筋とは若干ずれてヘラ痕跡が観察される。	井戸状遺構
12	碗	12.4	—	—	土師質で、口縁部外面にヨコナデを行い、端部を丸く若手肥厚気味におさめる。	井戸状遺構
13	皿	13.4	2.5	10.5	土師質で、底部を回転ヘラ切り、外面にヨコナデを行う。口縁端部は若干外に凸げて丸くおさめる。	井戸状遺構
14	皿	12.9	3.0	8.5	土師質で、底部を回転ヘラ切り、外面にヨコナデを行う。口縁部は外方向に開き、端部はやや尖り気味におさめる。	井戸状遺構
15	皿	12.9	2.7	9.0	土師質で、底部を回転ヘラ切り、外面にヨコナデを行う。底部は上げ足気味で、口縁部端部は尖り気味におさめる。	井戸状遺構
16	皿	—	—	9.0	土師質で、底部を回転ヘラ切り、外面にヨコナデを行う。底部は上げ足気味である。	井戸状遺構
17	鍋	30.0	—	—	土師質で、外面タケハケ、内面ヨコハケ残、口縁部内外面ヨコナデを行う。口縁端部は肥厚して丸くおさめる。	井戸状遺構
18	フイゴ羽口	—	—	—	胎土は淡緑灰色であるが、外周口縁部付近以外は熟変を受けて紫灰色になっている。胎土中に多量のセミが入っている。	井戸状遺構
19	碗	15.5	5.0	5.6	須賀質で、底部外周面切りでやや突出気味である。内外面をヨコナデで平滑に仕上げている。	土壙 1
20	碗	14.0	5.3	6.2	土師質で、口縁部外面にヨコナデ、外面にやや粗いヘラミガキを行なう。口縁端部はやや肥厚気味におさめる。	土壙 1
21	フイゴ羽口	—	—	—	外周全体に熟変を受けて淡赤褐色となっている。1.0~4.0mm程の砂粒が多く含まれる。	土壙 1
22	碗	13.9	4.9	4.2	土師質で、口縁部付近をヨコナデし、端部をやや外側に肥厚する。外面下半には指彫痕痕が観察される。淡灰白色。	P 20
23	碗	13.8	4.7	4.0	土師質で、口縁部付近をヨコナデし、端部をやや肥厚する。外面下半には指彫痕痕が観察される。胎土は緻密で、淡灰白色。	P 20
24	皿	14.2	2.9	9.0	土師質で、内外面にヨコナデを行う。底部は右回りの回転ヘラ切りである。胎土は緻密で、淡灰白色。	P 20
25	皿	14.3	3.1	9.0	土師質で、内外面にヨコナデを行う。内面見込み部付近には不整方向のヨコナデを行う。底部は回転ヘラ切りで、淡緑灰色。	P 20
26	高台付大皿	21.0	4.7	12.7	土師質で、口縁部がやや内寄気味に開き、端部が彷彿形に肥厚する。内外面ヨコナデで、底部は回転ヘラ切りで、淡緑灰色。	P 20
27	高台付大皿	21.0	4.5	12.8	土師質で、口縁部は外傾し、やや尖り気味におさめる。内外面ヨコナデで、底部は回転ヘラ切り、胎土は緻密で淡緑灰色。	P 20

28	小皿	8.2	1.4	6.1	土師質で、内外面ヨコナデを行い、口縁端部を若干外傾気味におさめる。底部は左回りの回転ヘラ切りで、淡橙灰白色	P 20
29	小皿	8.3	1.5	5.6	土師質で、内外面ヨコナデを行い、口縁端部を若干外傾気味におさめる。底部は左回りの回転ヘラ切りで、淡橙灰白色	P 20
30	小皿	8.6	1.5	5.5	土師質で、内外面ヨコナデを行い、口縁端部を若干外傾気味におさめる。底部は左回りの回転ヘラ切りで、淡灰白色	P 20
31	小皿	8.5	1.5	6.3	土師質で、内外面ヨコナデを行い、口縁端部を丸くおさめる。底部は左回りの回転ヘラ切りで、胎土は緻密で、淡橙灰白色	P 20
32	高台付大皿	20.0	4.2	12.0	土師質で、口縁端部は外傾し、やや尖り気味におさめる。内外面ヨコナデで、底部は回転ヘラ切り、胎土は緻密で、淡灰白色	P 6
33	高台付大皿	20.4	4.6	12.5	土師質で、口縁端部は筋彫形に肥厚する。内外面はヨコナデで底部は左回りの回転ヘラ切り、胎土は緻密で、淡橙灰白色	P 6
34	高台付大皿 高台部	—	—	13.5	土師質で、内外面ヨコナデを行う。底部は左回りの回転ヘラ切りで、断面形が台形の高台を貼り付ける。淡灰灰白色	P 6
35	小皿	8.0	1.9	6.4	土師質で、口縁端部をやや上方に丸くおさめる。内外面ヨコナデで、底部は左回りの回転ヘラ切りである。淡橙灰白色	P 6
36	碗	13.3	4.2	5.9	土師質で、口縁端部内外をヨコナデ、端部をやや丸く肥厚しておさめる。内面下半に重ね焼き痕がみられる。淡灰灰白色	満1
37	碗	12.7	4.4	5.0	土師質で、口縁部内外をやや緻密にヨコナデし、端部は上方に肥厚しておさめる。内外面に指頭压痕が目立つ。淡灰灰白色	満1
38	碗	13.0	4.1	6.6	土師質で、口縁部内外面をヨコナデし、端部を外傾気味に丸くおさめる。底部に板痕、内面一部にミガキがあり、淡橙灰白色	満1
39	皿	12.0	3.1	9.0	土師質で、内外面ヨコナデで、端部は尖り気味におさめる。底部は回転ヘラ切りである。	満1
40	皿	12.9	3.1	9.0	土師質で、内外面ヨコナデ、端部は尖り気味におさめる。底部は回転ヘラ切りである。胎土は緻密で、淡橙灰白色	満1
41	皿	13.4	3.0	8.7	土師質で、内外面ヨコナデ、端部はやや尖り気味におさめる。底部は回転ヘラ切り、胎土は緻密で、淡橙灰白色	満1
42	甕	28.6	—	—	須恵質で、胴部内面ヨコハケ後内外面ヨコナデを行う。胎土は緻密で、淡灰灰白色である。	満1
43	鍋	28.0	—	—	土師質で、外面胴部タテハケ後口縁部ヨコハケ、内面胴部ヨコハケ後口縁部ヨコナデを行う。胎土には砂粒を含み、淡灰灰白色	満1
44	椀	12.0	—	—	須恵質で、内外面ヨコナデで、口縁端部を若干外傾気味におさめる。胎土は緻密で、淡灰灰白色である。	満1
45	椀	—	—	—	白磁の碗で、破片全面に釉薬が認められ、内面に沈線が施される。胎土は緻密で、灰白色である。	満1
46	椀	—	—	—	青磁の椀で、内面にヘラと櫛による施文があり、厚い釉薬には貫人が認められる。	満1
47	小皿	8.0	1.25	—	内外面ヨコナデで、底部回転ヘラ切りを行う。胎土は緻密で、淡橙灰白色である。	満1
48	足高小皿	—	—	5.0	内外面ヨコナデで、底部回転ヘラ切りである。胎土は緻密で、淡橙灰白色である。	満1
49	碗	16.5	—	—	白根焼で、口縁部を玉縁にし、外面下半以外には灰白色の施釉がされる。	建物1
50	小皿	8.0	1.2	5.6	土師質で、内外面ヨコナデで、底部は回転ヘラ切りを行う。胎土は緻密で、淡灰灰白色である。	建物1
51	皿	14.0	3.0	9.0	土師質で、内外面ヨコナデで、底部は回転ヘラ切りを行う。口縁端部は筋彫形に肥厚する。胎土は緻密で、淡橙灰白色である。	建物2
52	小皿	8.4	1.7	7.8	土師質で、底部回転ヘラ切り、内外面はヨコナデを施す。胎土はやや緻密で、淡橙灰白色である。	建物2
53	小皿底部	—	—	5.6	土師質で、底部回転ヘラ切り、内外面はヨコナデを施す。胎土はやや緻密で、淡橙灰白色である。	建物2
54	小皿	4.0	1.2	6.2	土師質で、底部回転ヘラ切り、内外面はヨコナデを施す。胎土はやや緻密で、淡灰灰白色。	建物2
55	椀	13.1	4.4	4.2	土師質で、口縁部内外をヨコナデし、比較的明瞭な棱が覗きわれる。口縁端部は削取りせず若干肥厚する。乳灰灰白色	建物2
56	小皿	8.0	1.0	6.6	土師質で、内外面をヨコナデ、底部は回転ヘラ切りである。胎土はやや砂粒が入り粗で、淡橙灰白色	建物2

57	小 盤	8.3	2.2	6.9	土師質で、内外面をヨコナデ、底部は回転ヘラ切りである。胎土はやや緻密で、淡橙灰色である。	建物 2
58	小 盤	8.8	1.35	6.8	土師質で、底部は回転ヘラ切り、内外面ヨコナデを施す。胎土は緻密で、淡橙灰色である。	建物 3
59	小 盤	7.4	0.8	6.0	土師質で、底部は回転ヘラ切り、内外面はヨコナデを施す。胎土は緻密で、橙褐色である。	建物 4
60	碗 底 部	-	-	6.0	土師質で、断面台形の高台を貼り付ける。胎土は3.0mm程の砂粒が入り、淡灰白色である。	柱穴列 1
61	臺	-	-	-	須恵質で、颈部外面ユビナデ後内外面にヨコナデを施す。胎土は、1.5mm程の砂粒が若干入り、灰褐色を呈する。	土器溜り
62	坏 蓋	--	-	-	須恵質で、外面に明瞭な後が見られ、外面ヘラケズリ後ヨコナデを施し、内部ヨコナデ。1.0mm程の砂粒が若干入り、淡灰褐色。	土器溜り
63	坏 蓋	14.2	-	-	須恵質で、外面にやや不明瞭となった後が見られ、口縁部は外方に開く。1.0mm以下の砂粒が入り、淡灰褐色を呈する。	土器溜り
64	坏 身	--	-	-	須恵質で、内外面ヨコナデを施す。胎土は緻密で、1.0mm以下の砂粒が若干入り、灰褐色を呈する。	土器溜り
65	坏 身	--	-	-	須恵質で、内外面ヨコナデを施す。胎土は緻密で、0.5mm以下の砂粒が若干入り、灰褐色を呈する。	土器溜り
66	高坏脚部	-	-	11.8	土師質で、外面タテハケ後タテナデ、内面中位までヨコケズリ後内外面にヨコナデを施す。胎土は緻密で、淡橙灰白色。	土器溜り
67	高坏脚部	-	-	12.0	土師質で、外面ナナメハケ後タテナデ。内面中位までヨコケズリ後内外面にヨコナデを施す。胎土はやや緻密で、淡橙灰色。	土器溜り
68	高坏脚部	-	-	12.8	土師質で、外面ナナデ、内面中位までヨコケズリ後、以下内面ヨコナデを施す。胎土はやや緻密で、淡橙灰色を呈する。	土器溜り
69	高坏脚部	-	-	11.2	土師質で、外面タテハケ後接合部付近タテハケ、内面しづら後ヨコケズリ、腹部接合部ユビナデ後ヨコハケ。胎土は淡橙灰色。	土器溜り
70	高坏脚部	-	-	11.0	土師質で、外面ナナデ、内面中位までヘラケズリ以下内外面ヨコナデを施す。胎土はやや砂粒が入り粗で、淡橙灰白色である。	土器溜り
71	高坏坏部	17.4	-	-	土師質で、緩やかに屈曲して端部を尖り氣味におさめる。接合部外面をヘラケズリし、内面タテハケ後口縁部付近ヨコナデ。	土器溜り
72	高坏坏部	16.0	-	-	土師質で、やや接を持つ屈曲し、端部は若干肥厚気味におさめる。外面ヨコナデ後部分的にヨコハケ、内面ナナデ。	土器溜り
73	高坏坏部	18.0	-	-	土師質で、外面に断面三角形の粘土紐を貼り付ける。外面ナナメハケ後ヨコナデ、内面タテハケ後ヨコナデである。淡橙色。	土器溜り
74	高 坏	-	-	-	土師質で、施状を呈する坏部で、接合部外面にタテハケを施す胎土は2.0mm砂粒が入りやや粗で、橙褐色を呈する。	土器溜り
75	高坏坏部	17.0	-	-	土師質で、やや接を持つ屈曲し、端部はやや尖り氣味におさめる。内面ナナメ口縁部ヨコナデを施す。淡橙灰白色。	土器溜り
76	高坏坏部	-	-	-	土師質で、楕状の坏部で、外面ナナデ、内面ヨコナデを施す。胎土はやや緻密で、淡橙灰白色を呈する。	土器溜り
77	高坏脚部	-	-	-	土師質で、接合部外面にタテハケ、内面若干しづらった後ヨコケズリを施す。胎土はやや緻密で、淡橙灰白色を呈する。	土器溜り
78	高坏脚部	-	-	-	土師質で、外面タテナデ後タテハケ、内面ヨコケズリ後下部ヨコナデを施す。胎土はやや緻密で、淡橙灰白色を呈する。	土器溜り
79	高坏脚部	-	-	-	土師質で、外面ナナデ後ヘラ状工具痕があり、内面しづら後ヨコケズリである。胎土は2.0mm程の砂粒が入り、淡灰白色。	土器溜り
80	高坏脚部	-	-	-	土師質で、接合部外面ヨコナデ、肩部タテハケで、内面ヨコケズリである。胎土は、1.5mm程の砂粒が入りやや粗、淡橙灰白色。	土器溜り
81	高坏脚部	-	-	13.0	土師質で、粘土紐巻き上げの状況が明瞭に観察される。腹部外面をヨコナデ、胎土は2.5mm程の砂粒が入り粗、淡橙灰白色。	土器溜り
82	高坏脚部	-	-	-	土師質で、緩やかに聞く振部で、外囲タテハケ、内面中位以上をヘラケズリ、腹部ヨコハケを施す。胎土はやや粗で、淡橙色。	土器溜り
83	高坏脚部	-	-	10.0	土師質で、外面ナナデ、内面擦部以上ケズリ後、振部付近ヨコナデで、胎土は2.5mm程の砂粒が入り、淡茶灰褐色を呈する。	土器溜り
84	高坏脚部	-	-	11.0	土師質で、外面タテナデ、内面ヨコナデ、腹部内外面ヨコナデを施す。胎土は2.0mm程の砂粒が入りやや粗で、淡橙灰白色。	土器溜り
85	高坏脚部	-	-	10.8	土師質で、緩やかに聞く振部をしており、外面タテハケ、内面振部以上をヨコケズリ後、振部内外面ヨコナデ。淡茶灰褐色。	土器溜り

86	高杯脚部	-	-	10.2	土師質で、外面タテナデ後タテハケ、内面沿縁以上をヨコケズリ後、壺部内外面をヨコナデ。土は若干緻密で、淡茶灰色。	土器層 り
87	壺	-	-	-	土師質で、外面ナデの後頭部以上をヨコナデ、内面頭部以下をヨコケズリ後、頭部以上をヨコナデ。外面胴部上半に輪刻文。	土器層 り
88	壺	-	-	-	土師質で、外面下半をタテハケ後、上半をヨコナデ、内面下部をヨコケズリ後、上半ナデ後、頭部付近ヨコケズリ。淡茶灰色。	土器層 り
89	甕	11.0	-	-	土師質で、くの字状口縁部をしており、外面タテハケ後頭部ヨコナデ、内面口縁部ヨコハケ、頭部以下ヨコケズリ。淡茶灰色。	土器層 り
90	甕	18.0	-	-	土師質で、くの字状口縁部をしており、外面口縁部タテハケ後ヨコナデ、頭部タテハケ、内面口縁部ヨコハケ、頭部ケズリ。	土器層 り
91	甕	20.6	-	-	土師質で、くの字状口縁部をしており、外面ハケ、内面頭部下部をヨコケズリ、口縁部内外面をヨコナデ。淡茶灰色。	土器層 り
92	椀	15.0	-	-	白磁で、内身氣味の口縁部をしており、小さい土継を持つている。輪色はやや灰色を帯びている。	包含層
93	椀	14.0	-	-	白磁で、口縁部を玉縁にする。口縁部から体部中位下付近まで釉が垂下している。見込みの部分に沈線状の段を持つ。	包含層
94	椀	15.0	-	-	白磁で、口縁部を玉縁にする。内外面にやや灰色を帯びた白色の釉薬を施す。	包含層
95	椀	16.0	-	-	白磁で、口縁部を玉縁にする。内面体部中位に細い沈線を一束施す。釉は黄色を帯びた白色を呈し、若干厚めに施釉される。	包含層
96	椀	18.0	-	-	白磁で、口縁部を玉縁にする。釉は黄色を帯びた白色を呈し、若干厚目に施釉する。	包含層
97	椀	15.0	-	-	白磁で、口縁部を玉縁にする。釉は黄色を帯びた白色を呈し、若干厚目に施釉されるが、外面部下部は施釉されない。	包含層
98	椀	16.0	-	-	白磁で、口縁部を玉縁にする。釉は灰色を帯びた白色を呈し、若干厚目に施釉される。	包含層
99	椀	16.0	-	-	白磁で、口縁部を玉縁状にする。釉は灰色を帯びた白色を呈し若干厚目に施釉されるが、外面部下部は施釉されない。	包含層
100	椀	16.0	-	-	白磁で、口縁部を外反させ端縁を水平にする。内外面の施文は無文で、体部内面上位に浅い沈線をもっている。	包含層
101	椀	14.0	-	-	白磁で、口縁部を外反させ端縁を水平にする。内外面の施文は無文で、体部内面上位に浅い沈線を持っている。	包含層
102	椀	16.0	-	-	白磁で、口縁部を外反させ端縁を水平にする。内面に浅い沈線とクシで花文を描いている。	包含層
103	椀	14.8	-	-	白磁で、体部下位で丸味を持ち、口縁部に向かって外上方に弧びる。口縁部は丸くおさめ、内面に細い沈線を施す。	包含層
104	椀	-	-	5.0	白磁の底部で、内底見込みに太い沈線状の段がつく。	包含層
105	椀	-	-	6.0	白磁の椀で、比較的高く高く、直立した高台である。釉は薄く体部と高台部の境付近まで施釉する。	包含層
106	椀	-	-	5.7	白磁の椀で、比較的高く高く、直立した高台である。釉は薄く体部下半付近まで施釉する。外面クシ目による有文がある。	包含層
107	皿	15.0	-	-	白磁で、見込みの部分の輪部を輪状にカキ取っているもので、見込み部分には沈線状の段をもつ。釉色は黄色を帯びた白色である。	包含層
108	椀	-	-	5.0	白磁の椀で、高台は厚く比較的高く削り出しており、見込み部分には沈線状の段をもつ。釉色は黄色を帯びた白色である。	包含層
109	椀	-	-	6.0	白磁の椀で、高台は厚く、削り出しあわざかである。釉は薄く体部と高台部の境付近まで施釉する。	包含層
110	椀	-	-	5.0	白磁の椀で、内底見込みの輪を輪状にカキ取ったものである。釉は体部と高台部の境付近まで施釉する。	包含層
111	皿	-	-	4.0	白磁で、底部外面に赤切り痕があり、内面に細い沈線とへうによる文様が施されている。釉は黄色的な白色で底付近まで施釉する。	包含層
112	小壺	10.0	-	-	白磁で、口縁部を僅かに外反させる。釉は若干厚目に施釉され灰色を帯びた白色を呈する。	包含層
113	合子蓋	7.0	1.45	3.2	白磁で、口縁部を尖らし気味におさめる。外面に押庄による施文を行う。内外面に施釉する。	包含層
114	椀	16.0	-	-	青磁で、口縁部をわずかに外反させ、内面に沈線をめぐらす。釉色はやや黄色気味の鉛色ガラス質である。	包含層

115	椀	16.0	-	-	青磁で、体部はやや内青気味に外上方へ立ち上がり、体部上位で若干内側に屈曲する。釉は薄く、外面に細かい擦目を有する。	包含層
116	椀	-	-	4.6	青磁で、台形状の厚い高台を有し、体部は高台部から内青気味に外上方へ立ち上がる。釉は薄く、外面に細かい擦目を有する。	包含層
117	椀	-	-	6.0	青磁で、台形状の厚い高台を有する。外面には釉はかかっておらず、また内面見込み部分の釉を輪状にカギ取っている。	包含層
118	椀	-	-	5.0	青磁で、台形状の厚い高台を有する。外面には釉がかかるしていない。	包含層
119	椀	-	-	-	青磁で、釉の発色は青味を帯びた緑色を主体とする。内面に蓮花文を伴彫りしている。	包含層
120	椀	-	-	-	青磁で、内青気味に外上方へ立ち上がり、体部上位で若干内側に屈曲する。内面に沈線とクシ目が施される。	包含層
121	椀	-	-	-	青磁で、内面に沈線を施される。	包含層
122	椀	-	-	-	青磁で、釉色は黄色気味の青色ガラス質の釉である。内面にヘラによる片割りと模によるジグザグ文様を有する。	包含層
123	皿	-	-	-	青磁で、釉色は黄色気味の青色ガラス質の釉である。内面にヘラによる片割りと模によるジグザグ文様を有する。	包含層
124	椀	13.0	3.9	6.5	土師質の碗で、口縁端部を丸く肥厚させ、内外をヨコナデする。胎土は砂粒が若干入りや粗で、淡橙灰色を呈する。	包含層
125	椀	12.9	4.3	5.8	土師質の碗で、口縁端部を外領気味におさめ、口縁部内外をヨコナデする。胎土は砂粒がありや粗で、淡橙灰色を呈する。	包含層
126	椀	12.4	4.4	5.9	土師質の碗で、口縁端部を内領気味におさめ、口縁部内外をヨコナデする。調整に粗雑な感じを受け、胎土は淡灰白色を呈す。	包含層
127	椀	12.0	4.2	5.4	土師質の碗で、口縁端部を面取りして内領気味におさめる。胎土は緻密で、淡灰白色を呈する。	包含層
128	椀	11.6	4.0	5.9	土師質の碗で、口縁端部をやや肥厚させて丸くおさめる。内面に工具痕が観察され、全体に粗雑な感じを受ける。	包含層
129	皿	9.8	3.5	7.7	土師質で、底部はやや厚めの円板状をなし、口縁部は丸くおさめる。底部は回転ヘラ切りで、胎土は粗で、淡橙灰白色を呈す。	包含層
130	皿	12.9	3.4	8.0	土師質で、底部は回転ヘラ切りで、口縁端部は丸くおさめる。内外面ヨコナデで、胎土はやや粗、淡橙灰白色を呈する。	包含層
131	皿	15.0	3.3	9.2	土師質で、底部は回転ヘラ切りで、口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめる。内外面ヨコナデ、胎土は緻密で、淡橙灰白色。	包含層
132	皿	12.8	2.7	7.5	土師質で、底部は回転ヘラ切り、口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめる。内外面ヨコナデ、胎土は粗く、淡橙灰白色を呈す。	包含層
133	皿	13.0	2.6	8.3	土師質で、底部は回転ヘラ切り、口縁端部はやや尖り気味におさめる。内外面ヨコナデ。胎土は粗く、橙灰色を呈する。	包含層
134	皿	13.0	2.4	9.2	土師質で、底部は回転ヘラ切り、口縁端部はやや細く尖り気味におさめる。内外面ヨコナデ、胎土は粗く、淡橙褐色を呈する。	包含層
135	椀	-	-	5.4	須恵質で、底部は回転ヘラ切り、内外面ヨコナデである。胎土は比較的の緻密で、淡灰白色を呈する。	包含層
136	椀	-	-	6.0	須恵質で、底部は回転角切り、内外面ヨコナデである。胎土は比較的の緻密で、淡灰白色を呈する。	包含層
137	小皿	7.1	1.4	5.8	土師質で、底部は回転ヘラ切り、内外面ヨコナデである。胎土は緻密で、淡橙灰白色を呈する。	包含層
138	小皿	8.6	1.25	6.7	土師質で、底部は回転ヘラ切り、内外面ヨコナデである。胎土はやや緻密で、淡橙灰白色を呈する。	包含層
139	小皿	8.8	1.2	7.2	土師質で、底部は回転ヘラ切り、内外面ヨコナデである。胎土はやや緻密で、淡橙灰白色を呈する。	包含層
140	台付小皿	9.0	3.0	6.0	土師質で、胎土は砂粒が混じり粗で、淡橙褐色を呈する。	包含層
141	台付小皿	10.7	2.4	6.9	土師質で、小皿に高台を貼付した形態をしており、内外面ヨコナデである。胎土はやや粗く、淡橙灰白色を呈する。	包含層
142	台付小皿	12.8	3.4	6.4	土師質で、底部は回転ヘラ切り、内面ヨコナデである。胎土はやや粗で、淡橙灰白色を呈する。	包含層
143	鍋	40.0	-	-	土師質で、ぐの字状に外反する口縁部をしており、脚部外面タテハケ、内面ヨコハケ後、口縁部内外をヨコナデする。	包含層

144	鍋	34.0	-	-	土師質で、くの字状に外反し口縁部をやや肥厚させて平坦におさめる。外面タケ、ナメマハケ、内面ヨコハケである。	包含層
145	鍋	28.0	-	-	土師質で、口縁部をややくった位置に断面台形の突帯を貼付する。外面縁以上はヨコナデ、以下ナデ、内面ヨコハケを施す。	包含層
146	鍋 脚	-	-	-	土師質で、端部をやや跳ね気味におさめる。外面はナデにより面取り気味に調整されている。	包含層
147	坏 蓋	16.0	-	-	須恵質で、口縁端部をやや尖り気味におさめる。外面ヨコナデをしており、胎土は緻密で、淡灰白色を呈する。	包含層
148	坏	-	-	10.0	須恵質で、底部傾斜変換点にやや鋸入張り気味の高台を貼付する。胎土はやや緻密で、淡灰白色を呈する。	包含層
149	椀	-	-	8.4	土師質で、内面黒色修理をしている。外面はナデ調整で、底部外面部にはヘラ切り痕が観察され、胎土はやや粗く、淡灰褐色。	包含層
150	皿	11.5	3.4	4.0	須恵質で、口縁部をやや外反させ端部を丸くおさめる。底部は上げ底氣味である。内面にタイの目が認められる。	包含層
151	坏	11.5	-	-	須恵質で、外面ヨコナデ後底部へラ切り後、指押さえを行っている。胎土は緻密で、淡灰白色を呈する。	包含層
152	甕	-	-	-	土師質で、外面タテハケ、内面ヨコナデ調整、胎土は3.0mm程の砂粒があり、淡茶灰色を呈する。	包含層
153	甕	-	-	-	土師質で、外面ナデ、内面ヨコナデ調整、胎土は3.0mm程の砂粒があり、淡茶灰色を呈する。	包含層
154	鉢	33.0	10.1	13.9	須恵質で、口縁端部はやや肥厚しておさめ、口縁部はやや底灰褐色。	包含層
155	鉢	32.0	-	-	土師質で外面タテハケ、口縁部ヨコナデ、内面口縁部付近ヨコハケ以下ナメマハケである。淡茶灰色を呈する。	包含層
156	鍋	30.0	-	-	土師質で、外面タテハケ、内面ヨコナデ、口縁部内外ヨコナデを施す。胎土は2.0mm程の砂粒があり、淡灰白色を呈する。	包含層
157	甕	-	-	-	須恵質で、胸部外側は比較的細かい目のタタキを行い、内面はナデを行う。胎土は緻密で、淡灰白色を呈する。	包含層
158	甕	25.2	-	-	土師質で、口縁部をくの字状に外反し、内面頭部以下をヨコケズリし、口縁部外側をヨコナデする。茶褐色を呈する。	包含層
159	壺	26.0	-	-	口縁部外側に4条の凹線を施し、上に棒状付文を貼付する。胎土には3.0mm程の砂粒があり、淡茶灰色を呈する。	包含層
160	甕	-	-	-	瓦質で、長方形気味の台形をしており、断面台形である。表面左側は使用により磨滅が著しい。胎土は緻密で、淡灰褐色。	包含層
161	甕	-	-	-	土師質で、平面長方形をしており、断面方形である。椭円形に輪削を施す。胎土はやや緻密で、桜褐色を呈する。	包含層
162	獸 足	-	-	-	土師質で、先端部に張り合わせ痕が観察されるが、側面までには及んでいない。胎土は中世の皿と似ており、淡桜褐色を呈す。	包含層
163	軒 平 瓦	-	-	-	平瓦の端部を折り曲げて、上邊に胎土を付け足して瓦頭面を作りだしている。均等唐草文と推定される不鮮明な文様を施す。	包含層
164	軒 平 瓦	-	-	-	平瓦の端部下に胎土を付け足し瓦頭面を作りだしている。唐草文と推定される文様が施される。	包含層
165	平 瓦	-	-	-	凸面に0.4cm間隔の横溝の平行タタキを施す。タタキ板の裏側が判る程粗い調整である。胎土はやや軟質で、淡灰白色を呈す。	包含層
166	平 瓦	-	-	-	凸面に一边2.5cmの粗大な格子目タタキを施す。胎土はやや軟質で、淡灰白色を呈す。	包含層
167	平 瓦	-	-	-	凸面に一边0.8cmの比較的細かな格子目タタキを施す。やや厚手で、四面の目目も細かい。胎土は硬質で、桜褐色を呈する。	包含層
168	平 瓦	-	-	-	凸面に縦目のタタキを施す。比較的厚手である。胎土はやや軟質で、桜褐色を呈する。	包含層
169	軒 平 瓦	-	-	-	平瓦の端部を折り曲げて瓦頭面を作りだしている。やや不鮮明だが、唐草文を施し、凸面には0.3cm幅の平行タタキを施す。	包含層
170	軒 平 瓦	-	-	-	平瓦の端部を折り曲げて瓦頭面を作りだしている。やや不鮮明だが、唐草文を施し、凸面には0.3cm幅の平行タタキを施す。	包含層
171	高 坏	-	-	-	高环脚部で、外面タテハケの後ヨコナデを施す。环部接合部付近に粘土を貼って補強し、内面はヨコケズリ後環部付近ナデ。	土器層 り
172	高 坏	-	-	-	高环脚部で、内面ヨコケズリ後环部付近をナデしている。胎土はやや砂粒が入り粗で、暗茶褐色を呈する。	土器層 り

173	高	坏	-	-	-	高环脚部で、内面ヨコケズリ後裾部付近ハケ、外側ナデの後ナメハケ。胎土には微細な砂粒が入り、淡灰白色を呈する。	土器溜り
174	高	坏	-	-	-	高环脚部で、内面ヨコケズリ後裾部付近をナデしている。外側はナデ。胎土はやや砂粒が入り粗で、淡橙灰色を呈する。	土器溜り
175	高	坏	-	-	-	高环脚部で、内面ヨコケズリ、外側ナデる。胎土は1.5mm程の砂粒が入り粗で、橙灰白色を呈する。	土器溜り
176	高	坏	-	-	-	高环脚部で、内面ヨコケズリ後裾部付近ナデ。胎土はやや砂粒が入り粗で、茶褐色を呈する。やや作りが軽い。	土器溜り
177	高	坏	-	-	-	高环脚部で、内面ヨコケズリである。胎土は若干砂粒が入り粗で、淡橙褐色を呈する。175とよく似ている。	土器溜り
178	高	坏	-	-	-	高环脚部で、内面斜め方向のヘラケズリである。胎土は若干砂粒が入り粗で、淡橙灰色を呈する。	土器溜り
179	高	坏	-	-	-	高环脚部で、外側ナデる。指頭圧痕が比較的顕著に残る。胎土は若干砂粒が入り粗で、淡茶褐色を呈する。	土器溜り
180	高	坏	-	-	-	高环脚部で、外側タテハケ後ナデる。内面ヨコケズリ。胎土は砂粒が入り粗で、淡茶褐色を呈する。	土器溜り
181	高	坏	-	-	-	高环脚部で、外側タテハケ後タテナデ裾部ナデ。胎土は若干胎土は若干砂粒が入り粗で、茶褐色を呈する。	土器溜り
182	高	坏	-	-	-	高环脚部で、外側タテハケ後ナデ、内面ヨコケズリ後裾部付近ナデ。胎土は砂粒が入り粗で、淡茶褐色を呈する。	土器溜り
183	高	坏	-	-	-	高环脚部で、胎土は2.0mm程の砂粒が入り粗で、淡茶褐色を呈する。	土器溜り
184	高	坏	-	-	-	高环脚部で、外側タテハケ後タテナデ、内面ナデる。胎土巻き上げ痕が明瞭に観察される。胎土は若干砂粒が入りやや粗い。	土器溜り
185	高	坏	-	-	-	高环脚部で、胎土は若干砂粒が入り粗で、淡橙褐色を呈する。	土器溜り
186	高	坏	-	-	-	高环脚部で、外側タテハケ後ナデる。内面ヨコケズリ後裾部付近ナデる。胎土は砂粒が入り粗く、淡灰白色を呈する。	土器溜り
187	高	坏	-	-	-	高环脚部で、内面ヨコケズリ。胎土は砂粒が入り粗く、淡橙褐色を呈する。	土器溜り
188	高	坏	-	-	-	高环脚部で、内面ヨコケズリ後裾部付近ナデ。外側ナデる。胎土は若干砂粒が入りやや粗く、淡橙灰色を呈する。	土器溜り
189	高	坏	-	-	-	高环脚部で、内面絞り痕の上からヨコケズリ、外側ナデる。胎土は若干砂粒が入り粗くやや粗く、淡橙灰白色を呈する。	土器溜り
190	甕		19.0	-	-	甕の口縁部で、両部付近が内面に肥厚する。内外面ヨコナデを施す。胎土は若干砂粒が入り粗く、茶褐色を呈する。	土器溜り
191	高	坏	-	-	-	高环の环部で、内外面の調整は磨滅のため不明。胎土は砂粒が入り粗く、茶褐色を呈する。	土器溜り
192	高	坏	-	-	-	高环の环部で、内外面ナデる。胎土は砂粒が入り粗く、淡灰白色を呈する。	土器溜り
193	高	坏	-	-	-	高环の接合部で、内外面の調整は磨滅のため不明。胎土は砂粒が入り粗く、茶褐色を呈する。	土器溜り
194	高	坏	-	-	-	高环の脚部で、胎土は若干砂粒が入りやや粗く、淡茶褐色を呈する。	土器溜り
195	高	坏	-	-	-	高环の脚部で、内外面の調整は磨滅のため不明。胎土は若干砂粒が入り粗く、茶褐色を呈する。	土器溜り
196	高	坏	-	-	-	高环の脚部で、内面ヨコケズリ後裾部付近ナデ、外側タテナデ。胎土は微細な砂粒が入りやや密、淡灰白色を呈する。	土器溜り
197	高	坏	-	-	-	高环の脚部で、内面ヨコケズリ後裾部付近ナデ、外側タテナデ。胎土は微細な砂粒が入りやや密、淡灰白色を呈する。	土器溜り

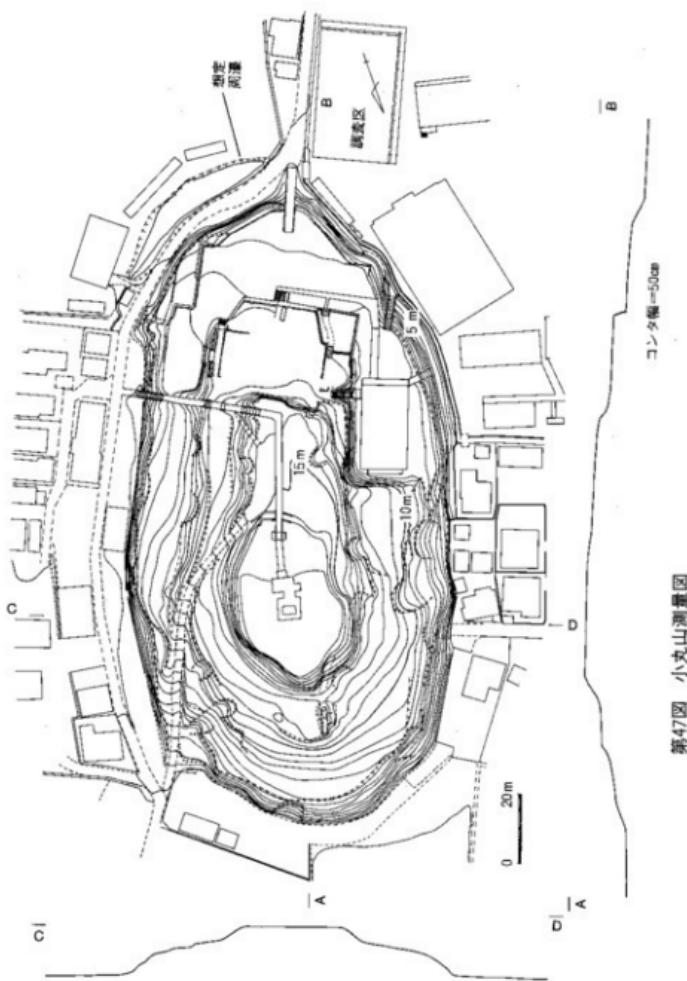
第四章 小丸山の測量調査

調査区背後的小丸山は、従来150mの規模にも及ぶ前方後円墳で、墳丘斜面には三段を数える段築があり、盾形周濠の存在も指摘されていた¹⁰⁾。そして一宮天神山一号墳→飯盛山古墳→小丸山古墳といった砂川、中川流域の小規模な単位平野内での前期から中期へと続く前方後円墳の一貫した系列が想定される。また100mを越える規模を有する古墳は、その数の希少性や規模の大きさなどから、小単位地域を越える吉備地域全体に於いての上位の政治的な結合関係を考える上で無視できないものであり、小丸山古墳は小単位地域内と、吉備という大地域社会全体の構造を考える上で非常に重要な位置にあった。ところが小丸山古墳の墳形について疑問が出てきており、小丸山古墳を全長150mの前方後円墳として扱うことに慎重になってきている¹¹⁾。そこで、今回小丸山古墳の前方部端部に当たると思われる地点を調査することになったと平行して、墳形を判断する材料を揃えるという目的から測量調査も実施した。以下測量結果とそれから派生した問題点を整理する。

測量結果

50cmごとにコンタを回した(図47)。頂部は標高16.5mで、測量図から全体の形は長椭円形をしており、所々に露出する崖面の観察などと合わせてみて、自然の独立丘陵と考えてよさそうである。従来から盾形周濠と言わされてきた池についても測量図に描かれた形態からは想定できず、また第二次大戦直後に撮影された航空写真からこの池の部分が当時存在していないことが確認でき、この池は周囲の水田を造成していく過程で比較的最近につくられたわみ状の部分であるということが考えられ、周囲の字名や地割りに於いても周濠の痕跡は見出だせない。

小丸山の頂部付近は長径46m、短径28mの不整円形の平坦面(A段)となっており、周囲に人工的な造成による明確な平坦面が観察される。これらの平坦面は元來の丘陵の形状を踏襲している。南側については、中山中学校の旧校舎によりかなり改変を受けており、当初の形状は明確ではないが、北側から続く平坦面と基本的に一致していることから、段造成は小丸山の南側にも及んでおり、山全体に段造成を行っていたものと考えられる。段はA~Gまでの7段(図48)が確認でき、まとまった広さをもつ段は頂部のA段と、それより1m下がるB段で、他の段は帯状に細長い形状で幅10~17m程である。D段とE段は現状では別個の段であるが、レベル高がそれ程異ならないことなどから、元來は同一の段であった可能性もある。またF、G段付近は現在A段にある祠への参道でかなり改変を受けており明確ではないが、それぞれの段のレベルが異なっており複数の小規模な段が存在していたと考えられる。C段はA、B段の裾部



巡っており、幅10~12mで、F、G段に比べて若干幅が狭い。またA段の北側には、北部分が削平を受けてはいるものの明瞭な土壘が観察される。土壘は西側のものが幅5m、長さ10m、東側が幅2.8m、長さ3mである。ところが、土壘がA段斜面に接合していない等、段との機能的な整合性が不明瞭で、段と土壘が別個のものにも感じられる。

さて以上から小丸山の現在の形状が前方後円墳形ではなく、長楕円形の自然丘陵に幾つかの人工的な段造成を行っていることが確認できた。これらのことから小丸山が小規模な城砦である可能性が指摘できる。そうすると、A段=第一曲輪、B段=第二曲輪、C、D、E段=帯曲輪、F、G段=腰曲輪という想定が考えられる。但し、埴輪が一片北側のA段斜面部で採集されており¹⁰、現状の地形からは古墳の形状は確認できないが、小丸山上に古墳が存在していた可能性は考えられる。

小丸山の全長は約180m、幅約90mで、頂部までの比高差は14.4mである。

まとめ

小丸山は前方後円墳であるということ以外に文献上2度出てくる。いずれも幕末から明治にかけてのことだが、最初は第一次長州征伐の行われた元治元年（1864年）である。岡山藩第11代藩主池田茂政が長州に向かって出陣し、吉備津彦神社に本陣を置いて小丸山の北側に土壘を築いたとい¹¹。おそらく小丸山頂部下北側の土壘がそれに当たると思われ、形態的には山陽道に向けて砲台を据える壠台であったことが推定される。長州軍西上に対する措置と考えられる。次は明治四年御津郡河内村山条から起った強訴一揆が菅野村、柏谷村を経て、横井村へ入りさらに南下して、最終的に小丸山に立て籠もるという事件があった¹²。これらのことは当時の社会情勢が契機となっているものの、小丸山が城砦的な地形を有していることと、山陽道という陸路と中川、砂川、笠ヶ瀬川という水運との結接点に位置し、交通の要路にあたることから利用されたものと考えられる。

またこの条件は近世以前においても同じで、備前と備中の境、即ち宇喜多氏と毛利氏との勢力圏の接点に位置するという条件がさらにその重要性を増していたものと推定される。実際に、宇喜多直家が織田信長に属したことにより、宇喜多氏と毛利氏の直接衝突となった天正七年以



第49図 西辛川城縄張図及び周辺小字分布図

0 100m

降、戦端が一宮辛川付近でも開かれ、「備前軍記」や、「湯浅文書」、「吉備津神社文書・大森七郎充直家感状」に「辛川合戦」、「辛川口の敗戦」、「辛川崩れ」として出てくるような大規模な戦闘が行われたことや、「高松城水攻め」後、「備前軍記」によると、羽柴秀吉が辛川で自軍の軍勢を整えたとされており、このことは、備前側の備中に対する最前線基地としてのこの辺り

の重要性を具体的に示している。

小丸山周辺での中心的な山城としては辛川城が存在する。辛川城は「御津郡誌」によると、城主は虫明市内で「浦上氏のために備中の押となる。後宇喜多氏に従ひ八濱に戦死」⁽¹⁾ということで、平野北端に長野城などの同規模クラスの城郭が存在していることと合わせて、浦上、宇喜多の戦国大名に追随し、単位平野南半である一宮周辺を拠点とした国人層の居城であったと考えられる。山頂には輪郭式の城郭（図49）を形成している。南麓には「城まわり」、「城ノ前」という地名（図49）が現在残っており、その部分にかなり竹林によって削平されてはいるものの台形をした郭状の地形が存在することから、ここに根小屋が想定され、辛川城は山頂の本城と根小屋の二元構成からなる城郭であったと推定される。辛川城が城主の虫明氏と浦上氏、宇喜多氏との関係から、天神山城、或いは富山城の支城的な役割をしていたことは予想されるが、それと同様に、小丸山は辛川城に対しても山陽道を挟み込む位置にあることや、平野の開く方向である南からの侵入に対しての前衛にあたるということから、辛川城の出城的、支城的性格の城郭であった可能性が考えられる。そしてさらに小丸山は、一宮への東の入り口である散泊峠を意識した蜂矢城⁽²⁾、一宮の南東部を意識した山崎城⁽³⁾、一宮の北の入り口である大塙の背後にある城郭等⁽⁴⁾を辛川城を中心にして有機的に結合させて一宮平野全体を掌握する城塞群的なもの一部を構成していたということも推定される。

但し、夫々の城郭の時間的な平行関係や築城時期など明確でない点が多く、将来個々の城郭の測量図を作成する等の基礎作業を行い検討していきたいと思う。

註(1) 一宮町教育委員会『郷土読みいちらみや稿本』 1969年

岡山大学教育学部社会科教室内地域研究会『一宮の歴史と現代』 1970年

金光堅志『一宮の歴史』 一宮町教育委員会 1970年

(2) 萩原克入「第五章古墳時代前期」 「岡山県の考古学」 吉川弘文館 1987年

(3) 黒住秀雄・薬師寺慎一氏によって採集されており、孤塚者三氏より御教示を得た。

(4) 岡山県労働組合総評議会編『岡山県社会運動史』第1巻 労働教育センター 1977年

(5) 御津郡町村会『岡山県御津郡誌』 1972年

(6) 山崎城の位置は山頂付近の「白山」の小字が残る部分に比定されているが、それより南の支尾根端部に「城の内」という小字の残る部分で掘り切りと段造造成が観察され、山崎には2地点に城郭が形成されていた可能性がある。

参考文献

土肥経平「備前軍記」 「吉備群書集成」 第3巻 歴史図書社 1970年復刻

西本省三・葛原克人編『日本城郭大系』第13巻広島・岡山 新人物往来社 1980年

村田修三編『図説中世城郭事典』 新人物往来社 1987年

第五章 採集土壤の植物珪酸体分析

はじめに

調査区南端で検出された12層淡青黒灰色粘質土上面の土器溜り上には数層の粘質土層が形成されており、さらにその上には淡黄褐色粗砂が被覆し、中世遺構面の基盤となっている。土器溜り形成層である12層と土器溜り直上の11層の植物珪酸体分析を行い、周辺の古植生、古環境を検討し、遺構の検出されなかった土器溜り上下層の土地利用を推定する。

分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、「プラントオパール定量分析法」^⑩をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料の絶乾（105℃・24時間）
- (2) 試料約1gを秤量、ガラスピーブ添加（直径約40μm、約0.02g）
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散（300W・42kHz・10分間）
- (5) 沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
- (6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が400～500以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーブ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーブ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

分析結果（表1）

11層の試料からイネの植物珪酸体が4,400個/gと比較的高い密度で検出された。したがって、同層の時期に同地点もしくはその周辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

イネ以外にもタケ亜科A1aタイプ（ネザサ節など）が多く検出され、タケ亜科B1タイプ（クマザサ属など）やヨシ属、棒状珪酸体なども見られた。ヨシ属は植物体内に含まれる植物珪酸体の密度が低いことから、給源植物の生産量を推定する場合には、他の分類群と比較して課題に評価する必要がある。これらのことから、当時ここはヨシ属が生育するような比較的湿った土壤条件であったものと推定され、周辺部などではネザサ節やクマザサ属なども見られたものと考えられる。

まとめ

分析試料の数的な問題から、断定的には言えないが、調査地周辺は古墳時代中期時点では湿地状態であり、その時期直後に形成された粘質土層（11層）は調査区南半全体にはほぼ水平に広がっており、畦畔等は検出されなかつたが、水田として開発された可能性が考えられる。但し12層からはヨシ属のプラントオパールも検出されていることから、水田開発された後も周辺には尚も湿地環境が存在していたものと思われる。

註(1) 藤原宏志「プラントオパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—」『考古学と自然科學』 1976年

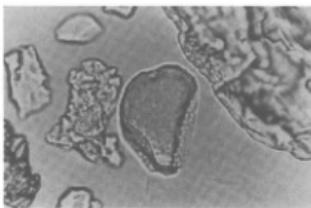
分類群	11層	12層
イネ科		
イネ	44	
サヤヌカグサ属		
ヨシ属	22	46
不明Aタイプ（キビ族類似）		
不明Bタイプ（ウシグサ族類似）	37	46
不明Cタイプ		
表皮毛起源	22	33
茎部起源	7	7
地下茎部起源	7	
棒状珪酸体	214	106
その他	199	245
タケア科		
A 1 aタイプ（ネザサ節など）	147	159
B 1 aタイプ（クマザサ属など）	74	33
B 2タイプ（メダケ節など）	22	
その他	398	206
樹木起源		
広葉樹起源	7	
（海綿骨針）	7	
植物珪酸体総数	1202	882

(単位: ×100個/g)

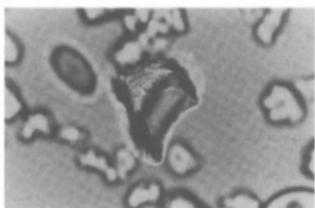
表1 植物珪酸体（プラントオパール）分析結果



第11層イネ



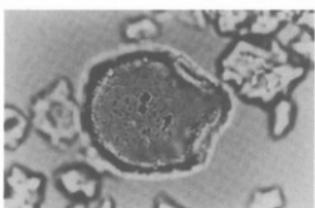
第12層不明B タイプ（ウシクサ族類）



第11層イネ



第12層タケ亞科A 1 a タイプ(ネザサ節など)



第11層ヨシ属



第11層タケ亞科B 2 タイプ(メダケ属など)

第50図 植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真（倍率はすべて400倍）

第六章 結語

一宮周辺の砂川、中川によって形成された単位平野は、旭川、吉井川、足守川下流域の単位平野より狭いとはいえるが、三角縁神獣鏡を出土する古墳や、60mクラスの前方後円墳が築造される等、古墳時代に於いてもある一定のレベルに達する政治的な位置を占めていたものと思われる。また、沖積面には整然とした条里地割りが残り、条里に沿って方形の溜め池が現存するなど、条里施行の単位や、時期等の古代からの土地制度を考える上で、貴重な資料を内包している地域といえる。ところが、現在までにこの地域、特に沖積地での調査は皆無で、今回が本格的な調査の最初であった。しかし、古代以来の集落形成地は山裾部以外は平野北半に推定され、今回は中世集落の調査が主な目的となった。そして小丸山西裾部の河川敷上に形成された集落の南端をおさえることができ、集落内部の遺構の構造や密度などについては明らかにできなかったが、遺跡の立地環境、遺物の組み合わせ等、中世という多様性を持った時期の様相を解析するデータは少なからず得られたと思う。

それと、調査区背後の小丸山は従来前方後円墳とする意見もあり、その前方部の墳壠ラインに調査区があたっていたが、調査の結果それは否定され、測量調査でも古墳状の地形は確認されず、古墳時代の一宮地域の首長墓系列を組み立てる上で確実なデータを得られた。

以上のように一宮周辺の単位平野を体現できる程の内容は少ないものの、今回の調査はこの地での発掘調査例の空白を埋めたということだけに止まらず、間接的である点も含めて、古墳時代から中世にかけての歴史的な動向を表出できたのではないかと考えている。

各遺構面

調査により小丸山遺跡が湿地→土器溜まり→水田→集落→水田という変遷を辿ったことがわかった。河川敷となって集落が形成されるのが中世段階であり、それ以前と以降とにわけてまとめてみたいと思う。

1. 中世以前

古墳時代中期以前、独立丘陵の小丸山裾部付近まで湿地状堆積であり、微高地状の地形は形成されていなかったようである。調査区南端で5世紀末から6世紀の土器溜まりが検出されたが、付近には集落の存在は想定できず、特に調査区北側からは全く当該期の土器等が検出されておらず小丸山裾部に集落がのってくることは考えられそうにない。つまり集落から離れた湿地環境の中にこの土器溜まりは位置していたようである。そして土器溜まり上面の11層は調査区南

端にしか認められないが、水田層であることがプラントオパール分析で確認されており、土器溜まり以降、即ち6世紀以降に調査区付近の湿地が水田化されていったと考えられる。そして11層から中世集落の形成される6層の間に水田土層と推定されるものが数層あり、それらが上層にいくにつれて序々に調査区北側へと広がっていくことが確認され、それを南側からの水田開発の過程と理解している。実際、11層のプラントオパール分析からヨシ等のプラントオパールが検出されており、水田開発されてからも付近に湿地環境が存在していたという結果がでている。また水田開発の時期については土器溜まりの時期から上限が6世紀初頭で、下限については11層から遺物が出土しておらず明確でないが、6層以下で最も水田層が広範囲に広がっている8層から9世紀前半の坏（図43-151）が出土していることから一応9世紀前半以前と考えておきたい。

（1）土器溜まりについて

土器溜まりを構成する器種は殆ど高坏で占められており、破片数を含めると70個体以上で、土器溜まり出土土器のうちの94%にある。例えば5～6世紀の堅穴住居から出土する土器に於ける高坏の占める割合を見てみると、上相遺跡1号住居³⁰で12%、原尾島遺跡堅穴住居24³¹で土師器の場合だけだと9%、須恵器を含めても20%で、大体土師器の高坏は堅穴住居一軒に3個体前後出土している。 $70 + \alpha \div 3$ として単純に計算すると、この土器溜まりの高坏は堅穴住居20～30軒分ということになる。但し土器溜まりはその場で人為的には埋められていなかったため、当初はさらに土器の量は多かったと推定される。そうすると、この土器溜まりの土器製作者の数が堅穴住居20～30軒分以上であるということが実数として確認できないものの、この土器溜まりは比較的纏まとった人数で、しかも高坏の占める割合が非常に高いということから、何らかの祭祀を行った結果と考えられる。そしてこの土器溜まりが集落外であることと、出土した高坏に、脚部に円孔があるものやないもの、ヘラミガキの有無や方向等、細部の調整、形態に幾つかのバリエーションが認められ、このことを複数単位の製作者によってここへ持ち込まれたものと考えると、この土器溜まりの祭祀は複数の集落の共同運営により、日常的に使用している土器が主体で特別な祭祀具等が伴わないことから、古墳を造営するような権力者を介さない、一般の村落を基本にしたものであったと考えられる。そして水辺環境に存在することから、複数単位の村落の共業の要素が多分にある「水利」に関する農耕祭祀の可能性を考えたい。

この祭祀の具体的な儀礼の内容は分からぬが、ただ高坏等の食膳に使用する土器が多量に投棄されていることをこの付近で集まって「飲食」した結果と理解すると、後の奈良期の大宝令、養老令の条文による「春時祭田」に近い形態であったことが推定される。「春時祭田」とは「村ごとにある社」³²で、村ごとにいる「村首」という村落首長が「中心的に準備し、主宰」

^⑨し、「村内の男女が悉く集まり」^⑩会食を行う農耕祭祀で、律令に規定されてはいるものの、実際は「八世紀の農村で自主的に行われていた祭祀」であるとされている。ところが、「春時祭田」は村落内部で行われることにより、村落内部の共同体的な結合関係を強め、そしてその中心にいる村落首長の支配領域を明確にするが、この土器溜まりの祭祀は村落外で行われており、祭祀の範囲はかなりルーズで、須恵器が若干伴うことから祭祀を主宰する司祭者の存在は肯定できるが、それ以上に求心的な要素は認められない。このことを八世紀段階の村落祭祀と、五世紀一六世紀段階の村落祭祀というようなレベルでの短絡的な比較はできないけれども、農業生産の増大と鉄、塙生産によって世帯共同体である家父長層の成長が意義付けられている六世紀末一七世紀の群集墳の出現以前と以後の村落構成員の結合関係を考える上で一つの視点になるものと思われる。

ところで県南部で、5~6世紀に一般集落外で日常使用している土器を多量に用いた祭祀に関係すると思われる遺跡が笠岡市走出遺跡^⑪と岡山市高島遺跡^⑫で調査されている。走出遺跡は5~6世紀に築かれた長福寺裏山古墳群のある丘陵西斜面でみつかった土壤中に多量の土器が埋没していたもので、土器には土師器の壺、高坏、鉢、小形丸底壺、手すくね、須恵器には壺がある。そのうち最も多い器種が手すくねで全体の46%、次が高坏で22%である。この遺跡は付近にある50~60m規模の前方後円墳を含む中規模首長層を主体とする長福寺裏山古墳群に対する墓前祭祀等の関係も指摘されている^⑬が、明確な手掛りはなく具体的には不明である^⑭。高島遺跡は児島湾に浮かぶ小島上にあり、過去三回の発掘調査で土器、彷彿重圓文鏡、鐵軸、鍊状鉄器、刀、甲冑類断片、各種の石製模造品が出土している。調査地点により出土物が若干異なるが、大体土師器は壺、皿、碗、手すくね、高坏で、最も多いのが高坏、須恵器は大部分が壊である。この遺跡は畿内と朝鮮半島、中国大陆、或いは両者と言備地域を結ぶ瀬戸内海航路に位置しており、この航路を利用していた当時の権力者層から漁業を主体としていた周囲的一般民衆レベルまでの比較的広い範囲の階層からの祭祀が想定される。

さて、それぞれの位置する空間は異なっているが、小丸山遺跡、走出遺跡、高島遺跡にみられる祭祀は、遺物の構成から小丸山遺跡の土器溜まりの日常使用の土器に手すくねという祭祀専用の土器が多量に加わったのが走出遺跡で、さらに石製品、鐵製品、銅鏡等の祭祀具が加わったのが高島遺跡という関係が考えられ、それぞれの付加物は各祭祀の何らかのランクを示しているようである。ところが、いずれにも多量の日常使用の土器が伴うことから、そのランクに関係なく「飲食を共にする」という共同体的な側面の強い祭祀が想定され、日常使用の土器と隔絶した器物を主に用いている古墳上の祭式とは原理的に異なっている。

ともあれ小丸山遺跡の土器溜まりの様相は5~6世紀の集落外で行われる共同体的な祭祀の基本単位として位置付けられるものと考えている。

2. 中世

今回の調査に於いて最も多く出土したのが中世の時期を中心とした遺物で、コンテナ26箱の数量であったが、殆どが包含層からで遺構に伴うものは僅かであった。遺構は調査区北側で若干検出され、その在り様から集落の中心は調査区北側、小丸山の西裾部にあると推定される。調査区内で南西方向にレベルが下がっており、小丸山遺跡は、現在当地点から西へ200mの所を南流している砂川によって形成された河川敷に位置していたらしい。

まず出土した遺物のうち、土師質土器、瓦、陶窯について整理し、それらを踏まえて小丸山遺跡の中世遺構の性格を若干まとめてみたいと思う。

(1) 中世土師質土器について

中世の遺跡からは多量の土師質土器が出土する。それらは非常に単純化された器形に見えるが、調整や大きさが時期によって異なっていく傾向も看取され、日常の生活用具としての使われ方の変化を反映しているものとも考えられる。例えば12世紀後半に書かれた『餓鬼草子』に出てくる出産の場面で呪いのために多数割られる「かわらけ」や、鉢饅を盛る容器として用いられる等、土器が汁器等の食器から後退し仮器としての使われ方をされるようになったとも想像できる。いずれにせよ遺跡から普遍的に出土することから常に一般生活に寄着して使われていたものと思われる。

近年これらの土師質土器、特に古代に於いて吉備といわれていた中部瀬戸内北岸地域に分布する「早島式土器」¹⁷⁾、「土師質高台付椀」¹⁸⁾、「吉備系土師質土器椀」¹⁹⁾と呼ばれている椀を中心とした研究が良好な一括遺物の調査例の増加と相俟って進んでいる。具体的には椀の器表面に行うヘラミガキ調整の粗略化と、口径と器高を中心とした法量の縮小化を視点にした編年作業や、「中世社会の成立」を意識しての椀を中心とした土器組成の成立時期が追及されている。また成形技法については、「粘土紐巻き上げ成形」²⁰⁾、「内型成形」²¹⁾、「体部接合技法」²²⁾、「底部押し出し技法」²³⁾等の方法が考えられており、同時に複数の技法が存在していた²⁴⁾のか、それとも時期によって変化するのかというような視点も含めて検討は続いている。ただ邑久町助三畠遺跡井戸4から294個体もの椀が出土しており、その椀のなかには複数の成形技法が観察されるようである²⁵⁾。また内在する小地域性²⁶⁾については、椀の「胎土や器形から備前・備中・備後に大別することが可能である。」という指摘以来あまり積極的な検討は進んでいないが、中世段階に於ける国術機能の影響等を契機として分布する地域性を示唆する考え方もある²⁷⁾。

さて今回の調査では、主に包含層から多量の土師質土器や、他地域産の須恵質土器、中国製

陶磁器が出土し、この時期の一般的な集落遺跡の内容と殆ど異なる様相ではなかった。ただ土師質土器のうち碗の割合が少なくて皿の割合が多いという特徴と、また大口径の皿に高い高台を貼付した他の地域ではあまり見られない器形の存在が看取された。これと同じような特徴をもつ遺跡が小丸山遺跡の南1.8kmの位置にある天神瀬遺跡¹⁰、西へ1.8kmの位置にある吉野口遺跡¹¹等の小丸山遺跡の周囲で確認されている。特に碗より皿の方が多いという特徴については、碗が無く皿だけの組成である美作地域と碗の伴う備前、備中地域、或いは碗の伴う広島県東部と碗の伴わない広島県西部¹²といった関係と似た要素が指摘できる。そこで碗、皿、小皿、高台付皿等の土師質土器の器種構成のうち、碗と皿の個体数の比率が一定範囲の地域ごとに繋まることが予想され、それを時期ごとに整理して碗の分布する吉備地域のなかに存在する小地域差的な単位を抽出し、この時期の在地の流通構造を追及する基礎資料をつくりたいと思う。但し夫々抽出した小地域内での発掘調査地点数の多寡により比較できる資料数にはかなりの差があることから、小地域内でも時期によって器種構成が変動するかどうかという点やさらに細分できる可能性のある地域等を含めた問題は、今後検討していくべきと思っている。

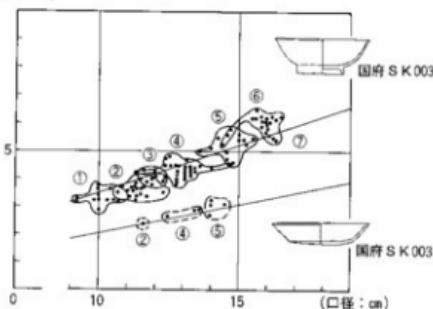
以下3つの前提を踏まえて結果を述べる。

〈前提1：編年〉（図51、52、53、54）

土師質土器のうちで最も編年作業の進

んでいる高台付きの碗を時間軸設定の基準にする。碗の時間的変化は、器表面のミガキの粗略化と法量の縮小化ということが標徴となるが、両者は平行してなされるのではなく、ミガキが退化してから比較的ランダムな法量の縮小、具体的には口径と器高の縮小が起こる。両者には

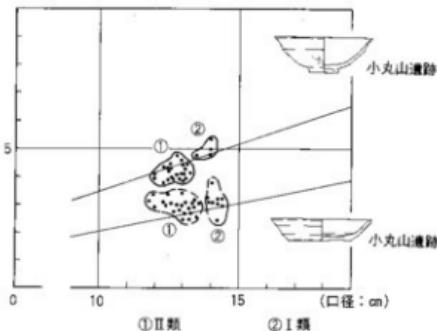
(器高: cm)



第51図 足守川以西地域法量分布図
 ①楠本遺跡No67土壤 ⑤国府SK-003
 ②清水角遺跡土壤I ⑥沖の店一号窯
 ③東山遺跡P-508 ⑦鹿木宮後遺跡木宮後遺跡
 ④川入遺跡P-9

第51図 足守川以西地域法量分布図

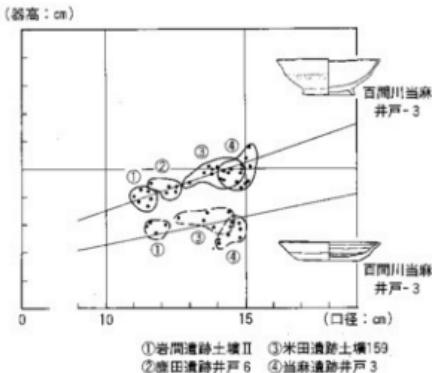
(器高: cm)



第52図 吉備中山周辺地域法量分布図

成形の簡略化という一貫した方向性は共有着しているものの、簡略化の対象が異なっており、それらに連動する作業内容や碗の使われ方にも違いがあることが予想され、一応内外面のヘラミガキの消失とランダムな法量変化し始める時点で前半期と後半期という境を設定しておきたい。ただ現時点では前半期の資料数が少ないとこや、当該期の編年作業が精力的に進みつつあるものの、やや流動的な要素もあり、ここでは主に後半期、12世紀前半から14世紀中頃のことについて取り上げることにする。

後半期は法量のバラツキから8期に分けた。即ち径が14~15cm、器高が4.5~6cmが後2期、口径が13.5~14.5cm、器高が4.5~5.0cmが後3期、口径が12~13.5cm、器高が3.8~4.5cmが後4期、口径が11.5~12.5cm、口径が3.5~4.2cm、が後5期、口径が11~12cm、器高が3.3~4cmが後6期、口径が9.8~10.5cm、器高が3~3.8cmが後8期で、後1期は沖の店1号窯と後2期の間の数値を、後7期は後6期と後8期の間の数値を予想している。ただこれらの数値は



第53図 旭川下流域法量分布図

	年代	足守川以西	吉備中山周辺	旭川下流	吉井川下流
		(沖の店一号窯) 窪木宮後遺跡		廣田遺跡井戸21	
後1期					
後2期		国府SK003		当麻遺跡井戸3	
後3期	1181年 (1200年)		I類	米田遺跡土壙I59 助三経道跡井戸3	
後4期		川入遺跡P9	II類		
後5期	(1250年)	東山遺跡P508			
後6期		清水角遺跡土壙1			
後7期	(1300年)				
後8期		樋元遺跡 No67土壙			
	1345年				

第54図 土師質土器法量別分類図

傾向であって同一時期の土器のなかにはこの数値内におさまらないものも散見される²⁰。

設定した時期の実年代を示す資料は殆どないが、後4期の助三畠遺跡井戸4から「養和元年（1181年）」の紀年銘を有する題籠が出土²¹しており、それと併存した瓦器の年代観が最近の畿内の瓦器の年代観と矛盾しないということと、後8期直後のいわゆる「無高台の椀」、「ヘソ皿」が貞和元年（1345年）造営の尾道市東久保町の浄土寺阿弥陀堂²²から出土しており、その年代観が造営時期に比定されていること等を実年代の定点として、その前後を機械的に振り分けると一期が25年間ということになった。但し後8期直後の年代の根拠となる資料はやや不安定な要素があり、将来より良好な資料を待って再点検したいと思っている。

〈前提2：土師質土器の生産単位〉

供膳具となる土師質土器の器形には、椀、皿、高台付皿、小皿、台付小皿がある。このうち椀以外の底部には、底部中央までに及ぶ回転ヘラ切り痕が観察され、それらは円柱状の粘土塊の上部をひねり出すか、或いはその上部に粘土糰を巻き上げて成形しており、色調は橙色系が主であるもののかなりバラエティーがある。椀については、色調が白色系が主で、成形についても皿や小皿の様に単純ではないようである。しかし皿、小皿に椀とほぼ同じ白色系の色調を持つものが存在することや、橙色系の小皿の胎土中に白色の胎土が結晶状に認められるというような例があることは、平安京の「白かわらけ」²³といわれる白色系の土器が白色発色の粘土を使用しているということと、現在の陶芸でも白色と橙色とに焼成後の発色が異なる2種類の粘土があるということと合わせて考えてみると、椀と皿、小皿との色調の相違は夫々が使用している粘土の種類に起因すると思われる。つまり椀については特に白色の粘土を意識して使用しており、皿、小皿についてはそれ程白色を意識していないようで、そのため白色系の粘土が混じったり、或いは白色の粘土で作っていたりするようである。そして各遺跡の一括廃棄と思われる遺構出土の椀と皿の口径が時期ごとにほぼ同じ数値にかたまる傾向にある（図51、52、53）ことと、椀に使用する粘土が皿、小皿に混入すること等は、椀、皿、小皿などの土師質土器は同じ所で製作されたと理解するのが妥当であると考えられ、ここでは供膳具となる土師質土器は同一製作者、製作集団による供給を想定する。

〈前提3〉

対象とする資料は椀、皿が複数入り、井戸、土壙などのある程度同時埋没の予想できるものを選んだ。天神浦遺跡²⁴の土器溜まりと天神浦遺跡の調査区内総出土土器の椀と皿の比や、吉野口（鯉山小）遺跡のP10²⁵と他の調査区内の同時期遺構中出土土器の椀と皿の比の数値が近似する傾向にあり、他の遺跡と遺構内の椀と皿の比は比較していないが、とりあえず遺構中の椀と皿の比がその遺跡全体での椀と皿の比を反映しているものと考える。しかし将来良好な遺物を含む遺構の資料数が増えた段階で、井戸とか土壙とか墓とかの遺構の性格ごとに分類し

て比較しなければならないと思っている。

〈椀と皿の構成比率の違いを指標とした地域性〉

足守川以西地域

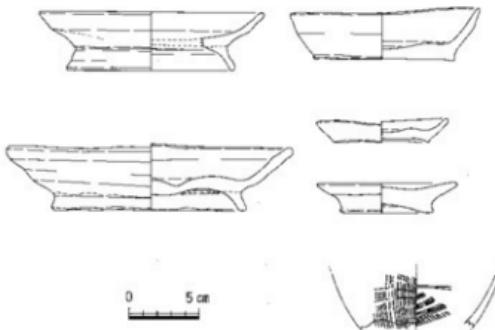
備中国の中心地として想定されるいわゆる総社平野とその周辺部である。発掘調査の地点が総社市街地周辺と足守川中、下流域に集中しているが、比較的各期の資料が揃っている。この地域は椀の胎土等から将来高梁川以西と以東、さらに以東は2~3の小地域に分けられる可能性を推定している。

備中国府第2次調査SK-003⁴⁴や清水角遺跡土壙1⁴⁵や樋本遺跡No67土壙⁴⁶、川入遺跡P 9⁴⁷などで良好な資料が得られている(図51)。後半期直前の様相は沖の店一号窯の椀⁴⁸が近いと思われるが、沖の店一号窯の椀については須恵器系「工人の応急的な土器」⁴⁹という技術的な系譜関係からの位置付けもなされており、ここでは参考として扱っておく。ただ数量的な裏付けがないものの同時期と思われる資料が窪木宮後遺跡の井戸から出土しており、将来同時期の良好な資料を待ちたい。また樋本遺跡No67土壙には「ヘソ皿」、「無高台の椀」が高台付きの椀と併せており、高台付きの椀の消滅していく直前の様相を示していると理解される。

この地域の椀と皿の比は圧倒的に椀の占める割合が多い。比較的多くの皿を出土した国府SK-003でも椀の3割程度で、皿の割合が非常に少ない。後3期以降殆ど皿は伴わない傾向が予想される。但し吉備中山周辺地域に近い位置にある東山遺跡P 508⁵⁰は後6期にも関わらず皿が椀の3割程度あり、吉備中山周辺地域特有の高台の付く皿に近い器形のものが一点伴う。このことはここで設定する地域圈が人為的な区画割りに起因するものではないことを示唆しており、地域の周縁部は隣接する地域からの影響を受け入れられていたと考えられる。

吉備中山周辺地域

備前、備中の国境周辺で、吉備中山山麓にある夫々備前と備中の一宮となっている吉備津彦神社、吉備津彦神社周辺部とも言える。両神社とも源平の争乱や承久の変などの中世前半期の政治的な変動の影響を直接受けており、そのことは両神社周辺の在地にも少なからず波及してい



第55図 天神洞遺跡土器混まり出土遺物

たと思われる。さて、従来この辺りは天神瀬遺跡での調査例しかなく、天神瀬遺跡の土器群を一定範囲に固定的に存在する地域性として認識するのは困難であったが、最近の小丸山遺跡、吉野口（鯉山小）遺跡の調査⁵⁸から一宮を中心に大体直径4～5kmの範囲が想定される地域と考えられる。

天神瀬遺跡土器溜まり（図55）、中山遺跡、吉野口（鯉山）遺跡P10、などで良好な資料が得られている（図52）。この地域の椀と皿の比は、皿の方が多い、大体椀1に対して皿3～5という比であるが、特に天神瀬遺跡の土器溜まりには全く椀が伴っておらず、調査区内全体でも椀の出土は僅かである。天神瀬遺跡の土器溜まりは皿、小皿、高台付大皿大小、青磁碗片という組み合わせで、完形の土器が少ないと数値的にやや不安だが、皿の口径が13～13.5cmの範囲におさまりそうで、同安窯系の青磁碗片が伴うこと等からこの土器溜まりの時期は後4期と考えられる。このことは調査区内で出土した椀の傾向とも矛盾しない。⁵⁹

皿の数量以外にこの地域の特徴として、高台付皿という器形がある。この器形は底部に回転ヘラ切り痕が残る口径の大きい皿に断面三角形のしっかりとした高台を貼付したもので、後2期頃には出現しており、天神瀬遺跡の土器溜まりの様相から後4期頃には大小の法量分化をしているようである。他の地域ではあまり見られず、隣接地域に属する上東遺跡⁶⁰で火葬墓の上部に伏せて置かれているような特殊な使われ方をしている例があり、当地域以外では殆ど日常的に使用されていなかったようである。

旭川下流域

備前国の中南部で、備前国府の存在が推定されており、古代以来の備前国を中心地として想定される地域である。発掘調査されている地点は旭西部南半の鹿田遺跡、旭東部南半の百間川遺跡群等を中心に岡山市街地全体に近い範囲にまで及んでいる。そのうちの般下渡領四ヶ荘の一つで畿内と直接的な繋がりのある鹿田荘に比定される鹿田遺跡の調査成果により、莊園という当時の社会構造の経済基盤となる領域の生産、流通構造を明らかにする資料が蓄積されつつある。

鹿田遺跡井戸6、21⁶¹、百間川当麻（米田）遺跡井戸3⁶²、米田遺跡土壤159⁶³、岩間遺跡土壤II⁶⁴等で良好な資料が得られている（図53）。そのうち当麻（米田）遺跡井戸3では破片が多く、実数としての比較が容易ではないが、完形の椀：完形の皿の比が3：1で、椀の口縁部片十完形椀：皿片+完形皿の比が3：1、つまり椀に対して皿が3割という数値が得られる。また当麻（米田）遺跡井戸3の他に多くの完形椀、皿が出土した米田遺跡土壤159の椀：皿が2：1になることから、一応当地域は皿1に対して椀が2～3の比率になると考えておきたい。それとこの地域には畿内系の瓦器椀と皿が伴っており、これは殆ど瓦器の入っていない足守川以西地域、吉備中山周辺地域とは異なる要素である。



第56図 土師質土器地域別分布図

吉井川下流地域

備前国の東半部で、「一遍上人聖絵」に出てくる福岡市などが立地しており、古代から中世にかけての備前国西部の中心地として想定される。助三畠遺跡井戸3号で良好な資料が得られている。井戸3からは多量の椀、皿、小皿等の土師質土器や、東播系の須恵質土器や畿内系の瓦器や青磁、白磁が、「養和元年（1181年）」の紀年銘を有する題籠と共に出土しており、そういった土器群に対する実年代比定の基準資料といえる。さてこの地域は今のところ助三畠遺跡井戸3でしかその内容を具体的に掘むことができないが、それによると圧倒的に椀の方が多く、皿1に対して碗7で、一見足守川以西地域と似ているが、畿内系の瓦器椀と皿が伴うという異なる要素が認められる。

〈小結〉

これらの地域は、足守川以西地域は椀卓越地域、吉備中山周辺地域は皿卓越地域、旭川下流地域は椀や卓越地域、吉井川下流地域は椀卓越地域と言い換えることができる。

土師質土器の生産単位は、生産遺跡が明確にとらえられている事が殆どないためよくわかっていないが、須恵質土器のような大規模な生産地を形成しているとは考えられず、沖の店遺跡²⁶で見つかっているような単発的な窯での操業であったと推定される。また、助三畠遺跡の井戸4等の多量に出土した一括廃棄の土器を観察すると²⁷、製作技法、調整等の特徴に幾つかのバリエーションが認められ、このことを複数の生産単位からの供給を受けた結果と理解すると、椀と皿の組み合わせに見られる地域単位は、沖の店窯のような生産単位の幾つかと消費地が取り引き空間である「市」とか、「座」のようなものを介して結合した言わば流通単位として把握できるのではないかということが予想される。そうすると、この単位が吉備中山周辺地域のように備前、備中という古代に於ける行政区画である国を越えて二国間に跨がっていることや、一国内でも幾つかの単位を形成していることなどは、国を生産と消費の単位として理解されて

いる10世紀以前の土器の様相⁹⁴とは異なっていると考えられる。ただ一方で、瓦器椀、皿が備前では一定量みとめられるが、備中では殆ど認められないという様相などは、瓦器流入の契機となる具体的な要因はさて置いて、国を単位とする需要と供給の関係も存在していたのも確かなようである。

しかし、生産段階のより卑近な位置にあり、一般の遺跡で出土する遺物うち圧倒的多数を占めていることから日常生活に密着して使用されていたと考えられる土師質土器の分布の在り様から、それまでの貢納物などの国府を介在するような交易を除いた古代の行政区画によって設定されていた国の内部での完結的な流通圏、言い換えると、行政区画=流通圏の図式の経済構造から、流通の主体者である在地の主体的な条件によって、古代からの行政区画を越えたり、或いは細分した流通圏が形成されていったことを想定している。そして、そうした流通構造は吉備地域の在地に於て後II期、12世紀中頃には形成されており、さらに遡ることが予想される。

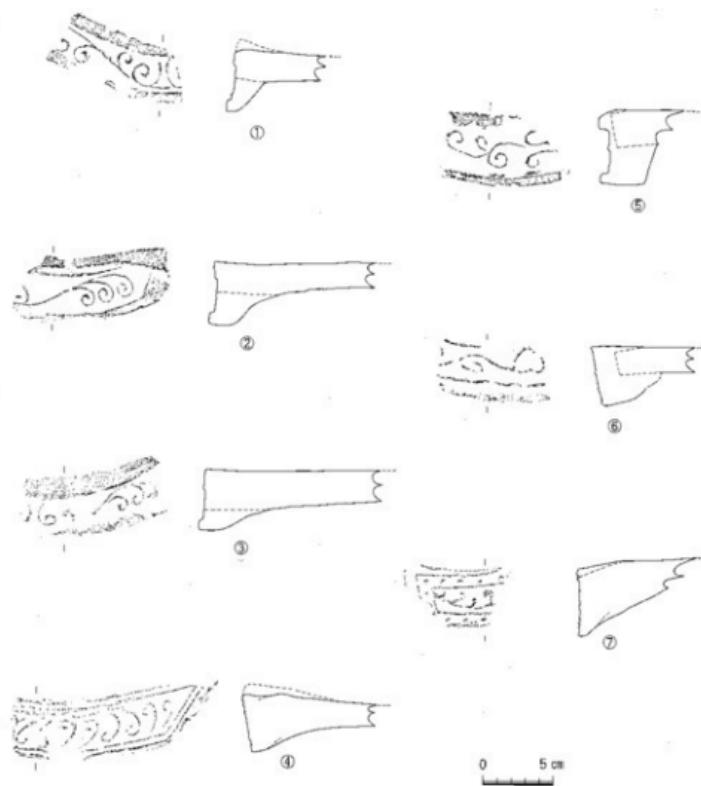
(2) 瓦について

平安京で出土する11世紀後半以降の瓦は、当時の地方の受領層が成功（充官）⁹⁵を目的に平安京を修造、或いは京内の寺を造営した結果、地方から搬入されたものとされている。特に10世紀までは瓦生産の費用を地方で弁済する形態であったのが、11世紀前半から地方産の瓦を直接搬入する形態に変化したことにより、地方産の軒平瓦の文様構成と瓦頭面の成形技法の分類とそれらの瓦の使用された建物から導かれる実年代とが照合され、生産地と消費地の流通関係が具体的に考察されている⁹⁶。

県下南部の当該期と推定される瓦をみると、一部の瓦に同形、同系譜の瓦頭文様の分布を指



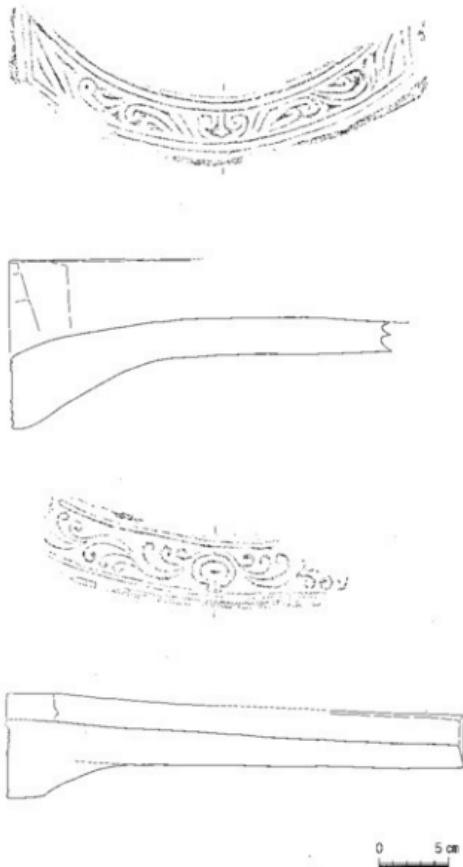
第57図 木戸タイプレ平瓦分布図



①赤磐郡万富村塩崎 ⑤吉備津神社
②木庭神社 ⑥堂敷山廃寺
③八徳寺 ⑦北野山廃
④北野山廃

第58図 吉備考古館収蔵軒平瓦実測図

摘する論もある⁵⁰が、播磨、丹波、讃岐、尾張等⁵¹の様にその地方特有の安定した技法を抽出できるような様相でなく、かなり文様や製作技法にバラエティーが存在するようである⁵²。そしてこのことは、当時の幾つかの地方産の瓦生産の背後に「京都南部の都市工人が地方に流出」⁵³する現象や、「中央から技術指導や文様の配布があった」⁵⁴ことが想定されていることから、吉備地域では地域としての纏まった独自の技法を形成せず、他地域からの造瓦技術を局部的に



第59図 的場勇氏網浜庵寺探集軒平瓦実測図

物の痕跡である亀山遺跡⁶⁶から出土しており、また平安京の豊樂院⁶⁷、左京四条一坊⁶⁸などでも出土が指摘され、この木藏神社タイプの軒平瓦は平安京に搬入された備前、備中系と言われている軒平瓦のうちの主要な部類であったと思われる。また亀山遺跡での出土から、木藏神社タイプの軒平瓦は少なくとも備中では生産されていたと考えられる。

吉備地域に於いて木藏神社タイプの軒平瓦は他に岡山市八徳寺⁶⁹（図58）と小丸山遺跡と瀬戸町万富⁷⁰（図58）から出土している。八徳寺は備前と備中系にある吉備中山の備前側の山頂付近に位置する山岳寺院で、現在は当時の建物等は残っておらず礎石と思われる石が若干散見

受容し、操業していたことが予想される。ここではその点を整理する目的で、瓦の出土地点と瓦頭の文様と成形技法との関係の分布図を作成する。但し瓦頭文様については「同文異範」、「同一意匠」、「同一系譜文様」等の区別で理解しなければならないと考えるが、何分資料が断片的で少ないとから、「同文異範」の範疇に入ると思われる例が比較的多く見つかっている木藏神社出土の唐草文軒平瓦⁷¹についてだけ行った。

〈瓦頭文様〉

岡山市一宮の木藏神社出土の主茎の先端が蕨手状に分岐する唐草文を持つ軒平瓦（以下木藏神社タイプと仮称）（図58）と類似するものが浅原寺跡で出土し、それが平安京民部省でも出土していることから、11世紀末～12世紀前半頃という年代を指摘されていた⁷²。さらに最近、備中の中世に於ける須恵器系統

されるのみである。出土した瓦は木藏神社タイプ軒平瓦の他にややそれより後出すると思われる唐草文軒平瓦がある。八幡寺は備中に近いが、瀬戸町万富出土のものは備前でも西部に属し、備中からかなり距離がある。つまり木藏神社タイプの軒平瓦は備前と備中の二国間にかなり広範囲に分布することが確認できる。(図57)

さらにこの平瓦の文様系譜上先行すると思われるものが岡山市網之浜廃寺³⁹、総社市秦原廃寺⁴⁰で出土している(以下網之浜廃寺タイプと仮称)。網之浜廃寺は備前で、秦原廃寺は備中に属する。網之浜廃寺については平城宮6663型式の軒平瓦(図59)が出土⁴¹しており、それと比較すると瓦当面の大きさが小さいことや、中心飾が逆転し形骸化しつつあることや、額部の形態などに後出する要素が見られることから、網之浜廃寺タイプ軒平瓦は奈良時代末~平安時代初頭の年代が推定できる。網之浜廃寺タイプの軒平瓦も木藏神社タイプと同じ様に備前と備中の二国間に分布している。網之浜廃寺タイプの軒平瓦の生産地ははっきりしないが、これに伴うと思われる単弁八弁蓮花文軒丸瓦と「同一系譜文様」で、間弁が省略され、さらに内区の弁の外縁を直線で表す等退化した形態のものが倉敷市黒土窯⁴²の灰原から出土していることから、網之浜廃寺タイプの軒瓦の生産地は少なくとも備中には存在したと考えておきたい。それと、黒土窯は須恵器を主に焼成しており、付近に同時期の寺は存在していない。

奈良時代末~平安時代初頭から後期に備前、備中の二国間に同文の瓦が分布することは、平安京へ地方産瓦の製品が移動したことを積極的に評価すると、単に瓦缶が備前と備中の間を移動したというのではなく、生産地からの製品としての供給を想定してもいいように思われる。それは、先行する白鳳期から奈良期に於いて備中の二子窯⁴³が各寺の造営事業を契機として設けられる一般的な瓦窯とは異なって、その所属する郡域を越えるような広範囲に瓦を供給しており⁴⁴、このことを特定の寺院への供給を目的としないある範囲に一元的に瓦を生産、供給するシステムがすでに存在していたと評価すると、二子窯や同様の性格が予想される黒土窯、亀山窯の存在する備中側に生産地を想定したい。しかし備前、備中の各寺で出土する平安期の瓦には夫々の寺によって文様等に差があることから、一般的には平安期の瓦も各寺によって生産されていたものと思われ、国を越えての瓦の供給は副次的なものであったと考えられる。そして備中が奈良期後半から平安期に須恵器生産が消滅していったことが指摘されており⁴⁵、その背景として備中での鉄生産、備前での須恵器生産といった貢納物に起因する分業生産が成立していたと考えられているが、ここではそれ以外に瓦の不足分を補填するような補足生産とでも言えるものが国衙の交易レベル⁴⁶で存在していたということを想定したい。但し、瓦生産が寺院の造営、修補に応じて行われた性格のものであり、「今日のように需要を見込んで多量に生産する」といった形態でなかったと推定され、「法燈のながく続いた」⁴⁷国分寺のような公的な寺の存在が背景としてないかぎり恒常的な生産、供給システムの存在意義は見出だせない

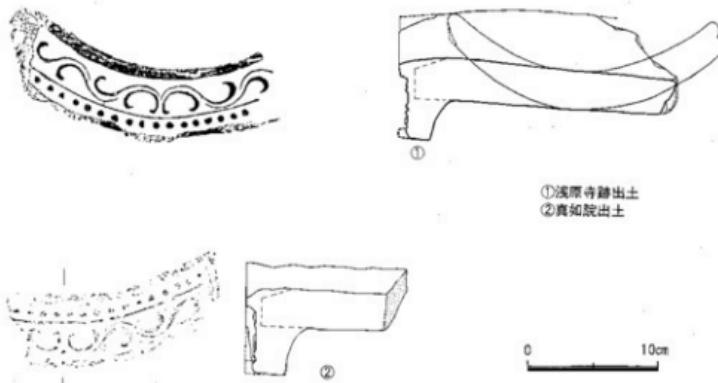
と思われるが、ともあれ網之浜タイプの軒瓦が單一生産地からの供給で二国間に流通する瓦の初源となる性格のものであったと予想している。

また木戸神社タイプ軒平瓦以外に平安時代後半に平安京へ搬入された瓦と同文のものが備前国分寺¹⁴、備中国分尼寺¹⁵、総社市三須磨寺¹⁶で出土している。それらのうち発掘調査によって



第60図 成形技法別軒平瓦分布図

比較的内容のはっきりしている備前国分寺の瓦が「量的には創建時のものにくらべると非常に少ない」とされ、備中国分尼寺や三須磨寺でも同じことが予想されることと、夫々の寺に瓦の分有関係があることから、創建時のように寺付属の瓦屋による大量生産といった形態でなく、他の生産地からの差し替え分だけの搬入の可能性を考えてもいいように思われる。そしてそれ



第61図 軒平瓦実測図（報告書原図に接合部を加筆）

らの生産地については、備中だけでなく、やや時期が遅るが『小右記』、『御堂関白記』、『榮華物語』から藤原道長の私第である土御門殿の再建（1016年）の時に成功を目的として備中国司・藤原知光や備前国司大江景理も参加している¹⁰ことが窺われ、後に備前にも成功も目的とした瓦生産を開始した可能性は考えられる。ただ備前、備中の二国間に共通して分布する瓦については備中での生産を予想したいが、亀山窯のようなそれに当たる窯跡の調査資料の蓄積を待つて検討したいと思っている。

〈瓦当成形技法〉

瓦当の成形技法の特徴によって分類し、さらにそれらを生産地と消費地の両方からの資料の集成によって、多様な文様を持っていた平安後期の軒平瓦が、生産地ごとに中央官衙系、播磨系、丹波系、讃岐系、東海系と分離して理解されるようになった¹¹。ここでもその成果に沿ってみたいと思うが、断片的で成形技法を判断できないものも多いため、平瓦端部を別粘土で包み込むことを特徴とする播磨系の「包み込み技法」¹²（以下A技法とする）、基本的に平瓦端部を屈曲させて瓦当面を作る中央官衙、丹波系の「折り曲げ技法」¹³（以下B技法とする）、平瓦端部の凸面側に別粘土を貼り付けて瓦当面を作る主に南都系（以下C技法とする）の特徴的な技法を基準に分類し、それらの分布図を作成する¹⁴。

（A技法）

A技法の軒平瓦は備前と備中の境付近を中心に分布が認められる（図60）。浅原寺¹⁵（図61）、真如院¹⁶（図61）、小丸山遺跡出土品（図10-8）のように硬質で瓦当部が大きいものと、堂敷山廃寺¹⁷（図58）、吉野口遺跡のようにやや軟質で、瓦当部のやや小さいものがある。分布の西端である浅原寺、真如院ではC技法も存在する。

小丸山遺跡や浅原寺や真如院出土の軒平瓦（図61）には瓦当部と平瓦凹面との接合部付近にヨコ方向のヘラナデが認められるなど東播の神出窯産軒平瓦と似た特徴がある一方で、焼成や文様は神出窯産のものとは異なっており、神出窯からの瓦自体の搬入とは考えられないようである。また小丸山遺跡からは神出窯産の椀と鉢¹⁸が出土している。神出窯産の椀や鉢は後の魚住窯と異なって東播磨の在地にしか流通しておらず¹⁹、広域流通品として小丸山遺跡へ移動してきたとは考えにくい。すると、播磨系のA技法の分布の中心付近に小丸山遺跡が位置することと考え合わせると、神出窯産の椀と鉢の移動とA技法の分布の広がりは、東播系の瓦工人が小丸山遺跡のある一宮周辺に移動して瓦窯を操業して周囲の寺院に瓦を供給していた可能性を考えたい。

瓦当で、平瓦凹面に僅かに粘土を薄く撫でによって延ばし、瓦当部が平瓦から垂直に下垂するこの技法の最も退化した形態のものが倉敷市福山寺出土²⁰のものにみられ、この技法の系譜は鎌倉期末から室町期までは存在していたものと推定される。

(B 技法)

B 技法は点的な分布で、小丸山遺跡や、備前東部の香登廃寺付近の北野窯跡³⁸で出土している。窯跡からの出土からこの分布付近で B 技法の瓦が生産されていたと考えている。小丸山遺跡の軒平瓦は平瓦端部を折り曲げるだけで粘土を補充しておらず瓦当の大きさも小さく、折り曲げた後に粘土で補充していく瓦当の大きさも大きい北野窯跡出土軒平瓦より後出するか、或いは丹波系、中央官衙系というような同じ B 技法でも系譜関係の違いとも考えられる。

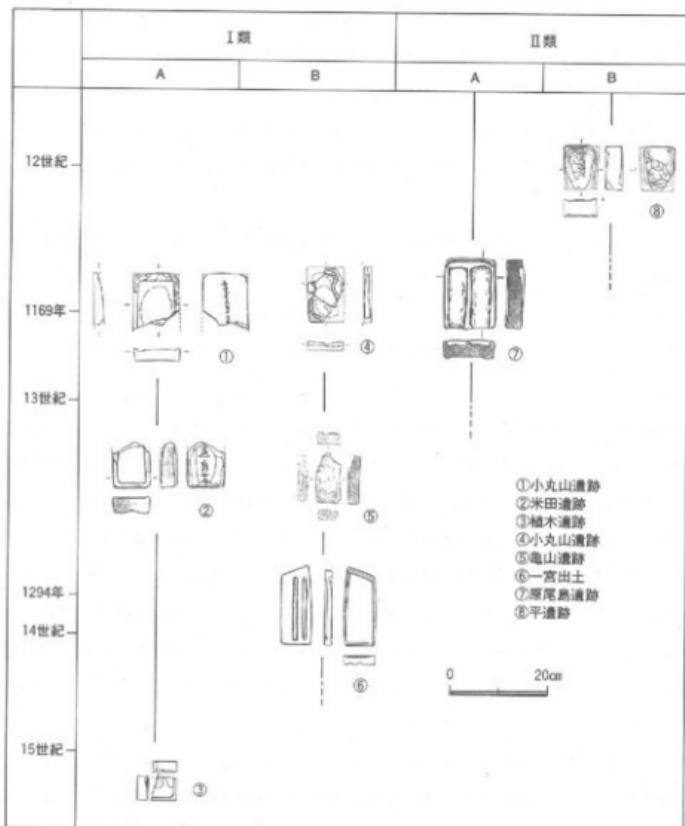
(C 技法)

A、B、C 技法のうち最も広範囲に分布し、出土例も多い。木藏神社タイプ軒平瓦はこの技法で形成している。この技法の上限は今のところ網之浜廃寺に求められ、A、B 技法より古い時期から認められる。また下限については、鎌倉期初頭の東大寺再建瓦³⁹や吉備津彦神社境内出土常行堂所用瓦⁴⁰と、鎌倉期末から室町期の倉敷福山寺で出土⁴¹しているものがある。

(小結)

大雑把な整理となったが、まとめると、まず木藏神社タイプ軒平瓦の分布は、従来より平安京に搬入された吉備系瓦の「在地寺院への供給目的」⁴²として「国衙管理下におかれ」⁴³ていたものを国司の成功により平安京へ搬入されたという評価と一致する。ただ亀山窯以前は、国衙の直接的な管理下にある瓦焼成専業の瓦屋というものを想定してもよいと考えるが、木藏神社タイプ軒平瓦を生産していた亀山窯は瓦陶兼業で、しかも操業当初から一般民衆レベルにも広く流通している壺、甕、鉢等の日常雑器を主体に生産されていることから、亀山窯が国衙の直営ではなく、国衙が集中生産地である亀山窯の成立には何等かの関わりがあった可能性は否定できないが、むしろ国衙の必要な瓦も請け負っている民間窯的な性格が考えられ、平安時代後半に国衙の瓦生産の経営に変化があったことが推定される。

また、ここでとり上げた特徴的な技法で作られた瓦の生産のうち、特に A、B 技法については他地域からの瓦工の移動を伴う造瓦技術の当地への直接的な伝播が考えられ、これらが幾つかの単位に分かれて分布し、しかも特定寺院への従属を示していないものも存在していそうなことから、各小地域での造瓦活動の主体的な展開が推定される。そしてこの様な多元化した瓦生産の背景には、庶民階層の自立的な成長による仏教受容層の拡大とそれに応じた仏教イデオロギー自身の変容に起因したこの時期の多数の寺院の建立にあると思われる。具体的にはそれまでの官寺や氏寺とは異なった立地の山岳寺院や、小規模なお堂しか備えていないような寺の造営に示される。特に、後者については瓦の供給が十分でなく「新旧混在する瓦を寄せ集めて」⁴⁴造った大内田廃寺⁴⁵や堂敷山廃寺⁴⁶の一部がこの時期の造寺の在り様を示唆している。



第62図 県下出土方形陶硯分類図

(3) 観について

今回出土した陶硯は二点で、台形と長方形の平面形をしており、いずれも包含層から出土した。そのうちの台形の平面形をした陶硯の裏面に「長寛二月十二日」の陰刻があり、県下で古代から中世にかけての紀年銘を有する陶硯の2例目となった。もう1例は岡山市一宮出土の「永仁二年(1294年)」銘のもので、長方形の平面形であるが、硯首が斜めになっており、やや特異な形態である。また他には百間川米田遺跡^aから「□応二月十日」銘の長方形の陶硯

が出土しており、遺構の年代観が鎌倉時代ということから、嘉應（1169年～1170年）、貞応（1222年～1223年）、延応（1239年）、文応（1260年）、正応（1288年）、元応（1319年）のいずれかの実年代が推定される。

さて古代末から中世の時期に見られる方形の陶硯については、「風字硯から次第に石硯の形に移り変わった形態」という考え方と、「新たに石硯を模して製作された新種」という二つの考え方がある。また一方で両者の考え方どちらも否定するという考え方もある。つまりは方形の平面形がそれまでの硯の主流を占めていた陶硯にいつから、どのような契機で用いられたのかという問題になると思われ、ここでは比較的出土点数の多いとされる岡山県下の当該期の硯を年代順に整理し、その点を考える上での基礎資料をつくりたいと思う。ところが併存する遺物からでも年代の分かるものは僅かで、かなりの推定を前提とすることになる。

〈分類〉

まず紀年銘を有するものからみてみると、硯首の形態など細部に於いてもかなり異なっている点があるが、大まかに12世紀後半から13世紀後半にかけて全体の形態が台形から長方形へと変化していくようである。

次ぎに紀年銘を有しない陶硯をその形態的な特徴のうち、下端の硯尻に縁帶を持つもの、或いは縁帶を線刻等で意識しているものを1類、縁帶を持たないもの、意識していないものを2類とし、さらに素文のものをAとし、施文などの装飾をしているものをBとして分類してみた。そうすると、紀年銘を有する小丸山遺跡出土の陶硯は1-A類の範疇に入る。

さて2-B類には百間川原尾島遺跡包含層出土の陶硯があり、類似した形態の石硯が平安京から出土しており、その年代観から12世紀～13世紀中頃が推定できる。2-A類は平遺跡出土のもので、片面に若干沈線が認められるが一応A類とした。包含層出土のため時期については明確でなく、平安時代中頃まで遡りうる可能性はある。1-B類には龜山遺跡包含層出土の陶硯があり、包含層の遺物から13世紀～14世紀の時期が考えられる。これまで出土しているなかで最も新しいのは、植本遺跡出土の陶硯で、遺跡の年代観から15～16世紀とされている。ただ他地域ではこの時期までに陶硯は姿を消しており、さらに類例の出土を待って再検討するつもりだが、ここでは一応陶硯の古代末から系譜的に辿れる最後の時期として考えておく。以上のことをまとめたのが図62である。

〈小結〉

資料数も少なく、年代的にも不明瞭な点の多い分類となったが簡単にまとめてみると、硯尻に縁帶を持つ1類が小丸山遺跡出土の長寛銘のある陶硯から植本遺跡出土の陶硯、即ち12世紀後半から15、16世紀まで継続的に見られる。一方硯尻に縁帶を持たない2類は13世紀中頃以降は殆ど見られない。

つまり、2類は中世の前半にのみしか見られず、硯尻に縁帶がないという形態上の特徴から、全体が方形の形状となっているが、8世紀末葉～11世紀に普遍的に見られる風字硯の系譜に繋がるもので、風字硯の最後の姿として理解できそうである。1類は中世後半まで見られることや、石硯と同じく時期が下がると台形から長方形へと平面形態が変化していることから、1類の陶硯は方形の石硯を模倣して作ったものと考えたいと思うのだが、今のところ1類で最も古く位置付けられる小丸山遺跡出土の紀年銘を有する陶硯は水野編年¹⁰の「台形硯ⅠAc」タイプの石硯に似ており、その石硯の年代観が13世紀中頃～14世紀で、特に14世紀に盛行したとされており、陶硯と石硯との間に100年程の差があり、時間的な齟齬は少なくない。当該期の石硯の資料の増加を待って再考したいと思うが、一応ここでは、方形陶硯には風字硯と石硯の系譜を夫々引くものがあり、前者は中世前半にはなくなり、後者は中世後半まで数は少ないが続くものと考えられる。

さて、陶硯の生産背景については「中世においては陶硯は、石硯の需要をおぎなうため、陶工の手によって細々と製作されていたにすぎない」¹¹という見解があり、実際の作業場での扱われ方はそうであったと思われる。ただ形態に個体差がかなり認められることや、生産遺跡での出土状態が単発であることが多いこと等から、一般的に生産、流通されるような商品ではなく、注文請負生産のような特殊な生産形態であったと推定する。そして小丸山遺跡出土の陶硯に極めて私的な理由の予想される年号を刻んでいることなどは、やや飛躍的な比較となるが、倉敷市安養寺裏山出土の瓦経から安養寺「近くで常に瓦を製作し供給していた工人の存在」¹²が予想されており、同じ様に、この陶硯の所属した小丸山遺跡周辺のいわゆる消費地とそんなに離れていない位置に、陶硯も作っている窯業生産地というものが推定される。そして、愛知県の渥美半島の東大寺瓦窯¹³が瓦以外に瓦経や瓦塔を、魚住窯¹⁴も須恵質土器、瓦以外に陶硯を焼成していることから、その生産地は一宮周辺で操業していると予想したA技法の瓦を焼成している工房である可能性を考えている。

(4) まとめ

小丸山遺跡の時期幅は、検出された土器により12世紀末から形成が序々に始まり。13世紀中頃がピークで、その後急速にこの地点での生活痕はなくなる。ただ発掘区が小丸山遺跡の南端であるため、建物等の具体的に遺跡を構成する主要な遺構の在り様は明確ではないものの、調査区北側の遺跡中心部からの斜面堆積が当地点の包含層に当たると考えられることから、当地点での時期幅が概ね小丸山遺跡全体の時期幅を示しているものと考えている。



第63図 小丸山遺跡周辺小字分布図

また遺跡の立地については、砂川と中川の両中小河川によって形成されたと考えられる粗砂層を基盤にしており、調査区北端の小丸山に非常に近い地点でもしっかりした基盤層は確認されないことから、北側の遺跡中心部に於いても同様であると推定され、この遺跡は河川敷に形成されたものとされる。

成されたということが言える。そして遺跡の周囲には農耕に適した耕地もそれ程多いとは思われず、農村集落というような景観とはやや異なっていたと考えられる。また、13世紀中頃以降は数層の水田層が確認でき、学校の敷地となる以前の水田景観が13世紀中頃まで遡るようである。

まず当地点が13世紀中頃以降に水田化されたことについて若干考えてみたいと思う。小丸山遺跡の小字は「長善名」で、「ちょうぜんな」と現在読むが、「な」は「みょう」と読み、本来は「名」を示すものであったと思われる。そして「名」を設定するにあたって「官人・僧侶が実名を出すことを憚って…めでたい名前、嘉名^モ」を用いるという場合もあり、「長く善く」という意味の「長善名」もその例に当てはまるものと思われる。一般に「名」は10世紀初頭以降に出現し、「公田請作を本質とする徵税単位^モ」で、耕地に対する「課税の対象として編成された^モ」とされ、11世紀中頃以降在地領主（開発領主）が「特定の地域を開発して、一定量の官物を国衙に納入するという条件で、その地域の管理・運営権を得て、実質的な支配権を獲得^モ」していった「別名」を経て、12世紀の院政期以降の「莊園領主がその中の土地人民に対する支配権をもつ^モ」莊園公領制が成立する。そして「名」はその莊園内の「支配=收取の基本的単位^モ」として存在した。そうすると「長善名」という小字が現在まで残っていることは、この小字と小丸山遺跡の推定範囲がほぼ重なることから（図63）、ある時期以降小丸山遺跡は、年貢、公事を賦課される何かの所領となったという推定もできる。そして調査区内での13世紀中頃以降に急速に生活痕がなくなり、現代まで続く水田層が形成されていることを小丸山遺跡全体の様相として仮定すると、13世紀中頃に自然的な要因か、人為的な要因かは明確でないが、小丸山遺跡が集落空間から耕作地空間へと転換したのは、それが所領化された、或いは所領化によって耕地化された結果と考えられる。

次に13世紀中頃以前の当地点に形成された集落の性格について若干考えてみる。小丸山遺跡周辺は辛川という地名で呼ばれていたと考えられる。辛川は、『太平記』に出てくる「福山合戦（建武三年（1336年））」の後東上途上の足利直義が逗留した「唐河の宿」や、今川貞世の書いた紀行文『道行ぶり』で貞世が九州に行く途中で宿泊した「から川」などにあたるとされ、中世に於いてこの辺りに『海道記』、『東闇紀行』に出てくるような「専門の宿屋を主体とする^モ」集落が形成されていたことが窺える。また旧山陽道に想定されるラインに接して「市場」の小字（図63）が残っていることなどは、尾張国萱津の宿と同様に宿であるのと同時に市場（市庭）の開かれる場所^モであったと考えられる。しかもこの辺りが大字辛川市場であり、辛川市場周辺や砂川中に中世の土器が多数散布している（図5）ことから、鎌倉時代後半頃に定期市としてある程度固定化するまでは山陽道という陸路と砂川、中川、笠ヶ瀬川という水運との交通の結接点である辛川周辺に市場（市庭）空間が広範に存在していたものと推定できる。そし

てそれらは『一遍聖絵』における遠江国蒲原宿や『北野天神縁起』に描かれた攝津国難波津等の絵巻物分析から指摘された³⁰「地方の都市的な町屋の景観」である「疎塊村的」に散在する町屋群³¹と非常に似たものと推定される。辛川市場（市庭）空間がいつ形成されたのかは、周辺の発掘調査等が行われていないため具体的にはよくわからない。しかし鎌倉時代初頭には焼失した東大寺再建のための歎進職となつた俊乗坊重源が備前國の実質的な国司となって赴任し、恐らく精神的、経済的な拠点とする目的で、辛川市場南にある備前一宮の吉備津宮内に「常行堂」を建立したことは、吉備津宮の門前周辺から辛川市場にかけての現在の一宮辺りが、当時の備前國の経済的な核の一つとなっていたことに起因するものと思われる。

また「唐河の宿」前身については、「備陽國誌」では『延喜式』卷二八の諸国伝馬記載の津高駅に比定しており、最近までその意見は支持されていたが、具体的に駅家を示すような遺物がないことや、西にある津畠駅に比定される矢部遺跡や東にある高月駅に比定される山陽町馬屋からの距離的な関係から、現在は辛川市場より散泊峠を東へ越えた位置にあり、平城宮六二二五・六二二三式の瓦が出土している富原南遺跡を津高駅屋に想定する考え方³²が支持されている。

いずれにせよ中世に於いてこの地は、市場（市庭）空間を有する宿として存在していたと考えられる。すると小丸山遺跡に於いて13世紀初頭に多く建てられる建物群は、遺跡中心部の建物構造については調査区外になるためわからないが、少なくとも調査区内での建物の様相は『一遍聖絵』に描かれた備前國福岡市の場面にでてくる商品を売る握って立小屋に近く、河川敷という農業の生産地にはあまり適さない空間に建物が形成されだすこととを根拠に、小丸山遺跡を辛川市場（市庭）空間を構成する市場（市庭）の一部であると考えたい。ところが「現存の史料に見られる京都・奈良・鎌倉などの都市以外の地域での市場」が13世紀中頃から急速に増加していくことが指摘³³されており、このことと小丸山遺跡が13世紀中頃から急速に遺構、遺物のなくなる様相とは対称的といえる。また一方で、市場については13世紀後半から「地頭らが市場法を制定しはじめて」掌握していくことも指摘されており、小丸山遺跡の消長についても、広範に疎塊村的に存在していた市場（市庭）空間が在地権力によって固定的に把握、統合されていく鎌倉時代後半の姿としてとらえ、文献資料に多くみられるようになる「市場」についても同様に理解できるのではないかと予想している。

ともあれ12世紀後半から13世紀中頃に一宮周辺に分布する土師質土器、「包み込み技法」の瓦、硯等の物資の流通拠点として市場（市庭）空間が存在し、その流通圏が律令的な行政区分に規定されないで形成されている。そしてこういった性格の流通圏は一宮だけでなく、土師質土器の流通圏が律令的な行政区分を細分している他の周辺地域にも形成されていたものと推定している。

さて、以上のことから、小丸山遺跡の建物の形成と消長は、自然発生的、或いは一般民衆の自立的な結集による市場（市庭）空間の運営が、在地領主層などにより固定的に把握、統合されていく過程を示していると考えられ、13世紀中頃以降造構と遺物が急速に見られなくなる背景を市場（市庭）の山陽道付近への固定化と小丸山遺跡の名田化に位置付けたいと思う。

- (註1) 松本和夫他「上相遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』3 1973年
- (2) 正岡陸大他「百間川原尾島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』56 1984年
- (3) 吉田昌『日本古代村落史序説』塙書房 1980年
- (4) 間壁忠彦「岡山県並岡走出の祭祀遺跡」『倉敷考古館研究集報』第2号 1967年
- (5) 西川宏『第六章第二節第三祭』『岡山県史』第二卷・原始・古代 I 1991年
- (6) 鎌木義昌「備前高島遺跡」『岡山県史考古資料』 1986年
- (7) 水原岩太郎「考古行脚(一)早島行」『古備考古』32号 1937年
- (8) 福田正徳他「百間川当麻遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』46 1981年
- (9) 百瀬正恒・橋本久和・中野平安京の土器様相と各地への展開』『月刊考古学ジャーナル』229 1988年
- (10a) 中野雅美他「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 1977年
b 神谷正義他「三手(庄内幼稚園)遺跡発掘調査報告」岡山市遺跡調査団 1981年
- (11) 伊東晃「窯業」『岡山県の考古学』吉川弘文館 1987年
- (12) 武田恭彰「古備系土器鉢の製作技法について」『中近世土器の基礎研究』Ⅶ 1991年
- (13) 鈴木康之「土師質土器の成形技法に関する研究ノート」『草戸千軒』二一七 1991年
- (14) 橋本久和・中世土器の製作ノート(1)『中世土器の基礎研究』Ⅲ 1987年
- (15) 馬場昌一氏より御教示を得た。
- (16) 武田恭彰「古代土器生産についての一予察(2)『古代吉備』第12集 1990年
武田恭彰氏より御教示を得た。
- (17) 出宮龍尚他「天神南遺跡発掘調査概要」『岡山市文化財年報』1 1978年
- (18) 岡山市教育委により発掘調査を実施
- (19) 鈴木康之「広島県における中世土器について」『中近世土器の基礎研究』 1985年
- (20) 同時期の土器群中に法量が一定の範囲に集中するものと若干突出するものが併存する理由は輪の成形法に起因すると考えている。
- (21) 馬場昌一・「岡山県助三町遺跡出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』第四号 1984年
- (22) 篠原芳秀「尾道市浄土寺所蔵の土師質土器」『草戸千軒』一一四 1982年
- (23) 伊野近富「かわらけ考」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 1987年
- (24) 村上幸雄他「備中國守跡緊急確認調査」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』7 1989年
- (25) 村上幸雄他「清水角遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』1 1984年
- (26) 高橋知功能「繩本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』65 1987年
- (27) 註(9)
中野雅美氏より資料を実見させて頂いた。
- (28) 伊東晃他「沖の店遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』42 1981年
- (29) 岡山市教育委員会により発掘調査を実施
- (30) 山本悦世他「鹿田遺跡」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第3冊 1988年
- (31) 国本寛久他「百間川木田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』74 1989年

- (22) 江見正己他「岩間遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』46 1981年
江見正己氏より資料を実見させて頂いた。
- (23) 馬場昌一氏より資料を実見させて頂いた。
- (24) 武田恭彰「岡山県における古代末期の土器様相」『土器からみた中世社会の成立』シンポジウム実行委員会 1990年
武田恭彰氏より御教示を得た。
- (25) 近藤高一「瓦からみた平安京」教育社 1985年
- (26) 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』十三・十四合併号 1978年
- (27) 根木修「第八章第四節中世仏教関連遺跡」『岡山県の考古学』吉川弘文館 1987年
- (28) 吉村正義「平安京城出土瓦とその生産」『中近世土器の基礎研究』Ⅲ 1987年
- (29) 玉井伊三郎・藤沢一夫『吉備古瓦図鑑』第2 1941年
- (30) 福本明治「浅原寺跡」『倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告』第1集 1984年
- (31) 岡田博「龜山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』69 1988年
岡田博氏より資料を実見させて頂いた。
- (32) 伊藤虎雄「平安京豈楽院の遺物」『古代学』第6巻第4号 1958年
- (33) 平安京調査会「平安京発掘調査報告ー左京四条一坊」1975年
- (34) 吉備考古館長宮岡廉文氏より資料を実測させて頂き、図面掲載の承諾を得た。
- (35) 萩原克人「秦原廃寺」『絶社市史』考古資料編 1987年
- (36) 的場勇氏より資料を実測させて頂き、図面掲載の承諾を得た。
- (37) 伊藤見他「黒土寒田五号窯址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』31 1979年
- (38) 萩原克人他「二子御堂與古窯址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』2 1974年
- (39) 根木修「第八章第二節中世の遺跡」『岡山県の考古学』吉川弘文館 1987年
- (40) 武田恭彰「瀬戸内の土器」「古代の土器研究—律令的土器様式の西・東」古代の土器研究会 1992年
- (41) 荣原永遂男「奈良時代の流通経済」『史林』第55巻第4号 1972年
- (42) 大川清「かわらの美」社会思想社 1966年
- (43) 萩原克人他「備前国分寺跡緊急発掘調査報告書」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』10 1975年
- (44) 萩原克人「備中國分尼寺」『絶社市史』考古資料編 1987年
- (45) 萩原克人「三領廃寺」『絶社市史』考古資料編 1987年
- (46) 福木明氏より資料を実見させて頂いた。
- (47) 根木修「仏像保存修理報告書」岡山市遺跡調査団 1978年
片岡義賛氏より資料を実見させて頂いた。
- (48) 吉備考古館長宮岡廉文氏より資料を実見させて頂いた。
- (49) 谷正俊氏より御教示を得た。
- (50) 岡本寛久「泉瓦窯跡・万富東大寺瓦窯跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』37 1980年
- (51) 上原真人「瀬戸内海を渡ってきた瓦」「大阪湾をめぐる文化の流れ」帝塚山考古学研究所 1987年
- (52) 高畠知功他「天神坂遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』53 1983年
- (53) 岡山市教育委員会・岡山市立オリエント美術館「吉備の古代瓦」1980年
堂敷山出土の平城宮式軒平瓦についても大内田庵寺と同様の性格のものと予想している。
- (54) 椎崎彰一「日本古代の陶硯」『考古学論考—小林行雄博士古希記念論文集』平凡社 1981年
- (55) 井上弘他「百間川米田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』74 1989年
- (56) 石井則孝「陶硯について—その1~5」「史館」1~6 1973~1976年
石井則孝「陶硯」ニューサイエンス社 1985年
- (57) 水野和雄「日本石硯考」『考古学雑誌』70~4 1986年

- 88 平井泰男他「百間川原尾島遺跡2」 「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書」56 1984年
- 89 田仲満雄他「平遺跡」 「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書」8 1973年
- 90 正岡龍夫他「亀山遺跡」 「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書」69 1988年
- 91 田仲満雄他「植木遺跡」 「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書」11 1976年
- 92 間壁蘿子「備中スエと瓦」 「倉敷の歴史」第2号 倉敷市史研究会 1992年
- 93 愛知県教育委員会「渥美半島埋蔵文化財調査報告書」 1965年
- 94 鶴柄俊夫他「魚住古窯跡群発掘調査報告書」 明石教委・平安博物館 1985年
- 95 阿部猛「人物でたどる莊園史」 東京堂出版 1990年
- 96 稲垣泰彦「第三章律令制的土地制度の解体」 「土地制度史Ⅰ」 山川出版 1973年
- 97 森田悌「受領」 教育社 1978年
- 98 中野栄夫「日本中世史入門」 雄山閣 1986年
- 99 石井進「日本歴史7・鎌倉幕府」 中央文庫 1974年
- 100 保立道久「宿と市町の景観」 「季刊自然と文化」13 日本ナショナルトラスト 1986年
- 101 伊藤見「富原北庵寺・富原遺跡」 「岡山県史考古資料」 1986年
- 102 細野善彦「日本の歴史10・蒙古襲来」 小学館 1974年
- 103 森栗茂「河原町の民俗地理論」 弘文堂 1990年
- 104 中部よし子「中世都市の社会と経済」 日本評論社 1992年



小丸山遺跡遠望（辛川城から）



近世面、池状遺構（西から）

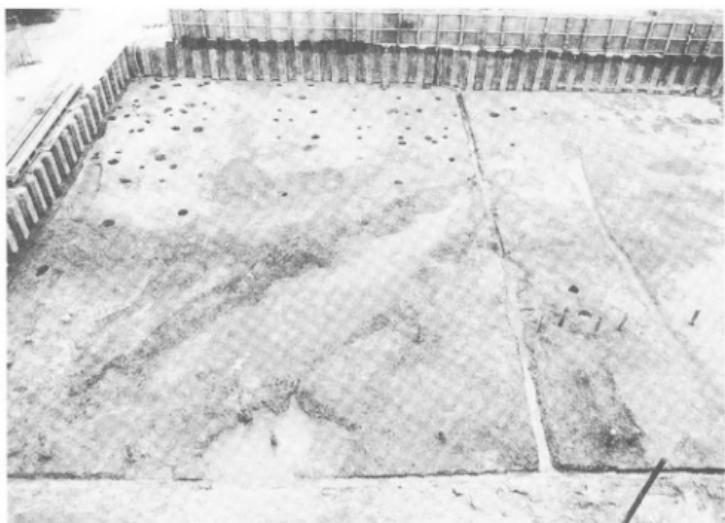
図版第2



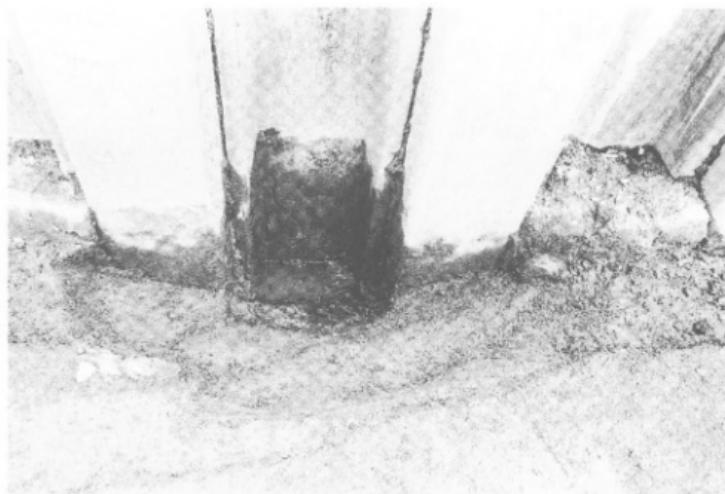
近世面、南側（西から）



中世面、柱穴群（北から）

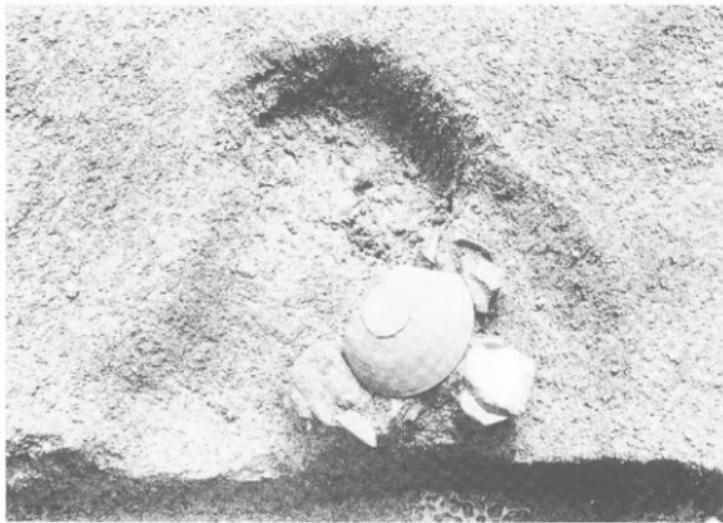


中世面、北側（西から）

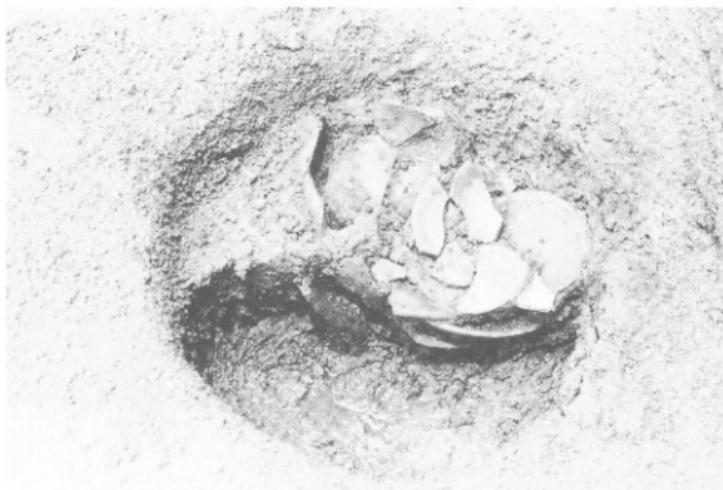


井戸状遺構

圖版第 4



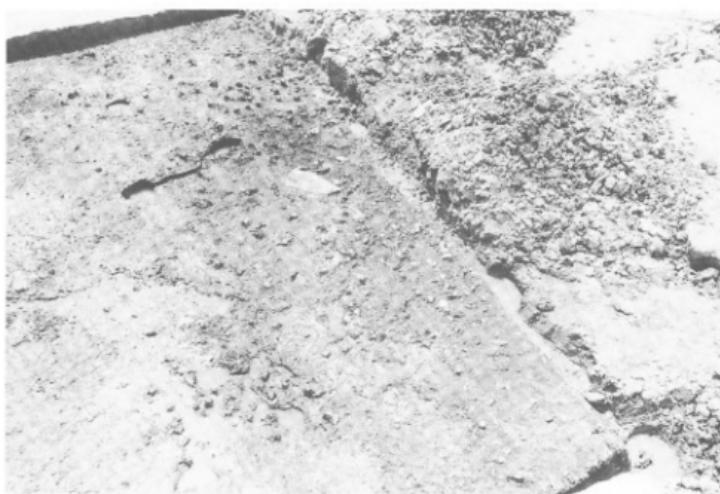
土壤 1 遺物出土状態



土壤 2 遺物出土状態

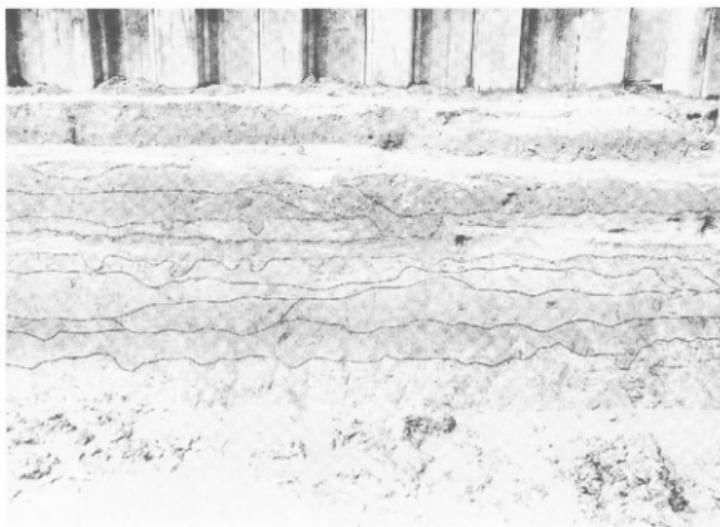


土壤 3 遺物出土状態

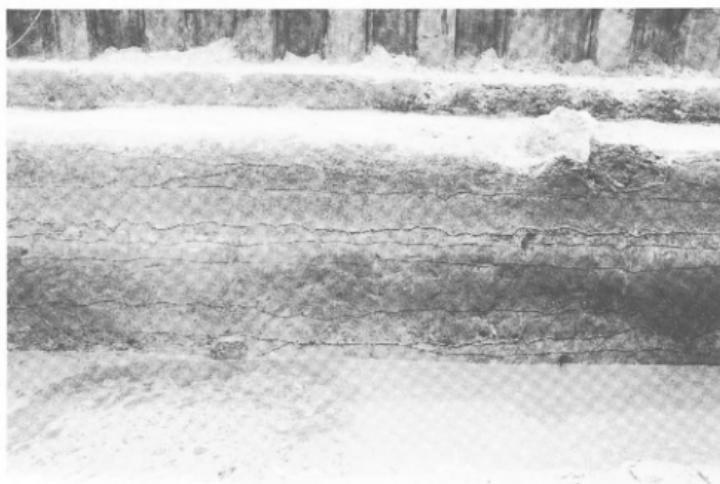


土器溜り遺物出土状態

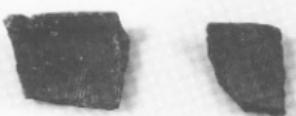
図版第 6



調査区西壁北側



調査区西壁南側



5、6、7



5、6、7



8



8



19



19



20

图版第 8



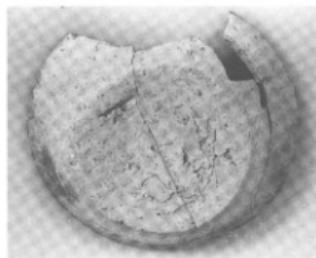
24



24



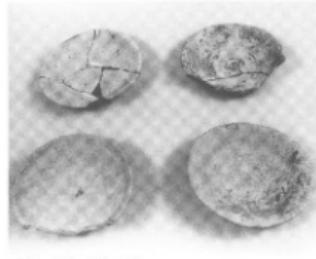
25



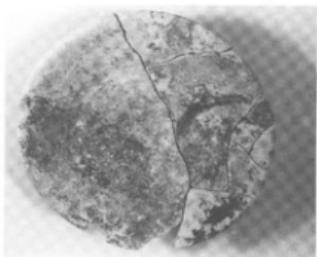
25



28、29、30、31



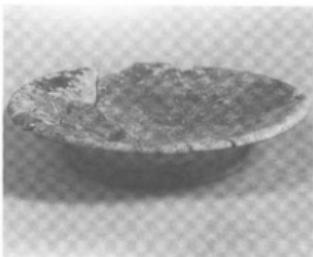
28、29、30、31



27



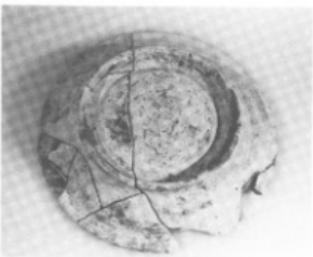
32



27



32



27



32

図版第10



36、37、38



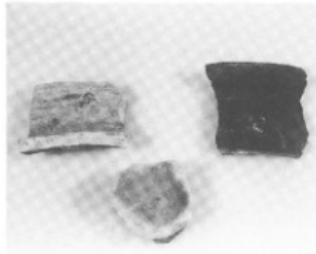
36、37、38



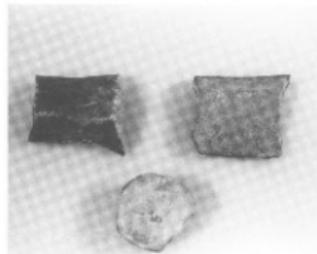
39、40、41



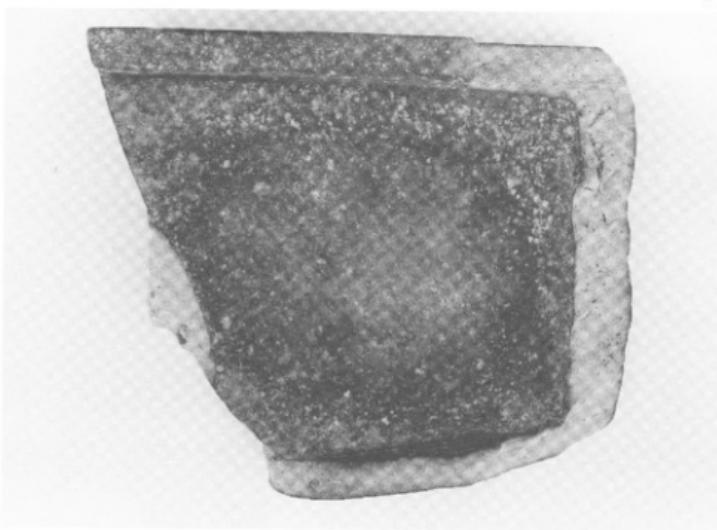
39、40、41



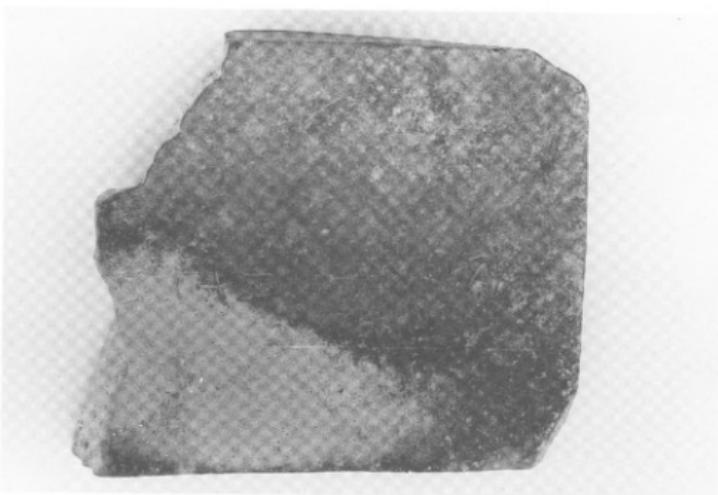
42、43、48



42、43、48



160



160

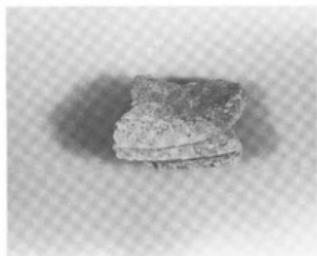
图版第12



161



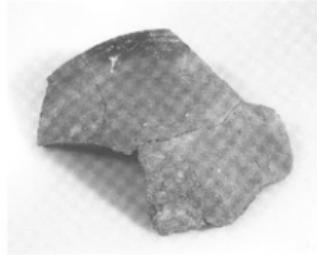
162



170



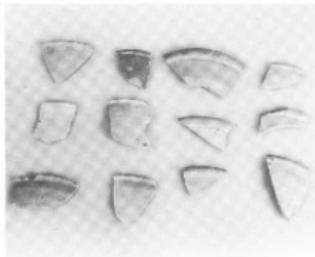
170



154



154



白磁



白磁



黑磁



黑磁



白磁

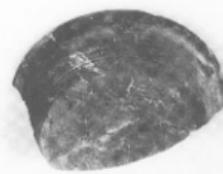


白磁

图版第14



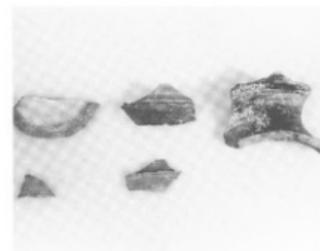
151



151



87



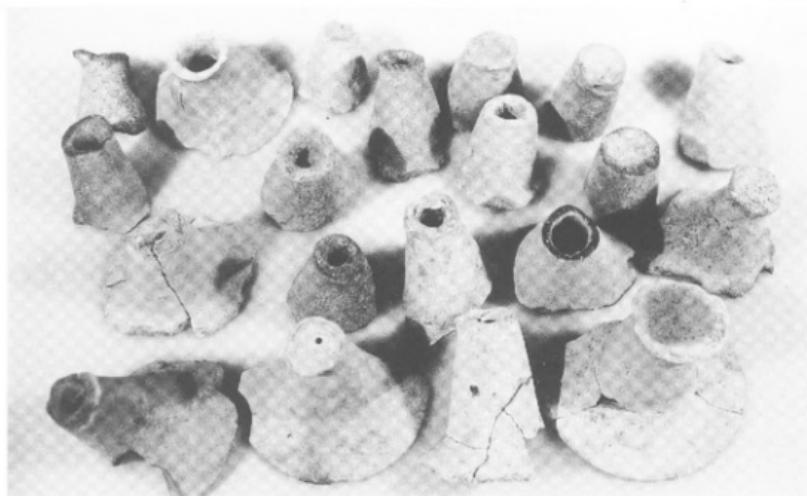
61、62、63、64、65



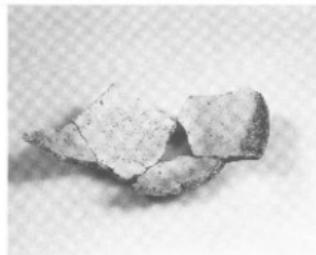
87



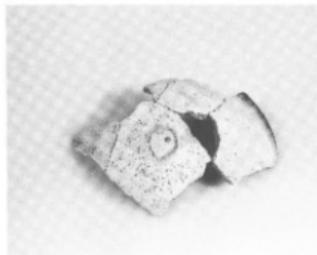
91



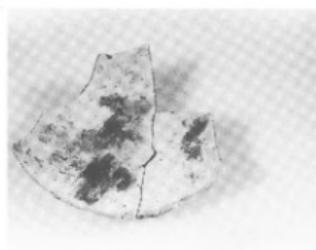
土器片



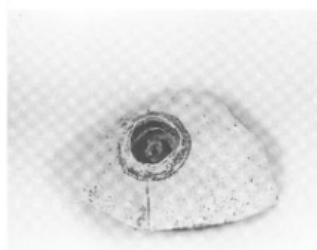
71



71

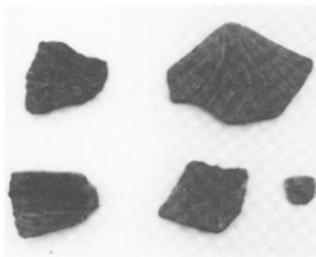


76

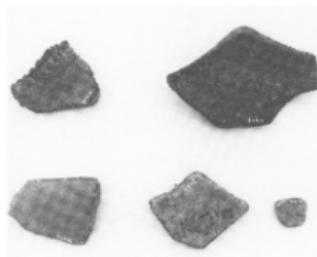


76

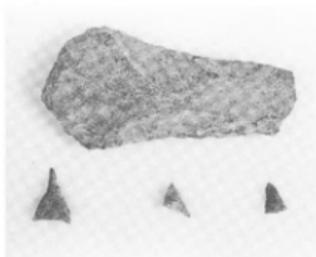
図版第16



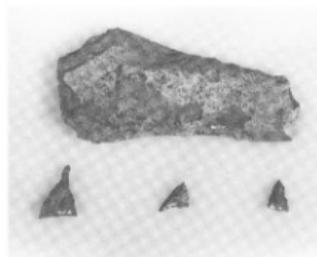
辛川大池遺跡



辛川大池遺跡



辛川大池遺跡



辛川大池遺跡



辛川大池遺跡



西岡遺跡

あ　と　が　き

現在、私たちの生活しております地面の下には歴史の豊かさを示す多くの文化遺産が存在しており、これらは埋蔵文化財と呼ばれる市民共有の先人達の遺産であり、子孫へ確かに伝えていかなければならない財産であります。

ところが丘陵そのものを削り取ったり、地下数メートルの地盤の掘削をも伴う最近の開発の激しさは、自然環境の破壊や公害問題はもとより、文化遺産に対しても極めて危険な状況を招来させています。岡山市教育委員会の文化課も文化遺産の保護と調査に努めていますが、土地と一体となっています埋蔵文化財の保護行政は開発か文化財の現存かのまさに二者択一の修羅場であります。こうした状況の内で、両者の整合を少しでも図るべく記録保存の発掘調査を実施していますが、その社会的要請は天井知らずの恐れさえ覚えさせられます。私は、各種の発掘現場に立つ都度にその奥行きの深さと掛け替えの無さを痛感させられ、文化財保護行政の實務の重要性を改めて肝に銘じるところです。

此度の発掘調査は、市立中山中学校のプール及び柔剣道場新築事業に起因したものです。調査は対策委員の先生方のご指導と、多くの関係者の皆様方のご尽力とご協力により無事終了し、ようやくここに報告書の刊行にまで漕ぎ着けました。極暑下での作業を思い出しながら、各位にここに感謝申し上げます。

発掘調査の成果はこの報告書にまとめましたが、今後の埋蔵文化財の保護保存と調査に、さらに私達の共有財産である郷土の文化財に対する理解と認識を深める一助となることを願うものです。

最後に、此度の発掘調査並びに報告書の作成に厳しい状況の下で精力的な取り組を遂行させた文化課の関係職員の労を多とします。

平成5年3月31日

岡山市教育委員会社会教育部

文化課長 青 山 淳

小丸山(中山中)遺跡発掘調査報告

平成5年3月31日発行

製作・編集 岡山市教育委員会文化課

発 行 岡山市教育委員会

岡山市大供1-1-1

印 刷 旭総合印刷株式会社